

学輪 IIDA 共通カリキュラムフィールドスタディ 2023

地域経済フィールドスタディ報告書

令和5年8月20日（日）～23日（水）

目次

事業概要	・・・P1
カリキュラム	・・・P4
参加者名簿	・・・P5
実施後アンケート	・・・P7
感想レポート	・・・P19

■令和5年度 学輪 IIDA 共通カリキュラム・展開科目：

「地域経済」フィールドスタディ（FS）の概要（シラバス）

1. FS の概要と到達目標

地域経済を担う企業や、財政赤字に直面しつつ公共政策に取り組む地方自治体は、人口の首都圏一極集中と少子高齢化による地域人口減少の激化により大変厳しい状況に立たされている。それに対して「地方創生」の名の下における多くの財政支援とともに、地域の懸命な努力によって「地域経済の活性化策」が模索されている。

しかし、地域経済をめぐる基本的な理解が不十分な中で闇雲（やみくも）に努力を重ねても、持続的・内発的な地域経済発展は望めないであろう。また、グローバル化が進展した現代においては、地域社会の大きな変化の特徴を十分に把握した上での産業振興の重要性が一層問われているだろう。

本カリキュラムでは、地域における経済活動と、変化する地域社会との関係性を学び、持続可能な地域のあり方について考えることを主要なテーマとする。とりわけ、地域の持続可能性を考える上で重要な【環境】【社会】【経済】という3つの側面を向上させ調和させていくために必要な経済活動のあり方を考えたい。それは昨今注目されているSDGsを、自らが生活する地域を通じて探求するための手掛かりにもなるだろう。

本FSでは、事前学習による基礎的・理論的な知識の学びを踏まえて問題関心を持ち、地域経済振興に取り組む組織、企業、市民活動実践者等によるレクチャーと実態調査から能動的に学ぶことを通じて「自己教育力」を鍛え、さらに他大学学生や地元高校生とのグループワークによって地域経済が抱える課題の解決策を論理的に提示できる「課題解決力」を修得することを到達目標とする。

2. 飯田で学ぶ「地域経済FS」の意義と目的

・地域経済の活性化は、モノやサービスを地域内の資源や知恵を活用して創り出し、地域外に販売してマネーを稼ぐ「基盤産業」の成長と、稼いだマネーの「基盤産業」への再投資や、小売業や福祉、教育など地域内の人々の生活を豊かにする産業である「非基盤産業」における消費を通じてマネーを循環させることが不可欠である。飯田・南信州地域は、地域資源に立脚しつつそれらを磨き構築した地域ブランドを活用した多様な基盤産業を、時代の変遷に合わせて柔軟に発展させてきた歴史がある。と同時に、公民館活動などで培われてきた「当事者意識」をベースにして、地域課題を行財政に頼らずビジネス的手法を用いて持続的に解決する「非基盤産業」の展開を見ることが出来る。本地域において「地域の特徴を活かして稼ぎ、漏らさずに循環させる」ことを様々な事例を通じて学びを深めることは、地域経済の本質を理解する上でまたとない機会になるであろう。

・本FSの目的：地域社会の特質（ソーシャル・キャピタル）が、地域経済のあり方（多様性）をどのように特徴づけているのか？という「社会構造と経済活動の関係性」に関する問題意識を、飯田・下伊那地域の事例を通じて醸成する。その上で、「コミュニティの衰退・解体」や「自治機能の低下」から生じる地域社会の諸問題の解決において、地域資源を活用した経済活動がどのように貢献していくのか？またその課題は？という問いを、自ら考え、解決へ向けた提案ができるようになる。

・目的の具体化：

①「地域のつながり」を再構築、あるいは代替することによる地域の持続性を目的とした子育て、教育、福祉、医療、環境保全、商店街活性化などの取り組みの、立ち上がりからビジネス展開を通じた可能性を探る。

②地域資本（中小企業やその連合体、地域金融機関など）の連携・協働や、地域資本と外部資本との関係性のあり方を学習することを通じて、地域経済の自律・自立性について考察する。

③「都市と農山村」との関係性や地域政策の歴史的展開を学び、着地型観光や関係人口創出、定住促進など「これからの都市と農村との関係」のあり方を考える。

3. カリキュラム概要と特徴

(1)カリキュラム構成

カリキュラムは、①事前学習、②現地におけるコア・プログラム、③事後学習から構成されている。

①事前学習

事前学習は、大学生については4本のオンデマンド講義動画視聴による地域経済に関する基礎的・理論的学習を主としている。また、高校生については事前に合同現地学習会を開催し（7月21日）、対面講義・質疑応答によって理解を深め機運を高める機会を作ることとする。別途、地域経済に関するワークショップを「ムトスぷらざ」にて開催予定である。

②コア・プログラム

コア・プログラムは、①佐藤健飯田市長による地域経済振興の課題に関する講義、②現地における関係者からのレクチャー受講及びヒアリング調査、③グループワーク・質疑応答、④班ごとのプレゼン準備・発表、から構成されている。各班は、参加大学学生・地元高校生の混成チームとして構成される。

③事後学習

参加学生は振り返りレポートの作成・提出を通じて事後学習を行う。また、各参加大学・高校では、任意で事後学習として、クラスやゼミ等での振り返りレポートの発表会を行うことも推奨される。

(2)調査対象事例 ※別紙参照

4. 参加費用

参加費として参加者1名につき、30,000円を徴収する。

5. 参加大学・地元高校（68名）

(1) 大学： 大月短期大学 16、大正大学 6、東洋大学 9、立命館大学 17、和歌山大学 11（五十音順）
計 59名

(2) 高校： 飯田 OIDE 長姫高校 2、飯田女子高校 7
計 9名

以上

令和5年度 地域経済フィールドスタディ事例調査

内 容	
<p>《テーマ》 地域コミュニティと経済 (学習対象) 地域コミュニティが主体となった教育、子育て、高齢者福祉等の活動 【選択コースA】</p>	
1	<p>千代しゃくなげの会</p> <p>千代しゃくなげの会は、地域住民が地元の保育園閉園の危機をきっかけに立ち上げた社会福祉法人。現在、保育園を2園とデイサービスセンターを1ヵ所運営している。基本理念のポイントは、①地区一人一人が直接的または間接的に運営に関与、②地域の子供やお年寄り地域で守り育てるである。</p>
2	<p>十三の里・小野子にんじんクラブ (上久堅地区)</p> <p>上久堅地区は、飯田市の中でも高齢化率が高く、市街地からも離れており買い物など不便。そんな中で地域の人が集まり地元で収穫された食材を使ったお弁当宅配サービスを始めた。地区の皆さんが提供してくれた新鮮な野菜を使い、美味しく栄養豊富な食事を提供している。 地域振興のため、かつて盛んに作られていた小野子にんじんを地区の有志で復活させ商品化。現在は6次産業化にも取り組んでいる。</p>
3	<p>上久堅地区地域おこし協力隊 (空き家対策の取組み)</p> <p>上久堅地区では、住環境を守っていくため空き家対策に力を入れている。まちづくり委員会の役員が家主に声をかけ、片付けなども手伝いながら空き家バンクを活用し、移住者募集につなげていく。</p>
<p>《テーマ》 環境と経済 (学習対象) 市民出資による新電力会社、間伐材を利用したペレット製造等の再生可能エネルギー活用 【選択コースB】</p>	
1	<p>飯田まちづくり電力(株)</p> <p>飯田まちづくりカンパニー、飯田ケーブルテレビ、おひさま進歩エネルギーの出資による新電力会社。飯田市と包括連携協定を締結し、地域内で発電された電力の提供による地域内財貨循環だけでなく、小中学校など環境教育、地域課題解決に資する取組みの展開を目指す。</p>
2	<p>飯田市ゼロカーボンシティ推進課</p> <p>2050年ゼロカーボンシティ実現を目指し、エネルギー政策に特化して展開している部署。 1997年から太陽光発電設備設置補助をスタートし普及に努めてきたことに加え、木質バイオマスエネルギー機器や水力発電等の普及や省エネルギーの推進によるゼロカーボン化を推進している。2013年には、「飯田市再生可能エネルギーの導入による持続可能な地域づくりに関する条例」を制定し、再生可能エネルギーを活用した地域自治の振興を行う「エネルギー自治」を推進している。 2009年に内閣府から「環境モデル都市」、2022年には環境省から「脱炭素先行地域」に選定。</p>
3	<p>中部電力株式会社</p> <p>2011年のメガソーラーいっだ建設を皮切りに、飯田市の環境文化都市構築に対してパートナーとして事業を推進。2020年には「地域循環圏構築による持続可能な地域づくりに向けた包括連携協定」を締結し、「くらし」と「まち」のあり方を追求。このことを通じて、持続可能な地方都市のモデル構築を目指している。 2022年には、飯田市との共同申請が脱炭素先行地域に選定され、現在、地域マイクログリッドをはじめとした各種取組を推進。2050年に向け、「脱炭素化」の取り組みやDXの進展に伴い、「分散・循環型」の社会になっていくと同時に、「レジリエンス(安心・安全)」のニーズが高まっていくと想定される中、このような社会システムの変革に貢献するため、地域や各セクターとの連携を大切にしながら、まちづくりへの参画、地域密着型サービスの領域拡大、エネルギーや資源の最適循環を実現する事業への参画などを通じて、「新しいコミュニティの形」の提供を加速化し、「安心・安全で強靱な暮らしやすい社会」の実現に貢献すべく事業活動を展開している。将来的には地域通貨と連動させることで「省エネと経済循環」を行っていくことを検討中。</p>
4	<p>南信バイオマス協同組合</p> <p>林業関係である民間5社が廃材の再利用、地域木材を生かした地産地消のエネルギー利用、二酸化炭素の排出を削減を目的に間伐材を原料とした木質ペレット、住環境資材としての提供・普及に取り組んでいる。</p>
<p>《テーマ》 多様な産業・主体の連携と経済 (学習対象) 共通の課題認識から生まれた地域連携、中小企業連携を基盤とした最先端産業(航空宇宙産業) 【選択コースC】</p>	
1	<p>天竜川鷲流峡復活プロジェクト</p> <p>・地域内の共通の課題解決のために、事業者と地域が連携し協働で取り組んだ事例。 ・竜丘地域自治会と事業者(天竜舟下り㈱)の連携で鷲流峡の環境美化に取り組むことにより、住民等の美化意識向上を図るとともに、良好な景観の維持、不法投棄やポイ捨てが行われない地域づくりを目指している。 ・放置竹林の伐採、維持管理作業、周辺の清掃等の景観保全に努めながら、環境教育・産業という視点で、竹を使いたいかだ下りや、竹ボイラーのエネルギーへの活用、メンマの開発販売、竹灯笼看板の製作販売を行うなど、プロジェクトは様々な取り組みへと広がっている。【純国産メンマプロジェクト】</p>
2	<p>NESUC-IIDA</p> <p>地域の企業が保有する知能、技術、市場などの経営資源を実質的に連携させ、「共同受注」「大手企業との連携」「新産業分野の開拓」「情報の受発信」ができる『支援センター』を第三セクターで設立し、受注確保や地域産業の集積化・ネットワーク化を進め、地域産業の振興を図る。(公益財団法人南信州・飯田産業センター)</p>
3	<p>南信州・飯田産業センター (工業技術センター・飯田EMCセンター)</p> <p>地場産品の情報発信・展示・販売を目的に、長野県、市町村、企業が出資して設立された。現在は、「新産業創出支援」「人材育成支援」「地場産業高度化ブランド化支援」「販路開拓支援」に力を入れている。リニア時代を見据え、「ものづくりの高度化・高付加価値化」を目指している。</p>

地域経済フィールドスタディ カリキュラム

日程	時間帯			【地域経済】 テーマ：経済活動と地域社会の関係性を学び、持続可能な地域のあり方を考える	講師	会場	
	開始	終了	分				
事前学習① 7/21(金)	高校生			・地域経済の基礎構造と飯田市経済の特徴(榎平先生) ・飯田の地域産業の振興方策を考える(河藤先生:オンライン)			
事前学習②	オンデマンド動画 および資料提供			・地域経済の基礎構造と飯田市経済の特徴(榎平先生) ・公共政策と自治体行財政(平岡先生) ・SDGsと地域金融(西山先生) ・地域資源の保全、利活用と着地型観光(大浦先生)			
1日目 8月20日 日曜日	13:00	13:30	0'30"	受付		ムトスぶらざ (多目的ホール)	
	13:30	14:20	0'50"	オリエンテーション (概要・アウトプットイメージ共有・グループリーダー決め)	榎平先生	ムトスぶらざ (多目的ホール)	
	14:20	15:50	1'30"	基調講義 飯田市(南信州)は『日本一住みたいまち』になる!	飯田市長 佐藤 健 氏	ムトスぶらざ (多目的ホール)	
	15:50	16:35	0'45"	農家民泊先へ移動(千代公民館・天竜峡PA)			
	16:20	16:35	0'15"	対面式(天竜峡PA 10分)→農家民泊	学生代表あいさつ	天竜峡PA	
	16:40	16:55	0'15"	対面式(千代公民館 10分)→農家民泊	学生代表あいさつ	千代公民館	
2日目 8月21日 月曜日	大学生	8:10	8:40	0'30"	集合(千代公民館)、お別れの会(約5分)→竜丘へ移動	学生代表あいさつ	千代公民館
		8:20	8:40	0'20"	集合(天竜峡PA)、お別れの会(約5分)→竜丘へ移動	学生代表あいさつ	天竜峡PA
		8:40	8:45	0'05"	竜丘公民館で各自荷物を男女別に積替(大学生)		竜丘公民館
	高校生	8:15	8:40	0'25"	集合(ムトスぶらざ) 高校生と教員は竜丘へ移動	※2日目から参加の大学生2名合流	ぶらざ→竜丘
	地域 コ ミ ュ ニ テ ィ と 経 済	8:40	9:00	0'20"	集合(竜丘公民館) 高校生と教員は乗換えて移動		竜丘→千代
		9:00	10:00	1'00"	2日目オリエンテーション	西山先生	千代公民館
		10:00	11:30	1'30"	しゃくなげの会取組み(保育園の見学あり)	しゃくなげの会 関口理事長	千代公民館
		11:30	11:50	0'20"	上久堅へ移動		上久堅公民館
		11:50	13:00	1'10"	昼食・休憩		上久堅公民館
		13:00	14:30	1'30"	食工房十三の里の取組み 空き家対策の取組み 小野子にんじんクラブの取組み	食工房十三の里 長沼昭子氏 地域おこし協力隊 地主健一氏 小野子にんじんクラブ会長 長沼善朗氏	上久堅公民館 小野子下集会所
		14:30	15:10	0'40"	ムトスぶらざへ移動		ムトスぶらざ
	環 境 と 経 済	8:40	9:00	0'20"	集合(竜丘公民館) 学生・高校生・教員は乗換えて移動		竜丘→ご湯つくり
		9:00	10:00	1'00"	2日目オリエンテーション	平岡先生	ご湯つくり
		10:00	11:50	1'50"	南信バイオマスの取組 ~移動・現地視察~	南信バイオマス 井口潤子氏	ご湯つくり→現地
		11:50	13:00	1'10"	~移動~ 昼食・休憩		現地→ご湯つくり
		13:00	14:30	1'30"	飯田市の取組 メガソーラーいいだ ~移動・現地視察~	飯田市ゼロカーボンシティ推進課 熊谷健太郎氏	ご湯つくり→現地
		14:30	15:00	0'30"	ムトスぶらざへ移動		ムトスぶらざ
	多 様 な 産 業 ・ 主 体	8:40			集合、そのまま竜丘公民館を会場に実施		
		8:50	9:50	1'00"	2日目オリエンテーション	榎平先生	竜丘公民館
		9:50	11:30	1'40"	鷺流峡復活プロジェクトの取組み ~現地視察も~	いなだに竹Links 曾根原宗夫氏	竜丘公民館・現地
		11:30	11:40	0'10"	移動		
		11:40	12:30	0'50"	昼食・休憩		ドライブイン開善寺
		12:30	13:05	0'35"	移動		
		13:20	14:50	1'30"	南信州・飯田産業センター・ネスクイダの取組み	オーガナイザー 中島智志氏 工業課専門幹 木下久氏	エス・パード
		14:50	15:10	0'20"	ムトスぶらざへ移動		ムトスぶらざ
		15:10	15:20	0'10"	休憩		ムトスぶらざ (3階)
		15:20	20:00	4'40"	グループワーク、まとめ作業、報告準備	各教員による指導	ムトスぶらざ (3階)
夕食							
20:00		22:00		移動 ~ 入浴 ~ 宿泊施設(風越山麓研修センター、飯田市域学連携交流施設)			
3日目 8月22日 火曜日	7:30	8:50	1'20"	朝食 ~ 移動(ムトスぶらざ)			
	9:00	9:30	0'30"	3日目オリエンテーション		ムトスぶらざ (3階)	
	9:30	13:50	4'20"	報告会準備(各グループ単位)	各教員による指導	ムトスぶらざ (3階)	
	13:50	14:00	0'10"	休憩			
	14:00	17:00	3'00"	グループ別報告会(各班16分、休憩3回各10分)	各教員による指導	ムトスぶらざ (多目的ホール)	
	17:00	17:30	0'30"	総括・閉会		ムトスぶらざ (多目的ホール)	
	17:45	21:00		移動 ~ 入浴 ~ 宿泊施設(風越山麓研修センター、飯田市域学連携交流施設)			
4日目 8月23日 水曜日	7:30	9:00	1'30"	朝食 ~ 移動(ムトスぶらざ)			
	9:00	11:00	2'00"	飯田城址歴史散策と和菓子探訪	大学生のみ ※各コース別(3班)に分かれて実施	ムトスぶらざ 丘の上	
	11:30			解散(飯田駅)			

令和5年度 学輪IIDA共通カリキュラム地域経済フィールドスタディ 参加者一覧

【参加学生】68名 ■大学生：63名（1年生1名、2年生16名、3年生36名、4年生6名）■高校生：9名（3年生9名）

No	大学名	学部・専攻	学年	氏名	班	宿泊先
1	大月短期大学	経済科	2年	大月 桃花	C-③	さあく
2	大月短期大学	経済科	2年	小川 涼	A-①	風越山麓研修センター
3	大月短期大学	経済科	2年	鎌塚 皓生	B-①	風越山麓研修センター
4	大月短期大学	経済科	2年	小幡 圭	C-②	風越山麓研修センター
5	大月短期大学	経済科	2年	坂本 達哉	C-③	風越山麓研修センター
6	大月短期大学	経済科	2年	塩澤 美月	C-②	さあく
7	大月短期大学	経済科	2年	塩田 蒼月	C-①	風越山麓研修センター
8	大月短期大学	経済科	2年	高橋 梨理子	A-②	さあく
9	大月短期大学	経済科	2年	塚野 葵	B-③	さあく
10	大月短期大学	経済科	2年	中嶋 晟斗	B-①	風越山麓研修センター
11	大月短期大学	経済科	2年	長谷川 侑希	B-②	風越山麓研修センター
12	大月短期大学	経済科	2年	山下 愛莉	A-②	さあく
13	大月短期大学	経済科	2年	吉澤 怜那	C-①	さあく
14	大月短期大学	経済科	2年	渡邊 晃佑	C-③	風越山麓研修センター
15	大月短期大学	経済科	2年	渡邊 香奈	A-①	さあく
16	大月短期大学	経済科	2年	渡邊 慶次	A-②	風越山麓研修センター
17	大正大学	地域創生学部	3年	岡崎 圭祐	C-③	風越山麓研修センター
18	大正大学	地域創生学部	3年	小川 真輝	C-③	風越山麓研修センター
19	大正大学	地域創生学部	3年	貝塚 木花	A-①	さあく
20	大正大学	地域創生学部	3年	金沢 修悟	A-③	風越山麓研修センター
21	大正大学	地域創生学部	3年	櫻井 開隼	C-①	風越山麓研修センター
22	大正大学	地域創生学部	3年	高橋 めい	A-③	さあく
23	東洋大学	社会学部	3年	石川 凜太郎	C-①	風越山麓研修センター
24	東洋大学	社会学部	3年	岡本 紘樹	A-②	風越山麓研修センター
25	東洋大学	社会学部	3年	小倉 佑一朗	B-③	風越山麓研修センター
26	東洋大学	社会学部	3年	柏原 彩希	A-①	さあく
27	東洋大学	社会学部	3年	加藤 里佳	C-②	さあく
28	東洋大学	社会学部	3年	北林 詩野	B-②	さあく
29	東洋大学	社会学部	3年	佐藤 未夏	B-①	さあく
30	東洋大学	社会学部	3年	PEI YU	B-③	さあく
31	東洋大学	社会学部	3年	吉田 百花	C-③	さあく
32	立命館大学	政策科学部	3年	出雲達也	A-②	風越山麓研修センター
33	立命館大学	政策科学部	3年	大濱 愛美	A-②	さあく
34	立命館大学	政策科学部	3年	尾森 美佳	C-③	さあく
35	立命館大学	政策科学部	3年	河岸 空知	B-③	風越山麓研修センター
36	立命館大学	政策科学部	3年	久保 宏平	C-①	風越山麓研修センター
37	立命館大学	政策科学部	3年	久保田 真珠	C-②	さあく
38	立命館大学	政策科学部	3年	下村 成生	A-①	風越山麓研修センター
39	立命館大学	政策科学部	3年	早田 光太郎	A-③	風越山麓研修センター
40	立命館大学	政策科学部	3年	竹中 あかり	A-①	さあく
41	立命館大学	政策科学部	3年	辻尾美優	B-①	さあく
42	立命館大学	政策科学部	3年	富松 大夢	A-③	風越山麓研修センター
43	立命館大学	政策科学部	3年	早川 桃花	B-①	さあく

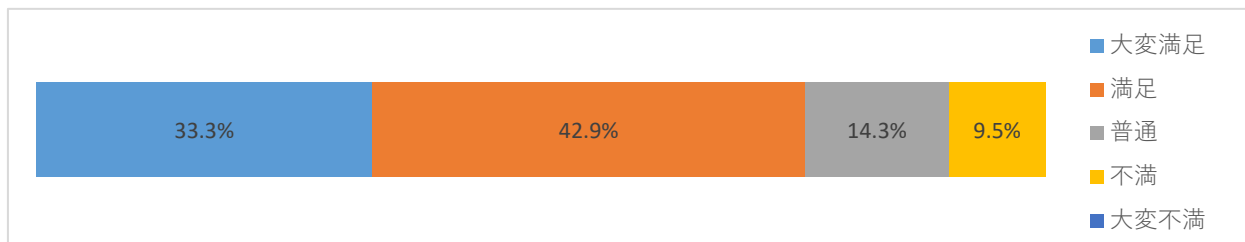
No	大学名	学部・専攻	学年	氏名	班	宿泊先
44	立命館大学	政策科学部	3年	平田 大智	B-②	風越山麓研修センター
45	立命館大学	政策科学部	3年	森 悠人	C-①	風越山麓研修センター
46	立命館大学	政策科学部	3年	矢野 翔大	C-②	風越山麓研修センター
47	立命館大学	政策科学部	3年	八幡 陽美	B-②	さあく
48	立命館大学	政策科学部	3年	吉田早織	B-③	さあく
49	和歌山大学	観光学部	1年	宮下 咲良	A-①	さあく
50	和歌山大学	観光学部	3年	西寅 穂花	B-①	さあく
51	和歌山大学	観光学部	3年	西原 菜津希	C-②	さあく
52	和歌山大学	観光学部	3年	西村 勇人	B-②	風越山麓研修センター
53	和歌山大学	観光学部	3年	松井 丈	A-②	風越山麓研修センター
54	和歌山大学	観光学部	3年	宮坂 真菜美	B-③	さあく
55	和歌山大学	観光学部	4年	森本 伊織	B-②	風越山麓研修センター
56	和歌山大学	観光学部	4年	有田 紗彩	A-③	さあく
57	和歌山大学	観光学部	4年	井上 昂大	B-①	風越山麓研修センター
58	和歌山大学	観光学部	4年	梶野 佳奈	A-①	さあく
59	和歌山大学	観光学部	4年	問山 美海	C-①	さあく
60	飯田OIDE長姫高校		3年	酒向 理子	B-①	
61	飯田OIDE長姫高校		3年	林 佳歩	A-①	
62	飯田女子高校		3年	北原 結愛	A-③	
63	飯田女子高校		3年	桐生 珠希	C-①	
64	飯田女子高校		3年	小林 涼々音	C-②	
65	飯田女子高校		3年	秦 愛花	B-②	
66	飯田女子高校		3年	細江 紗也香	A-②	
67	飯田女子高校		3年	山口 藍	C-③	
68	飯田女子高校		3年	吉澤 友花	B-③	

地域経済フィールドスタディ アンケート結果

1 日程	8月20日(日)～23日(水) ※高校生は22日(火)まで
2 参加者	大学生59名、高校生9名 大月短期大学16名、大正大学6名、東洋大学9名、立命館大学17名、 和歌山大学11名 飯田OIDE長姫高校2名、飯田女子高校7名
3 回答数	42件

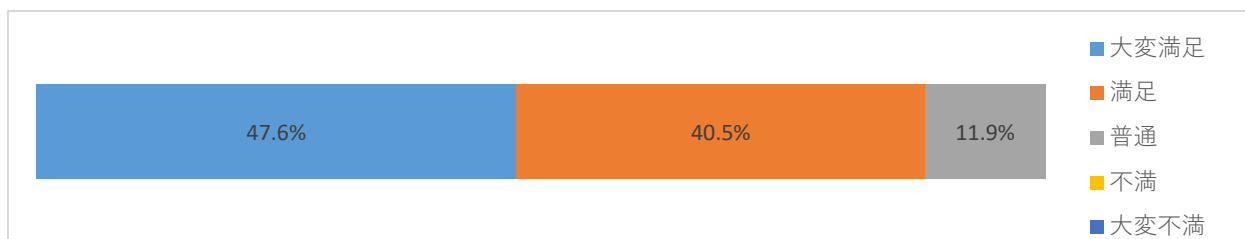
－フィールドスタディの内容に関する項目－

1. 「事前学習」について



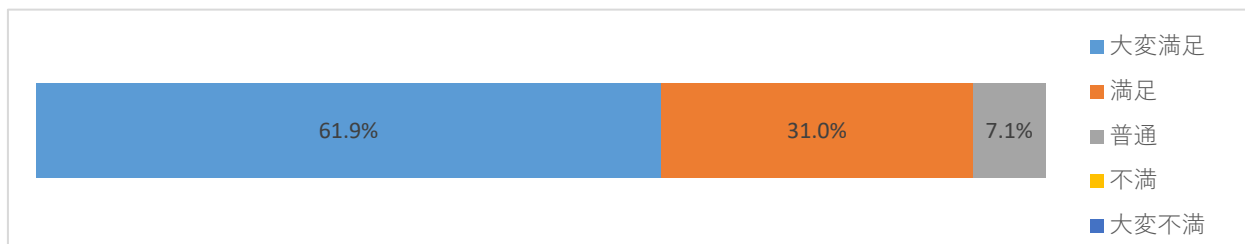
- ・これまでの学生生活であまり触れたことのなかった経済の仕組みについて事前に学習したおかげで、実際の地域でどのように活かすべきか考えることができたと思います。
- ・ジャンルも別々で大変勉強になりました。
- ・FSの学びを深めるための、またグループワークを進めるためのとっかかりになった。
- ・詳しく説明がなされていて、理解しやすかった。
- ・何を勉強しに行くのかがよりわかり飯田ではどのようなことがなされているのか興味をもった。
- ・各大学の先生がどのような授業を行っているか覗くことが出来、とても興味深かった。
- ・追加でフィールドワークで扱う内容の知識を勉強したかった。
- ・地域について、段階的に、より専門的に学習することができた。予備知識をつけることができた。期間中には伝えることができない、多団体の取り組みなどをファイル共有することなどがあっても良いのではと感じた。
- ・事前学習にしてはボリュームが多すぎる。
- ・(高校生)緊張していましたが、先生が優しく内容的にも面白かったので良かったです！
- ・(高校生)たくさんの方と関わり合いながら意見出し合えていい機会になりました。
- ・(高校生)地域と経済活動の関わりについて資料だけでなく説明を聞くことで理解を深められた。質問した際、高校生でも分かるように答えていただきFSに対する意欲が高まった。
- ・(高校生)フィールドスタディで学ぶ前に飯田の現状を知ることができた。
- ・(高校生)普段は学ばないようなことを学ぶことが出来た。

2. 「オリエンテーション・アウトプットイメージ共有」について



- ・FS全体のイメージを最初の段階で掴むことができた。
- ・このオリエンテーションを受けたことでどのようなことを求められているのか理解できたように感じます。
- ・最終目標について、最初に提示されたことが良かった。
- ・実際に現地で活動した際に活かされたことが多かった。
- ・先生が飯田市と関わりを持っていることから話している時も少し楽しんでいるように感じた。
- ・はじめに発表のイメージを入れておくことで、事例研究の際に疑問点を抱きやすくなった。
- ・班の人と事前に発表の仕方について話し合うことが出来た。
- ・班の人たちとコミュニケーションをとれて良かったです。
- ・講義を受講するだけでなく、グループワークで話し合った課題点について、フィールドワークを通して住民の方に質問、お話を伺う機会があればより満足できたと考えます。
- ・(高校生) わかりやすい説明でFS全体の流れをイメージすることができた。
- ・(高校生) 自分たちがどんな事をしていくのか道筋が見えたので良かった。
- ・(高校生) SWOT分析を使うとより効率的にまとめられると分かった。
- ・(高校生) 難しかったけど、知れてよかったですと思いました。

3. 市長講義「飯田市（南信州）は『日本一すみたいまちになる！』について

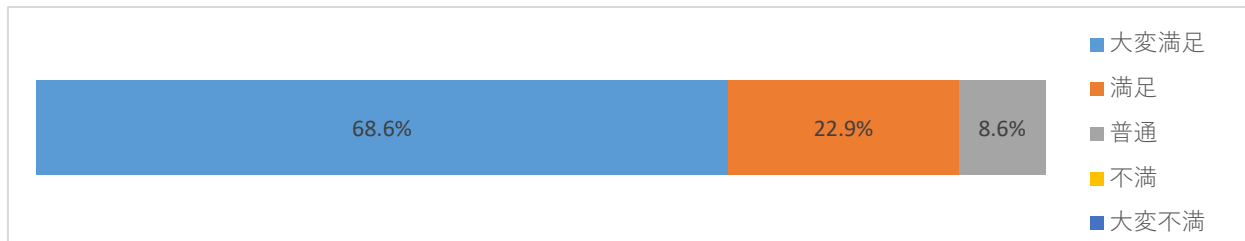


- ・市の事を学習する上で、市のトップの意向をまずは聴くということは大変良いスケジューリングであると感じた。市長の講演も、身になる観点、視点が多くあり、より意義のあるスタートになったと感じた。
- ・市長のお話は非常に勉強になりました。特に選挙時のマニフェストでもあったという「日本一すみたいまちになる」という目標とただ希望を目指すのではなく、現在や未来の状況を見極める堅実さが非常に印象的でした。またお話の節々から市長の見識の広さや勉強熱心さを感じました。
- ・リニアが通るところのみを発展させるのではなく、地域全体を発展させようとしていたのは、とても良い考えで学びに繋がった。
- ・市長さんの飯田に対する愛情と熱が伝わり、飯田への理解といい街であるという信頼が出来た。また、個人的にこのような市長さんがいるまちにすみたいと思った。
- ・市長の飯田市に対する思いが伝わり、私の地域にも佐藤市長が欲しいと感じた。
- ・飯田市の事を細かく説明し、発表も聞いてくださりとても感謝です。
- ・飯田市のことを知った上でフィールドワークを行えたので面白かった。時間は少し長いと考える。
- ・(高校生) 自分の住んでる町についての知識がなかったんですが、文化のことだったり知れて良かったです。
- ・(高校生) 実際飯田に住んでいて感じていたことを話されていて共感した。さらに、飯田の将来のビジョンが分かりやすかった。
- ・(高校生) 飯田市に住んでいても知らなかったことや、飯田市の構想について初めて知ることができて良かった。
- ・(高校生) あまり意識のしたことが無いことがあったのでこれから気にしていきたいと思った
- ・(高校生) 飯田市地域の特産品や行事がわかりやすく書かれていて 2 日目を降の事例調査にとっても役

立った。

- ・（高校生）飯田のことを誇りに思えた。

4. 「農家民泊」について

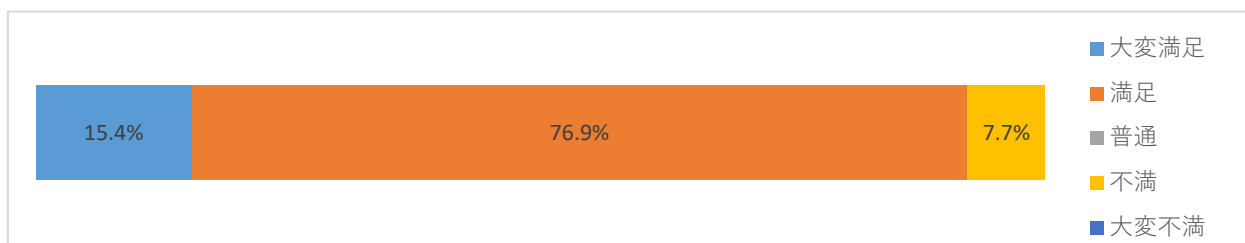


- ・ 飯田についての知識だけでなく、郷土料理や暮らし方、農家の方達の生活を実際に見て、経験することができた。
- ・ 農家さんの知恵に加え、地域のより現実的な課題を知ることができた。より深い現場の意見を聞くことができて、現状把握に役に立った。
- ・ 美味しいご飯をご馳走になるだけでなく、地域について感じていること、考えている課題についての多くの話を聞くことができ、後の学習にも役立つとても良い体験が出来た。
- ・ 実際に飯田に住むホストの方にお話を聞いたり地元で作られている食材を頂き、楽しいだけでなく学ぶこともできました。別のグループの学生との交流にもなり、その後の協力や交流にも繋がりました。
- ・ とても優しく、住民目線の飯田市の魅力を知ることが出来た。
- ・ 民泊の班の人も農家の方もすごくいい人で過ごしやすかったし、楽しかった。普段できない経験となった。
- ・ 民泊の方がとてもやさしく、飯田での暮らしを満喫することが出来た。
- ・ ご飯がとても美味しかった！生徒だけの時間もあり気の抜ける時間もあって助かった。
- ・ 全員学校も学年も違ったけれど、民泊があったからグループの子達とも仲が深まったと感じたのと、飯田市の活発的な民泊を実体験できてよかった。
- ・ 農家を感じる場所が少なかったです。
- ・ 民泊の方との交流の時間が少なかった。

5. コース別ヒアリング

【Aコース】地域コミュニティと経済

午前：「千代しゃくなげの会の取組」について

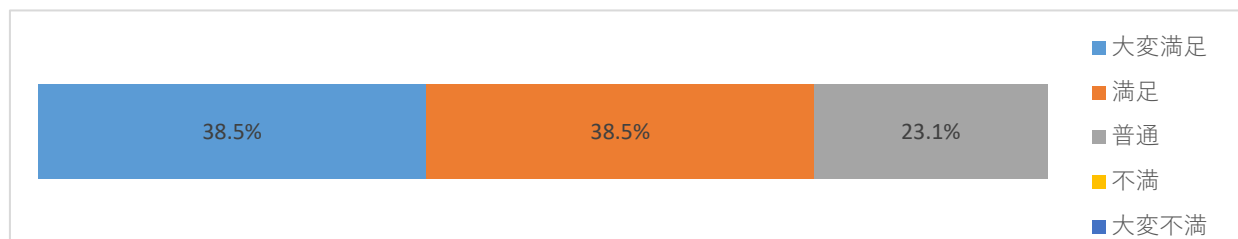


- ・ しゃくなげ会の始まりや保育園の始まりなど、地区の団結力の高さを学ぶことが出来て良かった。
- ・ より細かい取り組み内容まで共有されていた。時間がもう少しあればと感じた。
- ・ 地域の人々だけで取り決めを行っていることに感激した。
- ・ 保育園の環境がとても良く、地域の方々に大切にされているのだなと実感することができた。
- ・ 行っている政策について理解を深めることができた。
- ・ 園内も見学させて頂き、学びとなった。
- ・ お話を直接聞くことができたことは非常に有意義でしたが、もう少し質問や交流をする中で深めるこ

とができれば現地に赴くということにより意義を見出せたように思いました。例えば、3 グループそれぞれに担当の方が付き質問するといった形などが挙げられると思います。他のグループの質問に関してもグーグルドライブに議事を残して得た情報を共有するといった方法を使えばより多くの情報が得られるといった利点もあるかもしれません。

- ・ 知りたかった情報を得られなかった。
- ・ (高校生) 保育園の見学がとても楽しかった。

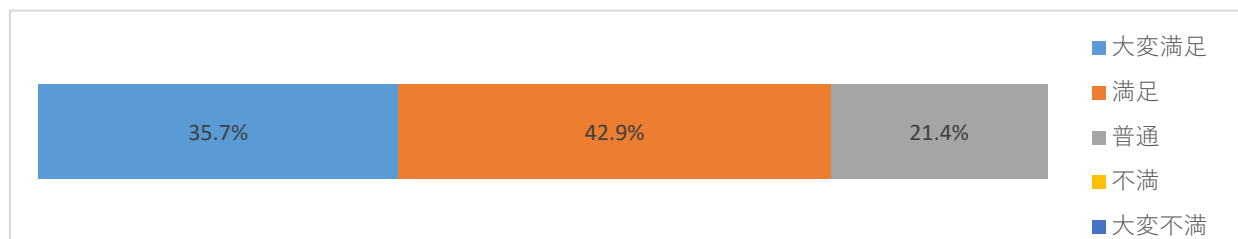
午後：「上久堅地区の取組」について



- ・ 実際にはできることはないか考えた結果始まったお弁当や人参の復活など、住民の地域に対する思いを知ることができて良かった。
- ・ 弁当配達を通じて地域の人をうかがうことでその人を見れる、確認できるという地域思いの活動に感激した。
- ・ 事例研究において、当事者の方のお話しを聞く機会があまりないので、実際に聞いたのはよかった。
- ・ 地域の状態や市のために何ができるのか説明されていて良かったです。
- ・ 個人的には「空き家対策の取組み」のお話が興味深く感じました。質問の中で資料からは読み解けなかったことなどもうかがうことができ、地域おこし協力隊の難しさと意義についても考えるきっかけとなりました。「十三の里」の取組みについても親身に質問に答えていただき、直接お話を聞く中で取組みの素晴らしさを理解することができました。ただ、目指す部分などに関して資料と実情が少し異なる印象を受けました。学生は資料のみから質問を考えるといった進行予定だったので少し混乱が生まれました。
- ・ 講演内容自体はとても身になるものであった。質疑応答でクリーンな回答が返ってこないという声があるのを耳にした。
- ・ 回答に不満があった。
- ・ (高校生) 資料だけでなく実際に活動している方々の話を聞くことで、より特徴や課題を知ることができた。

【Bコース】環境と経済

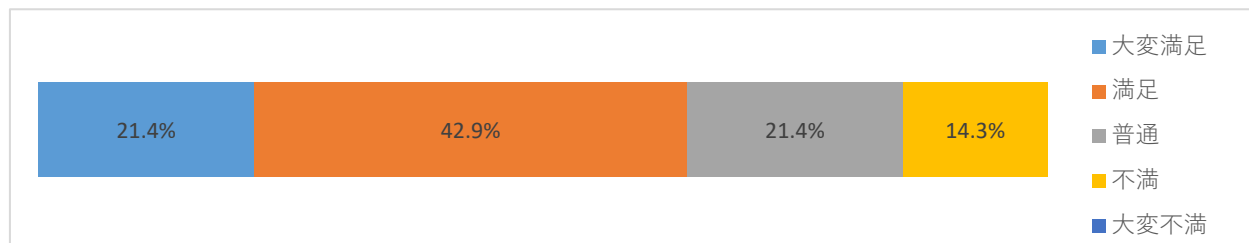
午前：「南信バイオマスの取組」について



- ・ 地域内循環について講義を受けていたが、実際に足を運んでより深く解像度が高く学ぶことができた。
- ・ 工場の周し方と機器本体見れてすごく印象深い体験。
- ・ 知らない分野でも勉強になりました。
- ・ 木材の活用について新たなことを知ることができた。

- ・木質ペレットが困っていることがわかった。しかし、どうにか脱却しようとしていることがわかった。
- ・新たなエネルギーに関して知ることはできたが、市が政策として力を入れている訳ではなかった。
- ・わかりやすかったが、基本的に改善点しかなかった。
- ・講義より先に質問を考える時間があり、難しかった。
- ・この話を通じて大学生である私たちに何を考えて欲しいのかをもっと具体的に知りたかった。概要を聞いて終わりでも良いのか気になった。
- ・講義はとても良かったが、それに対する質問をした時に教員に現状把握ではない質問が多いからと注意をされた。なぜ、現状把握の質問に限るのか納得できなかった。講義の内容はほとんど展望だったため、その部分に質問が集めるのは普通だと思う。
- ・（高校生）内容的には難しく理解しきれないこともあったけど、この飯田市ならではの利点と欠点についてしれて良かった。
- ・（高校生）小学生の時にペレットストーブを使っていただけペレットのことをよく知らなかったからこれを機に知ることができた。
- ・（高校生）南信バイオマスの木質ペレットがこれから色んなところで見れたらいいなと思いました。

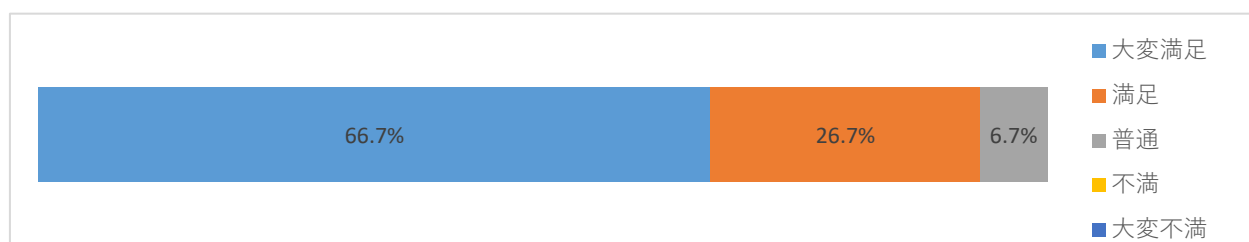
午後：「飯田市の取組～メガソーラーいいだ」について



- ・メガソーラーと太陽光発電を利用した構想について、市からの意見を知れてよかった。
- ・この取り組みは中部電力とも協力しているため中部電力の考えも聞きたかった。しかし、色々なゼロカーボンシティのための取り組みをしていることが分かった。
- ・太陽光発電に関して勉強になりました。
- ・詳しくない分野ですが大変参考になるものでした。
- ・学習内容の一部が少し理解出来なかった。
- ・説明している内容と取り上げている事柄が相異している部分などがあり、理解が難しかった。
- ・良い所しか見えなかった。もっと踏み込んで何が問題なのか課題があるのか、何を議論しているのか知りたかった。
- ・（高校生）ソーラーパネルの取り組みについて何も知らなかったので知れてよかったと思いました。
- ・（高校生）マイクログリッドというのを初めて聞いたので興味深かった。
- ・（高校生）飯田市が行っている政策を知ることができた。

【Cコース】多様な産業・主体の連携と経済

午前：「天竜川鷲流峡復活プロジェクトの取組」について

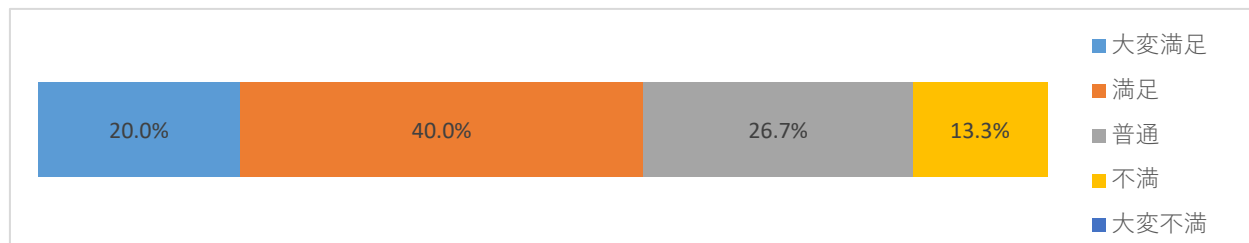


- ・実際に地域のために活動をされている方のお話だったので深みがあり、多くを学ぶことができたと思

う。

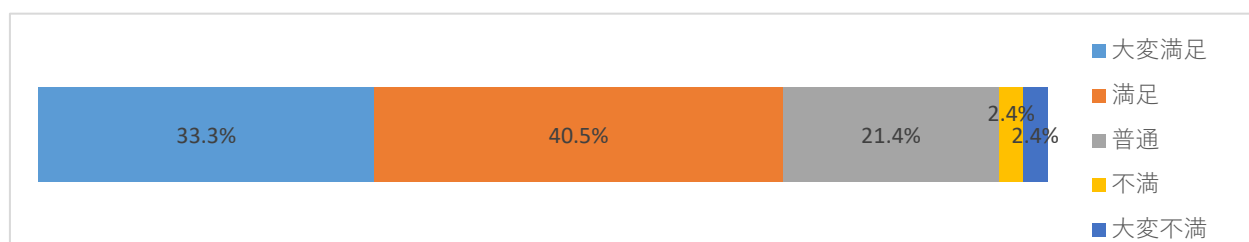
- ・説明がとてもわかりやすく、聞き入ってしまった。
- ・曾根原さんの活動に対する熱い思いが伝わった。
- ・NPO 法人についての考え方を改めることができた。
- ・「失敗したことがない」とおっしゃっていたのがとても印象的で考え次第で人生も変わると実感した。
- ・地域で実際に活躍されている人の話しを聞く機会の需要さを知った。
- ・地域の厄介者を活用し地域のブランド創出は、飯田市に限らず多くの地域で広めていくべきだと考えた。
- ・（高校生）今どんなことをしているのかとても分かりやすかったし、地域のつながりが分かりやすかった。
- ・（高校生）地域の人を巻き込んで楽しく竹林整備をしようという思いがとても素晴らしいと思った。
- ・（高校生）分かりやすく、聞いて面白かったです。

午後：「南信州・飯田産業センター・ネスクイイダの取組」について



- ・個々の企業だけでは活動に限界があるところを包括的に支援する体制を作ることで、より地域全体としての益を増やすという取り組みが素晴らしいと思った。
- ・地域内外での連携の重要性を学べた。
- ・私の専門外だったため、理解するのが難しかった。中小企業が多い地方に活用することが出来る考えを学ぶことが出来た。
- ・スライドの文字が見えにくかったが、色んなことをやっているのが伝わった。
- ・取組内容について知ることができて良かった。
- ・中小企業の現実と取り組みを学べた。
- ・理系のような内容が多く、自分には少し難しく感じた。
- ・話を理解することができなかった。
- ・（高校生）今何を行っているのか、どう企業と繋がっているのかが分かりやすかった。
- ・（高校生）飯田市には最先端の技術がおもったよりもたくさんあった。内容が少し難しくて分からないところがあった。
- ・（高校生）ちょっと難しかったです。

6. 「グループワーク」について

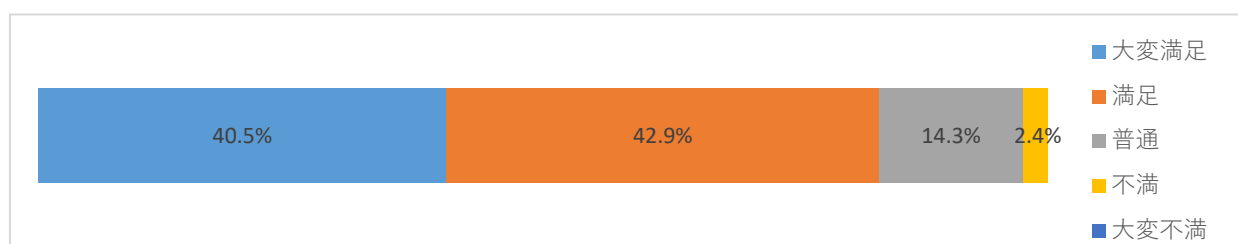


- ・グループ内で誰がどの担当をするのか分担し、意見の共有はみんなで行うというやり方だったが、全

員が自分の意思を持ち、自分の意見をはっきり言い合う事が出来たという経験がとても良かった。

- ・グループの中で、高校生に次1番下の学年で、グループワークをしていくうちに先輩方のプレゼン能力や様々な考え方に触れることができ、自分では考え付かなかった視点で考え新たな発見があつて楽しかった。
- ・私の班は人数が他グループに比べ少なかったのですが、それぞれが各自の力を活かし協力できたと思います。また飯田に住む高校生の参加によって実情などを聞くことができました。
- ・各大学が活発に意見を出し合えた。また、大学生と高校生では視点が違いそこから得る気づきも多かった。
- ・1人1個は絶対に意見が出ていて、出た意見は否定せず話し合っていた。
- ・リーダーとして活動したが、自身の非力さを実感した。ただ良い学びを得ることができた。
- ・意見交換をしながら進められた。長時間で疲れるので休憩を取る方が良いと感じた。
- ・ほとんどのメンバーで団結して取り組めたことは良い経験になった。が、最終的に出さないといけない結論の方向性がはっきりしていなかった気がして、少し進めにくかった。
- ・インプットが少ないうえアウトプットが抽象的かつ半固定されていて難しかったです。
- ・班内で解決すべき問題であるが、活動量に偏りがあったのはかなり不満に感じた。もっと高校生を巻き込みたかった。役割分担などをしっかり行うべきであった。
- ・もっと全員が主体的に話し合いに参加し、発言して盛り上げていくべきだと思う。
- ・(高校生) グループの大学生と、意見交換が沢山でき、新しい視点の発見に繋がった。
- ・(高校生) 大学生の色々なアイデアや、グループワークをスムーズに進めている姿を見ることができFSに参加して良かったと思った。
- ・(高校生) 実際に大学生と一緒に何かを勉強することはないのでとても良い経験になった。
- ・(高校生) 自分の意見をあまり出せなかったのが心残りですが、大学生と一緒にできて楽しかったです。
- ・(高校生) 内容が難しく理解に苦しんでいたら同じ班の大学生の方々がわかりやすいように教えてくれて、とても嬉しかったです。
- ・(高校生) 大学生の話聞くことしか出来ず、自分の意見を言う機会が少なかったです。
- ・(高校生) テーマが難しく意見を出せなかった。

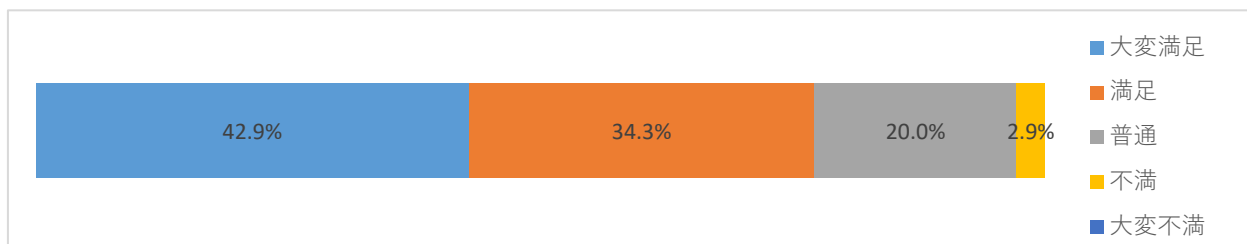
7. 「報告会」について



- ・時間制限がある中で、大切な事を各班が端的に述べられていた事に感心したし、自分以外のFSの内容も共有できてさらに飯田についての理解が深まった。
- ・同じ題材なのに3組ともこれほど違う発表ができるのかという発見とパワポの作り方がどのグループも上手で勉強になった。
- ・調査対象は同じでも、各班で独自性のある発表で面白かった。
- ・他のコースも自分のコースの違うグループの発表を聞いて、自分達体験しなかったと自分の発表に使える物を勉強になりました。
- ・質問をいくつかされる中、明確な回答をできていたか不安が残るが、自分達の学んだ事を第三者に共有するという経験は短大であまり行ってこなかったため、課題は残るが満足いくものとなった。
- ・自班がもっと深く話し合いをすればより良い発表ができたのではないかと感じた。

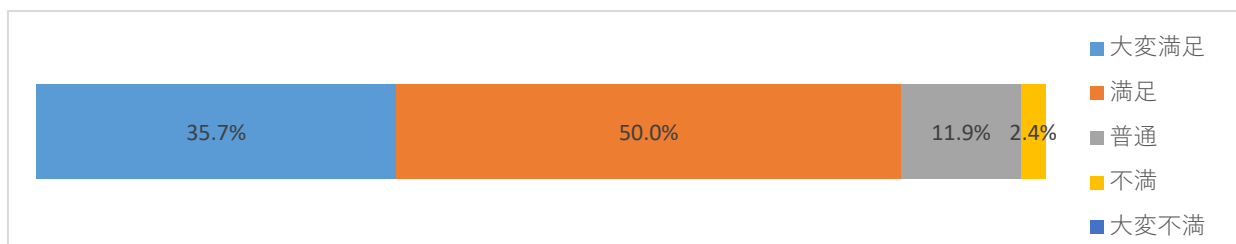
- ・他のグループの発表を聞くとともに、先生方からのコメントもいただけたので、良いフィードバックの機会になった。
- ・他の班のインプットがない状態での理解が難しかったです。
- ・チームごと学習している内容は同じだから、3 班の説明の前にまずその内容を一括して説明してから「自分たちがした考察や分析はこう」とはっきりすべきだと感じた
- ・同じ系統の発表を続けてではなく、A、B、C と順番に異なる順番ですれば聴きごたえもあるのではと感じた。同じAで3連続だと被った点などを気にする意見もあった為。
- ・発表時間が短かった。
- ・(高校生) コース内でもそれぞれの班で目を向けている関点が違っていて学べるものがたくさんあった。
- ・(高校生) 各グループそれぞれよりよい地域経済のあり方にあげる内容が違い、とてもおもしろかった。
- ・(高校生) 大学生のおかげで良いプレゼンテーションになったと思います!
- ・(高校生) 地域コミュニティと経済以外から、地域経済を考えるきっかけになった。グループごと特徴のあるプレゼンを聞くことができとても参考になった。
- ・(高校生) AとCの発表を聞いてさらに飯田市のことを知ることができた。
- ・(高校生) 緊張してまともに喋ることが出来なかったのですが、ほかの班の発表を聞いてすごいなと思いました。

8. 「飯田城址歴史散策と和菓子探訪」について



- ・街をガイドさん付きで散策することは滅多にできない体験だった。ガイドさんに教えていただくことで普段ならただの道としてスルーしてしまうところも歴史があると知れてよかった。
- ・すごく楽しかった散歩で、飯田の歴史およびお菓子をもっと説明でいっぱい聞けました。
- ・ただ和菓子を食べただけでなく、ガイドさんのおかげで歴史について学んだり、聞いていたもの（大火災跡やリンゴ並木）を実際に見ることができました。
- ・多々事前に市長さんから聞いたお話と重複する場面があったが、勉強になる部分が多かった。色々なお店が見れて楽しかった。
- ・美味しい和菓子やお茶をいただくとともに、飯田の大火事についての話やお寺の歴史など様々な事を教えて頂けて良かった。
- ・飯田市の歴史を教わりながら、飯田市の名産のリンゴを使った和菓子を食べることが出来て良かった。
- ・和菓子を食べたり、街の方とお話しできたりして楽しかった。
- ・飯田市の観光地、まち、地域のガイドの現状をより深く知ることができて、有意義なものであった。人数が多く、ガイドさんのリードが大変そうであった。
- ・飯田のまちの歴史を地元のガイドさんから学ぶことができてよかったが、ガイドさんによってかなり差があるという印象を受けた。
- ・もう少し時間があれば良いなとも思った。
- ・企画はよかったが、学びがなかった。
- ・炎天下で2時間歩くことに疑問を感じた。

9. フィールドスタディ全体を通して



- ・ 普段では考えられない、他大学と協力して行う連携プログラムについて、出身地域がバラバラであるために、地域の文化の差や考え方の違いというものを感じられた気がしたため、貴重な体験をすることができたと思う。
- ・ 他大学との交流が初めてだったので緊張したが、それぞれが学んでいる専門知識が生かされたグループワークが行われとても良い学習になった。
- ・ 飯田の魅力を感じ、飯田ならではの活動は地域の人、一人一人が地域のためを考え何か行動を起こしていることに対して他の地域ではどのような活動が行われているのか興味を持った。
- ・ 学習内容が難しく、活動内容を理解するのに精一杯で課題や問題についてを十分に意見交換や学習の追求を出来なかった事は残念でしたが、農家民泊でのその土地の方々の暮らしの体験や、他大学との交流、地域の成り立ちなどを実際に現地で体験して、知れたことがすごく貴重な体験でした。
- ・ 学ぶことが多く、友達もできて非常に濃い時間だった。
- ・ コロナ禍以降ではじめてこのような FS を行い、やはり現地に行かないと見えない課題があるなど気づいた。
- ・ フィールドワークの面白さを感じられた点と、他校の生徒と交流を持てたことに関して満足している。
- ・ 初対面の学生が集まって一つの成果物を作り上げることで互いに刺激を受けることができた。
- ・ こんな楽しい体験は珍しくて大切な記憶になりました。
- ・ 公私のバランスが取れていて、非常に刺激を受けることができた。
- ・ 来年もぜひ関わっていただきたいと思います。
- ・ 飯田市のことをしっかり学ぶことが出来て良かったが、飯田市のことについてもう少し自ら学んでおく必要があったと考える。飯田市が中小企業が多いということはこのフィールドワークを通して知ったため。
- ・ 行程を通して非常に興味深かったのですが、講義形式の時間が多かった部分が気になりました。それから2日目は人数が多かったことにより一部お話を聞けないといったことがあり、その部分は残念に感じました。
- ・ 飯田市についての私の学びは多かったが、FSによるアウトプット等の成果は不足していると感じました。
- ・ 講義の内容と発表で求める内容が異なるなど矛盾している箇所が多い様に感じた。また、曖昧な課題を設定しているにも関わらず、教員の求める正解をこちらで見つけないといけなような指導だったと思う。(Bチームは特に。他のチームは自由で良かった。)
- ・ 全体的に、満足した。体調不良者が多く出たのに、説明が為せれないまま、学習が続行したのは信じられないと感じた。
- ・ 学びにつながった部分もあったし、課題も感じた。参加費が高いと思った。

-その他全体に関わる項目-

■この取組をより充実したものにするためには、どうしたらよいと思いますか？

【参加者同士の交流機会について】

- ・ 様々な大学の学生が集まると言うことで、初日の段階で親交を深める時間がもう少しあればいいと思う。
- ・ 学生同士のコミュニケーションを取る機会をさらに増やせば、取組がより充実したものになると考えます。
- ・ (高校生) 高校生が一班に一人ずつしかいなかったのが、高校生にとっては辛かったので最低でも2人はいたほうが、安心できるし、気持ち的に楽に参加できると思います。
- ・ (高校生) 高校生も、もっと大学生との仲を深めたり、プレゼンテーションにもう少し加わるようにした方がいいと思いました。

【地域との交流機会について】

- ・ 講義を受講するだけではなく、グループワークで話し合った飯田の現状、課題点について、フィールドワークを通して住民の方に質問、お話を伺う機会があればより充実したものになると考えます。
- ・ 地元の企業と学生がより親密に関われる機会を設けると良いと感じた。そうすることで正しい認識のもとでグループワークが進められると思うから。
- ・ 発表するのに参考資料が限られていると感じたので、事例研究の際に代表者の方だけでなくそれに参加した当事者の声をもっと聞けたらまた、新たな発見があるかなと感じた。
- ・ フィールドワークでもっと深い考え方ができるように事前に知識をもう少しつけるようにする。フィールドワークではお話を聞くだけでなく、地域の方に直接意見を聞いたりできる時間を設ける。
- ・ 農家民泊で地元の住民の声が聞けたことから学びがあったので、コースで学んだあとの2、3日目も農家民泊したかった。より深い学びにつながったはずだ。
- ・ 農家民泊で、机上の空論では学習できないようなより地域の声を聴くことができる形態はよても素晴らしいと感じた。農家の方からもっと長く滞在してほしいという切実な声があったので、半日ではなく2日などにプログラムを見直してほしいと感じた。
- ・ 報告会は各大学の生徒、教職員がメインで行われており、学生の考える課題とその解決策や提案というものは当日参加していた人にしか伝わっていないと考える。そのため、もし可能なのであれば、報告会は市民の参加も募り、できるだけ多くの人に伝えられるような仕組みが出来れば良いのではないかと考えた。学生間でもグループによって内容が全く分からないという意見があったため、市民にも共有する際は誰もが理解しやすいような構成を学生達が考えて行う事が必要になり、より内容の学習が濃いものになるのではないかと思う。
- ・ 高校生にとっても大学生と学ぶ機会は本当に貴重なのでより参加者が増えるとよいなと自身が経験した立場として感じます。最終日の発表もより地域に開けた状態でやると地域の人と学生が交流する場となり良いのではないかと思いました。
- ・ (高校生) 講義だけでなく、実際に飯田市の特産品に触れられるような機会があっても良いと思った。

【学習の進め方について】

- ・ 一番やってほしいことが「飯田の事例を知り、学ぶこと」なのか「分析」なのか「グループワークでの意見交換」なのか分からなかった。なんとなく、時間までにパワポを完成させることが目的になってしまっていたと感じるので、どこをメインにするかで少し時間配分を変更しても良いと感じた。
- ・ フィールドワークのインプットが少なく、アウトプットが固定されていたので発表用のまとめの制作が難しかったです。全体発表では、他の班の事例についてさきがけのインプットがあったほうが理解

しやすくなると思いました。

- ・他グループとの交流が最後の発表しかないの、発表の内容がかぶったり個性が出しづらいかもしれない。中間経過報告をコースごとでもいいので行くと、より個性的な発表になり切磋琢磨できるのではないかと考えました。
- ・FSの内容のすり合わせが不十分であるように思う。各チームの教員によって、課題内容の捉え方が異なると思った。課題の内容を曖昧に設定している割に、どのように発表するのかなど幅を狭められた。他のチームの発表を聞いたときに自由に考えており、驚いた。制限をするのならば最初から課題の内容をより鮮明にした方がいいし、学生の考えにゆだねるのであれば、教員間でのすり合わせをしっかり行ってほしい。
- ・グループワークで別の大学の学生と交流したり、地元の高校生と交流できたことは非常に有意義でした。その他にも民泊や講義といった形で地元の方にお話を聞くことができました。より充実したものにするためには、「現地ではできないこと」や「グループごとの個性」を出す余裕があればよいのではないかと思います。私は今回の活動において一つ後悔していることがあります。空き家対策の部分について興味深く感じたので地主さんの連絡先を頂いておけば、もしかしたら疑問が出た時に連絡させていただいたり、別の関係者の方につないでいただいたりといったフィールドワークらしい行動に繋げることができたかもしれないこと。帰りにインタビューを受けていたこともありバタバタしてしまい、ご挨拶しそびれてしまいました。グループワークの時間を長めにとっていただいていたことが非常にありがたかったので、グループ単位での行動や質問などから深堀を進め、その大切な時間をそういった使い方ができればよりよい現地実習となるのではないかと感じました。厳しいことは承知の上ですが、そのために行程に少しゆとりを持たせていただければより面白いフィールドスタディとなるのではないかと感じました。
- ・高校生との習熟度の差をカバーする。

【事例調査について】

- ・事例調査の幅を広げると班ごとの色がより出て面白いと感じました。コースの中でも1つは同じでも一つの事例をそれぞれ別のものにすると分析結果も変わりより深い学びになると感じました。
- ・昨年開催されたFSのデータを元に飯田市がどのような1年を経過したか。

【スケジュールについて】

- ・スケジュールがハードだなと思いました。
- ・食事や入浴、朝の集合時間の設定をもうすこし工夫してもらえるとありがたかった。
- ・もう少し余裕を持ったスケジューリングが実現すれば体調面等のケアを行えるのではないかと感じた。
- ・予定の時間がずれてしまったりお風呂に入る時間が短かったりしたため、時間調整を見直して欲しい。
- ・待ち時間や今後の動きなど、より詳しく学生に説明したほうが良いと思う。説明のないままバスでの待機をさせられたり、お風呂での交代の仕方だったりなど、説明が不十分な場面が多かった。納得してその行動に移ると、強制させられるのでは気持ちが違うと思う。今回忙しく大変だったと思うが、改善してほしい。
- ・タイムスケジュールが詰め詰めで体に負担が大きかったなと言うのが正直な感想です。各々のグループで休憩という形にはなっていましたが、休憩しにくい空気感であったりしたので全体で休憩の時間を設けても良いのかなと感じました。また、長時間のグループワークの後、食事や入浴の時間が短く、体調を崩してしまう人も多かったように感じました。内容はとても充実していて貴重な学びになりました。ありがとうございました。

【運営環境について】

- ・市の運営形態には、制限があると思いますが、もっと運営人数を増やしても良いのではと感じた。大学連携推進室長さんが終始取りまとめて下さり、大変助かりました。本当にありがとうございました。
- ・女性の先生や職員さんがあまりいなかったため、女性の方を増やして欲しい。男性の方だと、女性特

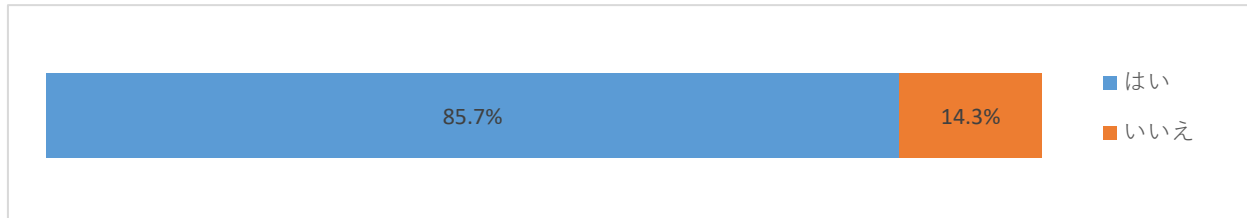
有の悩みを話すのにためらってしまうため。

- ・男性の宿舎を改善してほしい。

【その他】

- ・ゼミで強制参加の所も多いと聞き、やる気に差があるように感じた。全員が主体的に参加する意識を持つべきだと思う。
- ・今回のフィールドスタディを通して、飯田市の特徴などを知ることができたので、回数を重ねていくのが良いと思います。

■このような取組があれば、また参加したいと思いますか？



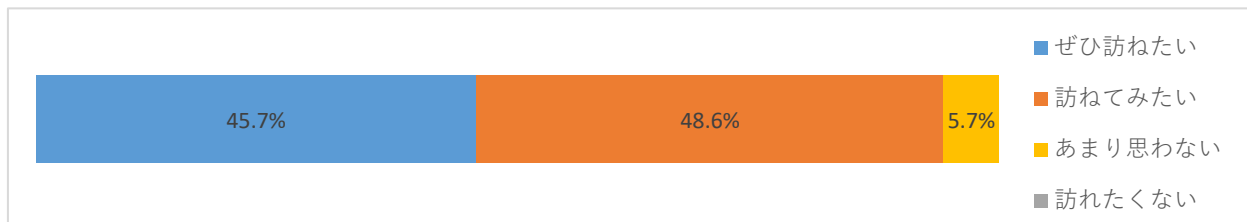
【はい】

- ・私は、このフィールドワークがなければ、飯田市のことを知ることがなかったと思う。そのため、飯田市について知ることが出来てとても良かった。今後、このような取り組みがあれば参加してみたい。

【いいえ】

- ・今回のような内容でこの拘束時間はわりに合わないような気がした。

■飯田を訪ねてみたいと思いませんか？



- ・焼肉をまた食べたい！
- ・外国人の友達を連れて、農家さんの元に戻ろうと思います。
- ・飯田市について知ることが出来たが、まだ知ることが出来ていない点がある。それを知るために、また訪れたい。
- ・とてもいい街だったので、リニアが開通したら、また訪れてみたい。

地域経済フィールドスタディ振り返りレポート

No.	班	学校名	氏名	ページ
1	A-1	大月短期大学	小川 涼	20
2	A-1	大月短期大学	渡邊 香奈	21
3	A-1	大正大学	貝塚 木花	22
4	A-1	東洋大学	柏原 彩希	23
5	A-1	立命館大学	下村 成生	24
8	A-1	和歌山大学	宮下 咲良	25
9	A-1	飯田OIDE長姫高校	林 佳歩	27
10	A-2	大月短期大学	高橋 梨理子	28
11	A-2	大月短期大学	山下 愛莉	29
12	A-2	大月短期大学	渡邊 慶次	31
13	A-2	東洋大学	岡本 紘樹	33
14	A-2	立命館大学	出雲 達也	35
15	A-2	立命館大学	大濱 愛美	36
16	A-2	和歌山大学	松井 丈	37
17	A-2	飯田女子高校	細江 紗也香	39
19	A-3	大正大学	高橋 めい	41
20	A-3	立命館大学	早田 光太郎	43
21	A-3	立命館大学	富松 大夢	44
22	A-3	和歌山大学	有田 紗彩	45
23	A-3	飯田女子高校	北原 結愛	47
25	B-1	大月短期大学	中嶋 晟斗	48
26	B-1	東洋大学	佐藤 未夏	50
27	B-1	立命館大学	辻尾 美優	52
28	B-1	立命館大学	早川 桃花	53
29	B-1	和歌山大学	井上 昂大	55
30	B-1	和歌山大学	西寅 穂花	56
31	B-1	飯田OIDE長姫高校	酒向 理子	57
32	B-2	大月短期大学	長谷川 侑希	58
33	B-2	東洋大学	北林 詩野	60
34	B-2	立命館大学	平田 大智	62
35	B-2	立命館大学	八幡 陽美	63
36	B-2	和歌山大学	西村 勇人	64
37	B-2	和歌山大学	森本 伊織	66
38	B-2	飯田女子高校	秦 愛花	67

No.	班	学校名	氏名	ページ
39	B-3	大月短期大学	塚野 葵	68
40	B-3	東洋大学	小倉 佑一朗	70
41	B-3	東洋大学	PEI YU	71
42	B-3	立命館大学	河岸 空知	73
43	B-3	立命館大学	吉田 早織	74
44	B-3	和歌山大学	宮坂 真菜美	75
45	B-3	飯田女子高校	吉澤 友花	76
46	C-1	大月短期大学	塩田 蒼月	78
47	C-1	大月短期大学	吉澤 怜那	79
48	C-1	大正大学	櫻井 開隼	80
49	C-1	東洋大学	石川 凜太郎	82
50	C-1	立命館大学	久保 宏平	83
51	C-1	立命館大学	森 悠人	85
52	C-1	和歌山大学	問山 美海	86
53	C-1	飯田女子高校	桐生 珠希	88
54	C-2	大月短期大学	小幡 圭	89
55	C-2	大月短期大学	塩澤 美月	90
56	C-2	東洋大学	加藤 里佳	91
57	C-2	立命館大学	久保田 真珠	93
58	C-2	立命館大学	矢野 翔大	94
59	C-2	和歌山大学	西原 菜津希	95
60	C-2	飯田女子高校	小林 涼々音	96
61	C-3	大月短期大学	大月 桃花	98
62	C-3	大月短期大学	坂本 達哉	99
63	C-3	大月短期大学	渡邊 晃佑	101
64	C-3	大正大学	岡崎 圭祐	103
65	C-3	大正大学	小川 真輝	105
66	C-3	東洋大学	吉田 百花	107
67	C-3	立命館大学	尾森 美佳	108
68	C-3	飯田女子高校	山口 藍	109

1、勉学に関すること

私は、地域のコミュニティと経済のグループで学習をし、上久堅地区、千代地区で農業や宅配サービス、空き家の活用、福祉法人の話聞いた。そこで二つの地区では少子高齢化が問題となっており、保育園の法人化であったり、地域おこしの一環として空き家の対策取り組みをしたり、地域の方の健康を気遣い、地区の方の見守りを行うための弁当宅配など様々な活動を行っていることを知った。グループでは地域の課題解決に向けどのような活動を行えばよいか考え、農業と十三の里が連携をし、空き家をリノベーションして商売を行うという農商工連携といった取り組みをしていくとよいのではないかと考えた。普段は農商工連携という構造について考える機会はなかったが、地域での話や地域の特色を聞くことでその構想が現れ、グループ間で共有したことで話し合いが進み、より地域の内容に沿った質の高い学びができたと思う。また、実戦形式でSWOT分析を行い、これまで経営学でしか使うことはなかったが、地域における課題を探すうえでも活用できることを知り、現状整理を行う上でかなり理解しやすく、共有することも容易にできたため、今後の卒論や学習を進めるうえで活用していきたいと考えた。

2、それ以外のこと

今回の学習は他大学の学生や高校生が参加していたことから地域での文化の差だけでなく、各々が学んでいる専門分野について話を聞くことができ、大学の先生が学んでいる内容についても聞くことができる貴重な体験ができたことから多くのことを学ぶことができたと思う。また、普段となれない環境で知らない人と話し合いをするというのはめったに体験できないことだと考えるが、そういった環境下で自分は何ができるのか、何をすべきかといったことをすぐに考えて行動する必要があるし、状況判断能力や周囲を見て考える観察力や考察力といった力が鍛えられ、これらの経験の重要性、良いグループを作るために必要な雰囲気作り方といったことが今回学ぶことができ、これらの能力は今後の就活や社会人になった時にも応用できると考えており、人間関係の構築や周囲を見渡すことで得られる情報などの多くのことを学べたと改めて実感している。

3、今後どのようなことを実践していきたいか

今回初めてフィールドリサーチということを行い、民泊や二日目の講義を受け、今感じている地域の状態や今後どうなっていてほしいかなどその地の住民に話を聞き、それをまとめてグループで方向をするという貴重な体験ができた。こういった体験は将来的に様々な場面で活用できると考えている。人から話を聞き、それをまとめて共有を行うというのは今後学内の授業で活用できるだけでなく、就活や就職後にも同様の機会があると考えため、今回のフィールドリサーチで得られた体験や能力を活用し、実践していきたいと考える。また、特産品やその地に起きた災害、文化など学びとは少し離れた地域のことを学習するというのは地域を知る上で大切なことであり、今後ほかの県や地区で学習する際にも周辺の地域も含め学び、事前に学習しておくことで地域の話がされる際にもある程度知識がある状態で学習をしていきたいと考える。

(1) 飯田市では、公民館がただの箱モノとして置かれているだけでなくまちづくりの拠点として行政と地域自治区をつなぐ重要な役割として機能しているというシステムが出来上がっている点やそれが 1 つの地区だけでなく飯田市すべての地区で行われているといった点がまちづくりをより活発にしやすい環境が作られていると感じた。また、住民が一体的かつ総合的にまちづくりに取り組むために「パワーアップ地域交付金制度」の導入することによる地域自治区の住民の参加と協働を促し、特色ある地域形成をしやすい環境にしている。こうした取り組みは、行政と住民が同じ方向を向き、地域住民の皆さんの地域への思いがあるからこそできる取り組みであると感じ、地域への思いは地域課題の解決に不可欠なものだと再確認できた。また、こういった地域への思いがあるからこそしゃくなげの会の保育園民営化の際の基本金を住民から徴収できたのだと考える。どこの地域も少子高齢化が問題視されているため、しゃくなげの会の取り組みや飯田市の地域自治、町づくり委員会の取り組みは、今後先行事例として取り上げられると感じた。最終日の発表に向け、グループワークをする際参考とする資料が少なく自分たちの勝手な解釈で進めてしまう部分があったため、もう少し資料が欲しいと思った。そのため、事例研究の際に、代表者の概要説明だけでなく、それに参加した当事者の方々ともお話できる機会があると良いなと感じた。

(2) 農家民泊をさせていただいて、ご当地のご飯や野菜の収穫など農家の方々の日々の生活を体験したり、受け入れてくださった家族の方とお話をさせていただいたりすることで飯田の良いところや実際に困っていることなどを知ることができ、民泊が大きな学びの場であり、ただ飯田に来てホテルなどに宿泊するより民泊をする方が飯田のことを好きになると感じた。他大学の学生との交流を通じて、それぞれ同じ地域政策を学んでいる者同士でも専門としている分野が異なり、一つの事例を見るにしても様々な視点からの意見があり新たな発見と視野を広げるきっかけになった。また、私はグループの大学生の中で一番下の学年であり、先輩方のプレゼン能力やコミュニケーション力、知識の量と圧倒されることが多く、現在は短大で、先輩方と交流する機会がなかったので、こういった機会に 3.4 年生を肌で感じ勉強への意識が高まった。

(3) 事例だけを見て地域課題を解決しようとしたときどうしても利益を求める傾向にあると感じるが、実際に現地の方のお話を聞いて、利益動向よりも地域住民が暮らしやすい地域にという思いが強いのが感じた。政策を考える側と住民との間で相違点を生ませないために地域住民と共に町おこしする必要性をフィールドワークに参加して身をもって体験できた。そのため、今後自分の研究を進めるにあたりフィールドに出て住民の方々のお話を聞いたり、現地調査を行ったりすることを大切にしたい。

私は今年度8月20日から23日まで飯田市地域経済FSに参加した。今まで4日間という短期間で知らない地域に出向き、課題解決に向けて考え実践するという経験がなかったため、最初はとても緊張していたが一緒に活動したメンバーであったり、現地の方々の温かい支援のおかげで楽しみながらも、集中して活動することが出来たと改めて振り返って思う。このレポートでは具体的にどのような部分にてそう感じたのか以下で述べていく。

まずは勉学に関することについて述べる。飯田市上久堅地区の課題として高齢・過疎化と特産品がないことだと最初に知った。地域から人がいなくなって過疎となってしまうことを防ぐために空き家の活用も行っていきたいとのことであった。そこで今上久堅に有る物を上手く使って課題を解決していけないかと思い、空き家をお店として活用するという提案をした。上久堅にある家の多くに畑があり、食べきれない程の収穫があると聞いたので、元々あるお弁当宅配サービスの応用として空き家をお店にして、定食という形で提供するものだ。さらに上久堅産のお米を使った米粉パンを、特産品としてブランディングし、これを大きな駅など影響力のある場所で販売する機会を設けることにより、人を集めるきっかけとなると言える。この企画を提案する過程で、SWOT分析を使って強みや弱みを細かく洗い出した。それにより現実的に可能である範囲での提案内容を考えられたと個人的に思う。そして既にある事例があれば、それをもとにしっかり調べて企画提案をするべきだと学んだ。

次に勉学以外で得られたことを述べる。初日の民泊体験で受け入れをしてくださった奥様が、飯田市の伝統工芸である水引を作る体験をさせてくれた。最初は結び方の手順が紛らわしく苦戦したが、1回覚えてしまえばその結び方の連続であるため、途中でコツをつかみ、楽しくなつてつい夜遅くまで一緒に泊まったメンバーと作りこんでしまった。今では少し応用のものまで作れるようになった。伝統工芸品に触れる機会がなかった私にとってこの経験は、古き良き日本の「美」を感じられ、伝統工芸の後継者不足を少しでも解消して、日本の文化が失われないように多くの人に魅力を知ってもらう必要があるなど強く思った体験となった。

最終日は飯田周辺の歴史散策と和菓子の試食をした。徳川家康と織田信長を祖父に持つ福姫という方のお墓に行き、大火の復興のシンボルとして広まり、今ではすっかり街のシンボルとなった、飯田駅近くにある約400メートルにわたって植えられたリンゴ並木を歩いた。歴史を知る・学ぶということは過去の出来事を再発見するだけではなく、それはなぜ起こったのか理由や原因を理解する目的があり、理解したうえで現代や未来に活かしていくことが出来ると実際に歩きまわってみて感じた。

今回のFSを通して、課題について事前に調べた情報と、現地の方に質問した際の返答でかなり差があるものが多かったと感じた。だからこそ現地に行かないと知ることのできなかつた本質を理解するために、今後同じようなカリキュラムに参加する際や、10月の実習では事前学習はもちろん、地域での課題について地域住民の方々はどうに感じているのか、当事者意識はあるのか、当人にインタビューをして調査をしっかり行うことを実践する。

(1) 勉学に関すること

今回の FS で最も印象に残ったことは、地元食材を使った弁当宅配サービス食工房十三の里である。食工房十三の里は、「食」を通して地域課題を解決する女性の集まりだ。この食工房十三の里がある上久堅地区の現状課題として、65 歳以上の割合が 46.7%であり、約過半数が高齢者という高齢化の問題、上久堅地区は、市街地から離れており買い物に不便という理由で便利なところへ移住してしまう過疎化問題、上久堅と言ったらといった特産品がないという問題がある。近くで買い物ができるところがないため、遠いところまで行こうとすると必ず車が必要となるが、後期高齢者の場合運転するのが危険である。このような上久堅地区だが、上久堅地区に住んでいる多くの家には畑があり、食べきれない程の野菜が収穫されるため野菜が余っている。上久堅に住んでいる人たちの健康寿命を延ばしたい。上久堅地区には買い物ができる場所が少ない。集まれる場所がある。このようなことから弁当の宅配を始めた。この活動には、子育てが落ち着いた料理好きな人が参加した。弁当の宅配を行うことによって、高齢者の方たちがバランスの取れたご飯を食べることができ、わざわざ遠いところまで買いに行かなくても良くなり、家まで弁当を届けるため、高齢者の方たちと交流することで高齢者特に一人暮らしの高齢者の孤独死を防ぐことができると考えた。弁当を宅配することによってたくさんの良い点があることを学んだ。

また、弁当の宅配だけでなく、「食パン」の販売も始めている。ここで作られている食パンは、高級食パンに指摘する食パンに仕上がったため上久堅の特産品を目指している。上久堅地区に住んでいる人たちは自分たちが住んでいるところの問題点を見つけ積極的に改善していこうという人たちが多くいると考えた。

だがこの活動は、楽しく長く活動するためにも働く人の負担にならないようにという理由で週に二回だけである。食工房十三の里で働いている人たちは、高齢者とまではいかないが子育てを終え落ち着いた人たちであるため若者とも言えない。そのため活動回数を増やすと今働いている人たちの負担になるため活動回数を増やすことができない。そこで、I ターンの人たちを積極的に呼び込むことが重要だと考えた。I ターンの人たちを呼び込むことによって若者が増え、今よりも活動回数を増やすことができ、弁当や食パン以外のことも始めることができ、食工房十三の里がどんどん発展していくと考えたため I ターンの人たちを積極的に呼び込むことが重要であると考えた。そのため、I ターンの人々が住みたいと思うような取り組みをするべきであると考えた。

(2) それ以外のこと

普段同じ大学に通っている人たちとではなく、初対面の人たちとグループワークをするため緊張したが今まであまり経験したことがないことだったので良い経験になったと考える。

また、オンラインではなく実際に現地に行くことによって長野県飯田市の魅力を感じられたと考える。

(3) (1) (2) の内容を踏まえ、今後どのようなことを実践していきたいか。

最近は何事でもオンラインということが増えていたが、実際に現地に行った方が良いと感じたため、これからオンラインかオフラインか選択しなければならないときはオフラインを選択しようと考えた。

これから議論をする際は、様々な視点から物事を見て議論していきたいと考えた。

(1) 勉学に関すること

Aコースでは、十三の里、空き家活用、保育園、小野子ニンジン等に関わる方たちにお話を聞き、上久堅地区の現状、課題を学んだ。主に挙げられていた課題としては、高齢化や過疎化というものがあつた。そこで私たちAコース1班では、上久堅の現状と課題を踏まえたうえで、「食」を通して地域課題を解決する女性の集まりである十三の里を主として取り上げ、解決への道筋を探つた。まず、SWOT分析を用いて、強みに地産地消が行えていること、機会では特産品として期待されること、弱みに認知度の低さ、脅威に後継者不足があるというような分析を行うことができた。これらを踏まえて班内で意見を出し合い、攻めと守りの戦略として、お弁当の再ブランディングや特産品としてのブランディング、周知活動の強化といったものが挙げられた。そして、私たちの班では、より良い地域とは「雇用の場があり、円滑な地域コミュニティが形成されており、愛着を持てる地域」であると定義付けし、「地域社会をよりよくする地域経済のあり方」として、域外マネーを獲得し、地域内で循環させる必要があるという結論に至つた。より明確に言えば、十三の里の取り組みを事業化し、外に売り出せる体制を作るということである。また、空き家を利用した販売事例として、地元住民、小学校が使わなくなった家具や椅子を活用したレストランカフェである、飯田市天竜峡のテンリュウ堂を取り上げた。以上を踏まえ、上久堅地区においても、空き家を活用し、パンや弁当をより多くの人へと提供するなどを契機として人が集まるきっかけにもなるのではないかというのが私たちの考えである。また、上記を進める中で、農商工連携についても学びを深めることができた。地域内で生産したものに対して、加工、販売を行う中で付加価値を生み出し、より高値で地域外へと売り出す。そこで得た収益を地域内に還元するというこの仕組みが地域内循環として大きな役割を果たしているのであり、私たちの考える、より良い地域経済のあり方に必要不可欠であると学びを得ることができた。

(2) それ以外のこと

勉学以外のことで得ることができたものは、1番大きかつたのは新しい環境でのチームワークである。今回のフィールドスタディでは、他大学、地元高校生といった普段関わることのなかつた人たちとのチーム活動がほとんどであつた。短い時間の中で、連携を完璧にとって報告準備を進めていくということは難しく、上手いかわないということも多かつた。しかし、最終的にチームでまとまって考え、報告まで辿り着けたのはチームワークが形成されていたからだろう。新しい環境で1から事を始めるのは非常に難しいことであるが、それと同時に、全く違つた環境にいる者同士での活動というのは、新鮮さもあり、新しい視野を得られることに繋がつた。

(3) 今後の展望

(1)(2)で述べたように、私は今回のフィールドスタディで新たな知識、新たな視野等を得ることができた。これらは私の今後の研究活動の上で大きな力になると考えている。私は9月からまた飯田市に赴き、木質バイオマスの利用促進について研究を進めていく予定である。今回学んだ、空き家や十三の里とはまた違つた内容にはなるが、班で出した地域内循環の考え方自体は、木質バイオマスを利用するにあつたの林業や消費者等にも同じことが言えるはずである。また、次は今回よりも交流のあるメンバーでの活動となるが、その中でも、今回のフィールドスタディで得た新たな視野、刺激から私たちの研究活動がより良いものになるように役立てていきたい。

(1) 勉学に関すること

はじめに私は高校生のときに地域経済 FS に参加し、縁あって和歌山大学観光学部に進学した。そして、大学生になって地元を離れた視点から地域のことを再び学びたいと思い今回のフィールドスタディに参加した。しかし、2 日目に体調を崩し地域での事例調査やグループワークに参加することができなかった。このフィールドスタディを楽しみにしていたので残念だったが、3 日目の各班の発表を客観的かつ多角的に聞くことができた。今回は自身が参加できた初日の市長講義と、3 日目の発表から考えたことを中心にまとめる。

市長講義の中で印象に残ったのはリニア中央新幹線の構想とシビック・プライドの欠陥の話である。今回の講義では以前よりも行政がリニアのもたらすマイナス面と向き合うようになっていると感じた。とくに佐藤市長は地域住民が駅の建設に前向きでないことや住民参加の話し合いが進んでいないことについて懸念していた。個人的には工事の段階でさまざまな問題を抱えるリニア中央新幹線が住民にとってまだ非現実的なものであるという印象を持った。市長は講義内で「予想乗降者数も決して多くはなく、移動コストのハードルも高い。どこにでもあるまちにしない」と話していたが、私もこの現実問題に向き合う必要があると考える。一方で住民にとってもリニアの駅が住民同士や文化の交流の場であり、外の地域との交流の場にもなるような地域の生活に溶け込むような駅の構想づくりを住民と進めていくことが重要だと考える。また、「ここには何もない」と親が子の前でいうことで刷り込まれているという話を聞いてショックを受けるとともに、どこか納得してしまった。確かに南信州には物見遊山的な分かりやすい観光名所がない。長野県を見ても県北部に観光地や中心都市があることで県の南部は目的となるものが少なかった。「何もない」ということが地元への愛着の欠如に繋がっていることはこの先の地域を維持するために向き合わなければならないと感じた。

3 日目の各班の発表についてはいずれのコースの短期間でよくまとめられており、10 分という短い発表時間でまとめられていたと感じた。気になったのは多くの班が後継者不足や若者が少ないということを課題として挙げていた点である。もちろん事実であることには違いないが学生たちの学びをより深めるために地元を盛り上げるために頑張っている若者も調査事例に含めるべきではないかと感じた。これはそれぞれのコースで内容が重複しており、オーディエンスとして一部聞きごたえに欠けると感じたためである。コースごとの事例を 1 つは共通、もう一つはより若い世代の取り組みをさらに分割することで参加学生にとっても深い学びの機会となるのではないかと感じた。

(2) それ以外のこと

今回初めて農家民泊を経験した。観光学概論の授業でも取り上げられていたため授業での内容を実践的に学ぶことができ良かった。民泊先で飯田市の伝統産業である水引飾りを作る体験をしたが、その後水引に興味を持ち自分でも作るようになり、台風の影響で中止となってしまったが 9 月 9 日に東京の日本橋で開催予定だった高森町のイベントでも自身の企画案として水引のワークショップを提案することができた。

(3) 今後実践していきたいこと

今回のイベントから今後の大学での学びで学んでいきたいと思ったのは「地域住民のシビック・

プライドを醸成する観光づくりにはなにが必要か」ということである。私は入試の頃から観光客がもたらす地域外からの評価が住民が地域に誇りを取り戻す機会になるのではないかと考えていた。今回のFSを通して、住民に地域への誇りと愛着、すなわち「シビック・プライド」が持続可能な地域を作るためにいかに重要か気づいた。また地域に愛着を持つためには地域を知ること必要だと考える。私は和歌山県に来てから自身の地元でも使えるようなイベントやアイデアはないかといくつかの取り組みに参加してきた。中でも今関心があるのが「オープンファクトリーの開催」である。和歌山県でものづくり文化祭というイベントのサポートスタッフをやった際に子どもや地域の人、地元で根付く産業を知ってもらえるいい機会なのではないかと感じた。大学生の間にこのようなイベントを地元で実施してみたいと思う。

私は地域経済 FS に参加した。事前学習では、地域経済の振興についての基本的な考え方を学びました。地域経済は地域外からの外貨を稼ぐこと、地域外への所得の流出を押さえることが重要だと学びました。稼ぐだけでなく地域内で循環させることが地域振興へ繋がり、そのためには内発的発展が必要だと学びました。

フィールドワークでは、実際に地域で活動する方の話を聞くことでより理解を深めることができた。しゃくなげの会の取り組みでは、千代地区の住民が出資して保育園を運営しており地域とのつながりが深く、運営が安定していることがわかった。児童減少が課題。

上久堅地区の十三の里の取り組みでは、地域の活性化のために集まった地域の人が、地城の人に向けて弁当宅配をすることにより、高齢者の見守りを行うことができ地域内のつながりを作ることができる仕組み。高齢化が進むことによって配達数が減少、後継者不足、利益が少ないことが課題。地域おこし協力隊の活動では、空き家を活用した移住促進を行っている。移住希望者に向けて内覧の際に、地域の人と交流することで地区を知ることができ地域活動に参加してもらう。空き家の家主との交渉が難しい、費用が掛かるなどの課題がある。小野子にんじんクラブは、小野子人参復活のために地域の人が集まり上久堅の特産品として栽培している。後継者不足、利益が少ない課題がある。

フィールドワークを終えたあと大学生とグループワークを行った。SWOT 分析を行い課題を解決するために話し合う場面では、意見を出すことと小さな疑問でも調べることや、課題解決のためには意見を出し合い、積極的に交流できるコミュニケーション能力が大切だと学んだ。率先して話し合いを進めて、意見をまとめ、よりよい提案ができる力が大学生にあると思った。事例を組み合わせることで域外から外貨を稼ぎ、地域内循環につなげられる発想力がすごいと思った。報告会では地域コミュニティと経済の他の班のアイデアや、産業や環境から考えた地域経済の振興について知ることができた。企業と地域は密接に関係していることがわかった。いなだに作 Links さんの「行政、地域、企業は違うものではない」というお話は、地域経済を考えるときに重要な考え方だと思いました。地域振興は企業が地域で活動することだと考えていたが、地域コミュニティのなかで経済活動を行うコミュニティ経済を知った。実際に活動する人の話を聞いてみると、雑居活動ではなく地域内での活動として行っているため、後継者不足など多くの課題が生じていると感じた。しかし、そうした取り組みを経済化するのは難しいと思った。

地域経済 FS を通して、企業と地域は深く関係していること、新しい企業の形を知ることができた。将来、企業を支える仕事に就きたいと思っているため生かしたいと思った。

大学生と学びを深めることで、大学の学びを知ることができ身につけられると感じた。今回の経験をこれからの学びにつなげていきたい。

(1) 少子高齢化や人口減少の他にもリニアモーターカー開通や世界経済、世界政治の動向によっておこる輸入品の値上がりなど、実際には地域政策、地域経済、農業経済など、今まで学校で別々に学んだことが総合的に、複雑に入り組んで一つの自治体が出来上がっていることが分かった。また、市長の講和から、それらの取り組みや決断が市民の生活に文字通り直結することが実感できた。個人的には、卒業レポートに取り組んでいることもあり、リンゴ並木のウォークブルシティ化にすごく興味がある。

千代区のしゃくなげの会は福祉組織を地域活動として運営していく組織としてはとても有効かつ完成された形のように思う。よって、他の地域自治体、特に千代区と環境が似ている地方の中山間地域には応用が利く組織運営の在り方だと思った。保育園を民営化する際には住民全員が話し合い、かつ、各戸からの募金に成功していることは公民館活動の理想形ともいえる。

また、しゃくなげの会、十三の里など活動全体を通して、良い取り組みやサービスがあっても、その取り組みについて調べようとするとホームページがなかったり、何年も前の情報から更新されていなかったりしたので外部の方、または移住者が‘知る‘機会が極端に少ないように思った。よって、飯田市に関しては、公民館活動はほかの自治体に比べると既に十分に盛んであるので、その情報を外部に周知する人員や取り組みを考案するほうが地域活動が活性化するのではないだろうか。いずれにせよ、地域活動、公民館活動が盛んであることは間違いないので、どのようにしたら住民の参加率をそこまで高めることができるのか知りたいと思った。

(2) 初めに市長の今後の展望についての講和を聞くことができたおかげで、地域経済、地域政策、公民館活動、その他、飯田市の大まかな土地勘やその土地においての特徴などを知ることができた。その後、すぐに民泊に行くことができたおかげで、実際にその地域に住む方が市長の構想をどのように考えているのか、生の声を聞けたことはすごく学びになった。私が泊めていただいた方は、総合的にあまりよく思っていないようだった。というのも、その方はフランスの方と結婚し、子育てはそのままフランスで行い、日本に帰ってきてからも東京住みが長く、飯田市にはご両親の介護と子育ての終了がきっかけであった。この話をきいて、私は、なるほど、日本の公民館活動というものは、海外の方からすると文化が全く違うものなのかもしれないと思った。

一方、別のご自宅にお世話になった友達の話を聞くと、市長を下の名前で呼んでいたりと、講和では聞くことがなかったさらに詳しいお話を伺ったりして、市長に対してとても信頼が厚いように思えた。このように、それぞれの背景、年齢によって意見が大きく違うことが分かった。

(3) 以上のことを踏まえ、私は、より地域コミュニティについて興味がわいた。また、今までの卒業レポートへの取り組みはどこか平面的であったように思うが、今回のフィールドスタディに参加したことで、自分の中で立体的になったように思う。地域コミュニティという言葉には、地域政策、経済、公民館活動、交通網などの外部要因、様々な要素が複雑にいくついていることを忘れずに今後の自分の研究に生かしていきたいと思う。

また、他大学の3年生以上の方と交流できたおかげで、自分の知識がまだまだ浅く、不十分であることを実感できたので、時間の許す限り、様々な文献に触れていくべきであると思った。

1. 私は A グループで地域コミュニティについて学んだ。この地域コミュニティで学んだことは二つある。一つ目は地域の人と関わりあいながらその地域の良さを学び、その地域の良さを活用することである。今の時代、地産地消が重視されていたりロシアとウクライナが戦争していることで物価が上昇していることもあり今後世界からの供給があるかもわからない。そんな中飯田市は率先して地産地消に取り組んでいることを学んで、その他の地域でも地産地消やふるさと納税などを活用していくべきだと思いました。

二つ目は地域の人たちの需要を満たすと同時に地域福祉としての役割を果たしているということだ。これはお弁当事業の例から学んだ。例えばお弁当を頼んでいて、かつ一人暮らしをしている高齢者の人たちにお弁当の配達員の人が入ると同時にその高齢者の方たちの様子や体調も同時に見るというものである。このような仕組みは、地域の人たちとの関係性が密着してないといけないものだし、一人一人が思いやりの気持ちを持っていないとこれらの関係性が成り立たないと考えました。以上のことから、飯田市は地域の人々一人一人が飯田市を良くしようと考え、積極的に地域活動に取り組むことこそが地域活性化のカギなのではないかと考えました。

2. 私はグループ活動やその他の大学の人と関わったことによって自分自身の考え方の視野が広がったと感じるし、逆に自分自身の力不足や知識不足を実感しました。特に発表準備の時に、自分が持つ考えより上を先輩方が提案しているのを見てこういう考え方もあるんだというのとさらに知識が蓄えられたと思う。そして、自分の知識不足・力不足という点では私は人見知りであり話せないのですが今回のグループワークでは自分の欠点が出てしまい、あまり自分の意見が言えなかったことが今回自分の良くなかった点である。けれど、先輩方が積極的に話しかけてくれたのも相まって自分の意見が少しずつ言えるようにもなった。今回様々な人と関わったことで、自分の欠点がさらに浮き彫りになってしまったのを感じた。

3. 私は今回のフィールドワークを通して、今までは自分の地元のことしか知らず固定概念というものしかなかったが初めて飯田市に来てその固定概念がなくなり様々な地域の取り組みについて学ぶことができた。この飯田市は地域住民一人一人が飯田市のことを誇りに思っており、地域をよりよくしようと常日頃試行錯誤している、そんな街であると考えた。今現在若者がなかなか自分の地域の良さを実感できず、こんな町から早く出ていきたいと田舎から都会に引っ越してしまう若者が今多くいる。グループワークの時にその場所にいた高校生に飯田市のことが好きかどうか聞いたとき、9割の人が飯田市のことが好きと言っていた。飯田市はこのような若者にも地域の魅力を伝えることに成功しているのがすごいと感じた。また、やはり自分が一番心に残った飯田市の取り組みが上久堅地区のお弁当事業である。主婦の方が上久堅地区を健康にしたい、見守りたいということからこの事業が始まり、そして食パンの販売を開始し上久堅の特産品になれるために地域の人々が日々努力しているのがこの地域の活性化の秘密であると感じました。そこから、地域活性化をするには実は地域のすぐ身近にあり、常日頃新たな何かを生み出すために取り組むことが必要であると学んだ。私の大月短期大学で学んでいることは若者を過疎地域に呼び込むにはということについて研究をしている。今回フィールドワークで学んだことは自分が研究していることととても関係があった。したがって、私は今回のことを踏まえ飯田市だけでなく、他の地域でも同じこと・さらに発展しているような事例を探し、自分の研究に取り組んでいける

ように精進していきたいと思う。また、今回自分の弱点があったことを踏まえゼミや学校生活で改善していけるように努力していきたいと思う。

特定の地域に出向いてフィールドワークを行い、その地域課題について現状を見据えながら考える経験は初めてだったため、非常に有意義な時間になった。私は A コースに所属し地域コミュニティが主体となった教育、子育て、高齢者福祉等の活動を視察した。千代・上久堅地区の方々から習ったその地域での事例・問題点に対してどのような課題解決が見込めるか、今回の実習で学び、考えたことについてレポートしたい。

始めに、千代地区ではしゃくなげの会と呼ばれる社会福祉法人が運営されている。発端は廃園に追い込まれた保育園を民営化し存続させることからきている。発足の経緯として県や自治会などでの説明会を何度も重ね、全地区民の合意のもと保育園の民営化を決定した。ここでの基本財産の醸成に用いた手法が凄まじく、千代地区民から各戸 10000 円の寄付と篤志寄付によって成り立たせたことにある。これは飯田市における地元民の当事者意識が強いという特徴からきていると感じた。また、しゃくなげの会の目的として「若者が定住する活力ある地域をつくる」とあるが、保育方針でも「千代で育てた安全な食材を使った給食での食育、豊かな自然と地域の人との触れ合いで千代の良さを学ぶ自然教育」と記載されており、地元の特性を活かした教育を行うことによって地元への愛着心を育むのは、若者の千代地区への当事者意識、帰属意識を高めるのに良い取り組みであると感じた。

次に、上久堅地区では食工房十三の里や小野子にんじんクラブなど、地域住民が主体となって立ち上げられた活動が多かった。食工房十三の里の発足経緯として、地域を元気にしたい女性たちが料理研究グループを立ち上げたことから始まった。上久堅では野菜の収穫過多と JA 店舗の跡地である未活用の場所という現状があった。料理研究グループはそこに目をつけ、受注生産のお弁当宅配サービスを開始した。元々の理念として健康寿命を延ばしたい、年配者が買い物できる場所が少ないことへの懸念などがあげられ、その解決策として先ほど挙げられた現状とのマッチングが上手く地域貢献へと繋がった。また、食事を届けるということは福祉的活動という意味合いも含まれていて、配達スタッフが声かけを行ったり表情やお弁当箱の返却状態で様子を見たりすることができることも、地域住民の健康促進に繋がると感じた。

これらの現状を分析してみると、千代・上久堅地区民の自発性や地域愛には凄まじいものを感じる反面、人口減少による後継者不足や看板と呼べる特産品が少ない傾向にある。また、地域内での活動に目を向きすぎであり、特産品の外への宣伝や利益の追求心が希薄という側面もある。こういった小さな地域では新規事業に手を出すのは難しいことであり、現状活動に持続性を持たせブラッシュアップしていくことが重要になってくる。そのため、地域内にすでにある魅力を引き出せないか、既存の宝を上手く活用することはできないかを考えていく必要がある。そこで編み出した解決策が、地域内循環を活かした特産品事業の再構築である。地域社会をより良くする地域経済の在り方として、地域の強みを活かすことで、その地域の弱みを強みに変えられる地域内循環が確立している地域経済が考えられる。千代・上久堅地区における強みとして、地域内コミュニティの強さ、地域に貢献したいという熱い気持ち。弱みとしてロスの脅威、資金や人手不足が挙げられる。千代・上久堅地区で出来ることと言えば、農家で生まれた野菜のロスト品を活かせる次の事業主に提供し、そこで生まれたロスト品を活かせる次の事業主へと提供していくことで、特産品の生産を維持しつつロスの削減にもなる。また特産品を市や地域の力で宣伝した

り、ふるさと納税へと繋げたりすることで、今度は地域外の外部を巻き込んだ経済活動へと成長することができると考えられる。そのような経済活動を創り出していくにあたって注意すべき点は、取り組みを進めていく上で地域住民全体の参加が絶対条件であるということ。また、将来の世代を見据えた持続的な取り組みにしていくことが必要である。地域住民が主体となって活動する上で、全員が納得のいく計画案の作成はマストであり、人手の限られている中活動を維持していくには、当事者意識の醸成と協力的な姿勢が必要である。また、将来的にも若者や次の担い手が参加しなければ長期的な活動は絶望的である。地域への理解や愛着心も、経済活動の維持には重要になってくると考えられる。

FSを通じて感じたことは、案外自分は、自分が生まれ育った地域のことを何も知らないのだなということである。今回で学んだ事例や手法を用いて、自分の地区が直面している問題に対して、地域が保有する強みや弱みを折り合わせながら、問題解決に向けた具体的なアプローチは何を考えられるか。良いきっかけをもらったと私は思った。

はじめに

8月20日から8月23日の4日間にかけて地域経済フィールドスタディを行った。地域経済フィールドスタディの狙いとして①「持続性のある地域づくりには何が必要か？」と②「不足するリソースを補完しつつ課題解決する「新しい手法」とは？」という2つの狙いについて注目している。

今回フィールドワークをする長野県飯田市は人口が減少し高齢層が増加している「人口減少社会」が到来し、かつ生産年齢人口が減っている自治体である。このような人口減少社会や生産年齢人口が減っている長野県飯田市で行っている政策や飯田市民の関わりについて現地で調査し、学んだことをまとめていく。

飯田市上久堅地区について学んだこと

長野県飯田市の中央に位置する上久堅は人口が男性586人、女性623人の計1209人であり、世帯数は484戸の数である。上久堅では人口の減少や高齢化が進行している地域である。上久堅が行っている地域コミュニティと経済活動の例として①千代しゃくなげの会②十三の里・小野子にんじんクラブ③上久堅地域おこし協力隊の活動が紹介された。

①千代しゃくなげの会の活動は「地域の子供とお年寄り地域で育て地域の手で守り、育てる」という基本理念のもと活動を行っており、若者が定住する活力がある地域を作ることが目的になっている。若者が定住する活力がある地域を作ることによって、結果として子供たちは千代に残ってくれるのではないかと考えていると仰っていた。

②十三の里・小野子にんじんクラブは「食」を通して地域課題を解決する女性の集まりである。上久堅では飯田市の中でも高齢化率が高い自治体であること、買い物ができる場所が少ないこと、各家庭や農家で作った野菜が余っている現状を考えお弁当の宅配サービスを始めることになった。お弁当宅配サービスは食品ロスの削減や上久堅地区の人々の健康を守ることに加えて、上久堅地区の見守りが重要な役目として存在している。

③上久堅地域おこし協力隊の活動は、人口減少に伴う空き家増加について危機感を持ち空き家の所有者と移住者の架け橋として活動している団体である。上久堅地域おこし協力隊は地域と移住者が双方にWin-Winの関係になることができる移住を目指し空き家の改善に取り組んでいる。空き家の売買や賃貸借に関する大事なこととして「地区の文化や伝統を守っていくために、地域活動に前向きな人に来てほしい」と仰っていた。

フィールドワークをして感じたこと

フィールドワークをして感じたこととして「上久堅に住んでいる人は伝統や文化を守ることに必ずしも賛成しているわけではない」ということである。橋爪さんのご家庭で農家民泊をさせて頂いたときに、橋爪昭収さんと橋爪昭収さんのご子息である息子さんに飯田市が行っている政策について伺ったところ、「伝統や文化の存続は必ずしも住民全員が賛成の意見ではない」と仰っていた。例として運動会を挙げていて、昔から行っていた運動会について人口の減少や高齢者が参加する現状に懐疑的な考えを持っていた。私自身伝統や文化はできる限り存続させていくべきであると考えていたので衝撃的であり、無理して伝統や文化を守り抜くのではなく、環境的な要因での伝統や文化の消滅も考える必要があると感じた。

実践していくこと

私は今回のフィールドワークを通して、人と人との関わり大切さ、意見を聞くことの大切さについて学びました。

お弁当宅配サービスを売上重視で考えているのではなく、食事を届けることによって得られる人々の健康や安心のために行っている活動だった。また、保育園では子供たちが自然と触れ合いながら周りの友達と保育園の先生とコミュニケーションを取っていて、子供たちがのびのびと生活できる環境を整えていた。これらは決して一人では取り組むことができないことであり、人と人が互いに問題意識を共有し解決に向けて努力したことである。また人それぞれ意見は異なり、一見良さそうな意見であってもたくさんの反応を伺い、意見が正しかったのか検証することが大事であると考えた。私はこのように人と人が協力することの大切さや意見を聞くことの大切さを大学のゼミ活動やその先の仕事に活かし、実践していきたい。

テーマ：このフィールドスタディに参加して得られたこと

(1)勉学に関すること

まず、今回のフィールドスタディでは事前学習→現地学習→事後学習という構成であり、事前学習の段階で地域経済循環について知識をインプットすることができた。特に地域経済循環において、いかに「基盤産業」が重要であるかを再認識したのである。製造業や観光業など基盤産業が充実することで、域内での雇用は増加し、一方で域外からのマネーを獲得することができる。そこで獲得したマネーを基盤産業などに再投資するという地域経済の循環構造が地域経済の賑わいに繋がっていることを事前の段階で落とし込むことができた。

そして、現地プログラムでは「しゃくなげの会」「食工房十三の里」「小野子にんじんクラブ」など現地の方との交流研修がほとんどであり、現地の方が実際に抱えている人手不足などの課題であったり、一方で「食工房十三の里」のお話にあったように、人口が少ない地域であるがゆえに、お弁当の宅配の際、健康管理を兼ねてコミュニケーションを取ったり、きちんと完食できているのか確認するなど宅配サービスに福祉的機能を付加できるという利点も伺う事ができたのである。

また、最終日の研究発表で、私たちの班では食品ロスを家畜の肥料にすることで無駄なく飼育されたブランドポークを基盤産業化し、地域経済循環を目指すというものであったが、先生方からのフィードバックであったように、「自分たちが何を一番伝えたいのか」をはっきりできていなかったという反省があり、プレゼンテーションの仕方についても得ることがあった。

(2)それ以外のこと

勉学以外に関して、今回のフィールドワークでは農家民泊を経験させて頂いた。ここでは普段の日常生活では得られないさまざまな知見を得ることができた。公民館活動などを含む地域活動において、地域の方が抱える悩み・願望などをお聞きすることができた。さらにこれまで受け入れてきた民泊者の話を伺う中で、農家民泊が担う地域活性化の役割なども知ることができた。

(3)(1)(2)を踏まえて今後どのようなことを実践していきたいのか

私は所属しているゼミナールで「地域」に着目して研究を進めており、特に公民館などの地域の自治体であったり、地域愛と言う観点に関心を持っているので、今回の地域経済フィールドスタディで経験した「地域のために何かしたい」という飯田市の方々の地域に対する郷土愛が地域経済とどのように関係しているのか、またこのような地域連携は「飯田」という地であるから実現しているのか。

今回のフィールドスタディを活かして今後の研究を進めていきたいと思う。

(1) 今回のフィールドスタディーで千代地区と上久堅地区に訪れ、地域コミュニティが主体となっている活動について学んだ。どちらの地区も「当事者意識」をもち「地域の特性」を活かし活動を行っていた。

千代地区では千代しゃくなげの会理事長である関口俊博さんの話を伺った。千栄保育園の園児数が2年連続で10人未満となり公費補助が打ち切りになることから、保育園を民営化し、「社会福祉法人千代しゃくなげの会」で運営を始めた。民営化するにあたって各戸10,000円の寄付と篤志寄付によって1000万円の基本財産を醸成することに成功している。地域に「自分たちのことは自分たちでやろう」という風習があったからこそできたことであると考えます。上久堅地区では、3つの取り組みについて話を伺った。上久堅地区は飯田市の中でも高齢化率が高く、市街地からも離れているため買い物などが不便である。そんな中で「食工房十三の里」では自分たちができる事で地域貢献がしたい女性が集まり、余っている野菜を使ってお弁当を配達している。またお弁当配達が高齢者の見守り活動にも繋がっている。地域おこし協力隊の地主健一さんから「空き家を活用した移住対策の取り組み」について伺った。上久堅地区は令和2年度の調査で125件の空き家が存在し、これからも増えることが予想される。空き家に住んでもらうことは、住環境を守るだけでなく、人口減少問題への対策にも繋がる。また上久堅地区に移住したい人が下見に訪れている時に自然と地域住民が集まり交流が始まる。この地域の特性は移住後のマッチング成功に繋がっている。「小野子にんじんクラブ」では、地域復興のために上久堅地区の有志が集まり忘れられようとした小野子人参を復活させ商品化させた。現在は6次産業化にも取り組んでいる。また小野子にんじんクラブは高齢者の居場所づくりにも繋がっている。今回4つの活動について勉強し、地域一人ひとりの自発的な行動が必要不可欠であることを学んだ。また地域の特性を活かすことの重要性を学ぶことができた。どの活動にも地域の特性が活かされており、他の地域でこれらの活動を模倣しても持続、成功はしないと感じた。

(2) 今回のフィールドスタディーで、「初めから決めつけてはいけない」という学びを得た。私は農家民泊もグループワークも行ったがマイナス思考で参加していた。しかし、いろんな人と話す中で私の視野の狭さを実感し、どちらも自己成長に繋がった。今回はプログラムとしてあったため、その機会を逃すことはなかった。今後初めから決めつけ、機会を逃したり、物事の重要な点を見落とししたりしないように、視野を広く持つことの重要性を学んだ。またいろんな人と関わっていくことが、視野を広げるために重要であると学んだ。

(3) 今回のフィールドスタディーを通じて、飯田市だけではなく、他県の学生などいろんな地域の人と関わることができ、地域の特性を実感することができた。今後、地域の特性を意識して研究をしていきたい。また将来、まちづくりに携わっていきたいと考えているため、その際に今回学んだことを活かしたい。

テーマ：このフィールドスタディに参加して得られたこと

(1)勉学に関すること「地域内で地域住民を如何にして巻き込むのか」

私は、A班として地域とコミュニティ、経済が如何にして関連しているのかを、飯田市千代地区のしゃくなげの会、上久堅地区の食工房十三の里、地域おこし協力隊の空き家対策、小野子にんじんクラブの取り組みを視察し、探求する中で深く学習した。さらには、事前学習、農家民泊、市長講演、グループワーク、グループ発表からも様々な観点、知識を得ることができた。

まずは、地域で実践的に活動されている方の考え、取り組みを直接聞くことができたことに大きな意義があったと考える。特に、市長講演、農家民泊、各取り組みの聞き取りではより地域に近い考えを聞くことができた。市長講演では、論語の「近き者説べば、遠き者来る」というフレーズを重要視されており、これは地域が元気で、豊かであると、その地域には人がおのずと集まって、日本一住みたいまちに繋がるのではと述べられていた。これは、学部での学びにおいても、山田桂一郎氏、出口竜也先生が、観光を活用して、地域、地域経済が豊かになると、地域が活性化し、その地域に観光客が増え、交流機会が増えることで、関係人口が増え、さらに地域が元気になるとされていた観点到に近いものがあると考えた。まずは、地域が元気になるような仕組みづくり、取り組みが必要であることを深く理解した。

しかし、地域全体で、包括的に仕組みづくりや活動に取り組む為には、地域住民の存在が最重要で、要となる。そこで、地域住民を巻き込む際には、まずは、地域内で住民が参加できるような仕組みづくりが重要であり、飯田市では各地域自治区でまちづくり委員会があり、地域のことを住民が考える機会の創設、各取り組みの総括などを行っていることが分かった。また、そのような機会を設けても、住民が参加しないと事は始まらない。地域住民を積極的に参加させるには、住民に対して当事者意識を向上させるような仕掛けが必要であることを榎平教員から教わった。その活動がいかに地域の現状、将来世代に影響するのかを伝え、地域住民にしっかりと当事者意識を持ってもらうような仕組みを構築していくことが重要であると理解した。

(2)それ以外のこと「農家民泊から地域の現状を知る」

ここまで、学術的なことで学んだことを見てきたが、それ以外では農家民泊において、より現実的な地域の現状を知ることができた。農家民泊では、農家の方たちが抱える課題、市政に対する意見に加えて、地域で生活することの意義なども知ることができた。

まずは、学習において、公民活動、自治活動が盛んであるということをつ捉えたが、実際は高齢化が進んでおり、様々な活動において担い手が不足しているのが現状であると農家さんは話した。市長が講演する中で、市政において様々な取り組みを試みているのには、関心を持ったが、市街地を除く郊外地域の実態は少し疲弊しているようにも感じられた。このように、地域における学びの中では、当事者である地域住民の現実的な意見や考えを理解することの重要性を感じることができた。

また、生活するという点では、農家としてどのように地域で生活していくのかの知恵や知識を享受した。将来、中山間地域とりわけ離島で生活をしたい自分自身にとっては、農家の方との交流、意見交換を通して、自分の将来に通ずるヒントのようなモノを得ることができた。その地域において、自分が好きなことに本気で取り組むことが重要であるという助言を農家さんからいただいた。

(3) (1)(2)の内容踏まえ、今後どのようなことを実践していきたいかをまとめて下さい

「飯田市での活動を今後の自身の活動でより有意義なものにするために」

これまで、飯田市で学んできたことを振り返ってきた。そこでは、地域における活動において重要な視点、必要な観点などを学術的かつ現実的な視点も踏まえながら、学んできた。今後はより卒業論文研究や実践活動で地域と交流する機会が増えてくると考える。そこでは、当活動において得たスキルを活かして地域にアプローチしていきたい。さらに、地域とコミュニティ、経済を考える上で重要な考え方、他班の発表から得た産業、環境などとの関連性などを考える中で、地域がより具体的かつ包括的に取り組みに参加して、活動すし、地域内全体で経済を回していく必要があることを理解した。自分が興味のある離島では、どのような取り組みが為されているのか、まずは現状を把握し、地域住民のより現実的な考えも踏まえ、当活動で得たスキルを活用しながら考えていきたい。

(1) 事前学習も合わせ、約四日間地域経済と飯田のことを知り、学んだ。地域経済というものは、異なる市場を対象とする産業によって構成されている。地域外を市場とする域外市場産業と地域内を市場とする域内市場産業を繰り返して域内を賑わせる仕組みである。そして地域経済の賑わいを生み出すためには、地域が得意なものやことを生かした基盤産業を見つけて育てること、基盤産業を成長させ域外からマネーを稼ぐ地産外商、稼いだマネーを域内で循環させ非基盤産業を充実させる地産地消などの考え方を学んだ。

千代地区では、千代しゃくなげの会の活動を紹介してもらった。千代しゃくなげの会は、若者が定住する活気ある地域をつくるために、多様な福祉サービスが、その利用者の意向を尊重して総合的に提供されるよう創意工夫するとともに、利用者が個人の尊厳を保持しつつ、心身ともに健やかに育成されるよう支援するという目的を持った社会福祉法人である。千代地区は戸籍や人口が年々減少しており、若者の定住者を求めている。人口減少の理由は千代地区が市の中心から15キロメートルほど離れている山奥であり、買い物に不便だったり高齢化が進んでいるからである。子どもの数も減少し、平成15年度から国県の補助金が打ち切られ、千代地区に二つある保育園の統合または民営化を検討した結果、千代しゃくなげの会を設立して、民営化を決めた。この際一戸一万円の寄付を全員一致で決議している。このことから千代地区の住人は地域復興にとってもやる気があることが分かる。

上久堅地区では、空き家を活用した移住対策の取り組みと、地元食材を使った弁当宅配サービスの説明を受けた。上久堅地区は、未来をひらく人と人々が支え合う元気な地区を目指している地域である。高齢化が進み人口が減少して、空き家が増加したり、野菜の廃棄処分問題等の課題が上がっている。

まず空き家問題を解決しようと活動している地域おこし協力隊の方の話聞いた。地域おこし協力隊とは、過疎や高齢化が著しい地方において、地域外の人間を積極的に受け入れその土地に合った地域協力活動を行ってもらい、地域の活動力の維持・強化を図る制度のことである。上久堅地区には現在100を超える空き家があり、そしてその内半分以上の家が今すぐ処分する気が無く、またほぼ90パーセントの空き家が売買及び賃貸借契約をできない状況である。空き家に移住したい人と何度も話を重ね、地域に馴染んでくれる人材を見つけようとしている。

弁当宅配サービスをしている食工房十三の里は食を通して地域課題を解決する女性の集まりのことである。何かは地域の宝になりうるか。その言葉を意識して課題解決に取り組んでいる。弁当宅配のきっかけは、健康寿命を伸ばしたい、余っている野菜をどうにかしたい等の、私たちにできることで地域貢献がしたいという地域住民の思いからである。食事を届けることで、上久堅地区を健康にできると同時に、地域住民の見守りができるので、地域にとって大切な活動をしているのである。

上久堅地区には小野子人参という特産品が存在する。しかし農家の減少により忘れられかけていた。それを復活させるため上久堅地区の有志が小野子人参クラブを結成し共同で耕作、収穫、販売に取り組んでいる。

(2) 初めてあんなに大勢の大学生と共同作業をした。私はあまり自分から話すことが得意ではないので話しかけにいけなかったが、大学生の方が積極的に私に意見や質問を問いかけてくれて、本当に助かっていた。

(3) 千代地区も上久堅地区も、地域復興へのやる気があり、とても感心した。私の地元の松川町でも、このような地域復興活動が出来たら良いと思うので、どのような案ができそうかこのFSで学んだことを活かして考察していきたい。そして、今後大人数で探究活動をする事があつたら、積極的に人に関わっていききたいと痛切に感じた。

今回のフィールドスタディの中で最も関心を持ったのは、飯田市各地区の地域コミュニティの活発さと、住民自治の高さである。地域コミュニティは社会の基盤となる重要な要素であり、共同体としてのアイデンティティの創出と、地域運営の安定化という点で大きな役割を持つ。飯田市千代地区においては、特に社会的サポートシステムのための住民自治が活発であり、その活動が住民の相互扶助と生活の質の向上につながるだけでなく、社会福祉団体として地域経済への貢献にもつながっていた。また、上久堅地区においては、地域の歴史ある小野子人參の再興と維持を農業コミュニティが行っており、地域コミュニティが文化とアイデンティティの保存・新たな地域ブランドの確立に寄与していた。

日本全体で少子高齢化が加速し、コミュニティの希薄化が懸念される中で、飯田市のように高い住民自治意識が今日まで維持されている地域は、かなり少なくなっているように思われる。今後も地域コミュニティを維持し、地域を持続的な発展に導くためには、地域経済循環の活性化が重要であると考えられる。

地域内での経済循環の効率化は、地域の持続化への基盤となる。地域内での経済活動が成長することは雇用機会の創出につながり、人口流出への対策と住民の所得向上に寄与する。また、地域内でリソースを最大化させ資源とニーズを循環させることで、他地域への依存がなくなり、外部の経済変動からの影響が少なくなるため、安定性を保つことができる。

地域経済の活性化は、地域コミュニティの持続化にとっても良い影響を与えると考える。地域内での連携と協力が促進されることにより、社会的な結びつきの向上と課題解決への認識共有につながる。現在の飯田市では、住民自治を主導しているグループに若者が参加できない・参加しづらいという現状がある。そのため、経済活動により若者の雇用創出と地域内での連携強化を図ることで、地域の新たな担い手としての若者の参入促進を図るべきである。

以上の点から、地域コミュニティの維持と持続的な発展のためには地域経済循環が必要だと考えるが、経済活性化の具体的な方策として、地域コミュニティによる地域ブランドのビジネス化と地域企業連携が挙げられる。

地域ブランドは、地域の歴史や文化に基づいたストーリーテリングを行い、地域の魅力づくりに効果的であるほか、地域の強みを生かすことができるため、新たな市場の拡大に有利である。また、リソースが地域内に集中するため、迅速な情報共有が可能であり、スムーズな問題解決とビジネスチャンスの発掘が可能である。地域ブランドビジネスは、地域への愛着向上と技術・文化の発展に貢献する。地域コミュニティが技術継承を担うことにより、住民の連携強化と持続化に寄与する。

また、現在飯田市で行われている地域内での経済活動は、企業を含めず住民のみで行っているものが多い。そのため、地域の異なるステークホルダーとの協力を得るためにも、まずは企業との繋がりを作るべきだと考える。地域企業の育成により雇用機会を提供し、若い世代の定住に努めることができる。企業の参入によってデジタルトランスフォーメーションを促進し業務の効率化を図ることによって、事業拡大を目指すことができる。

今後の地域経済は、地域コミュニティの強化と持続化に焦点を当てる必要があると考える。その中で、飯田市はコミュニティの基盤と経済資源を兼ね備えており、新たな地域づくりに対するリソースを持っていると感じた。持続可能な成長を達成していくためには、地域協力とネットワ

ーキング、地域資源の活用、地域ブランディングとマーケティングの戦略を組み合わせた経済的アプローチを模索していく必要がある。

このフィールドスタディで学んだこととして一番に挙げるとすれば住民自治の精神である。初めに訪れた千代地区では、千代しゃくなげの会の千代保育園と千栄保育園の合併問題では統合か民営化かの二択を地域にせまられることになったが自治会の積極的な住民との対話を目指し、勉強会や説明会を行うことで地域の問題を地域住民にも問題意識を持ってもらってみんなで解決に向かうことを目指した。地域の子供とお年寄りとは地域で守ることを目指している千代地区では合併はこの精神に反するため民営化することになったが、民営化にはリスクがついてくる。住民からは当初反対意見も多かったそうだが何度も話し合いの場を設け、意見をすり合わせ最終的には住民全員に出資してもらい共同してリスクを背負う民営化の選択肢を選ぶことになった。飯田市では地区ごとに自立していることは知っていたのだが、ここまでの地域住民全員での問題への解決のための取り組みが行われているとは想像をはるかに超えていた。地域の問題を地域住民が問題意識をもって主体的な活動することは地域のことを考える機会創出し、自分が住んでいる地域をより知り新たな課題を見つけることにもつながるかもしれないし、地域でのまとまり団結力、地域愛を育んでいるのだなと考えた。

千代しゃくなげの会の取り組みだけでなく十三の里の取り組み、小野子人参クラブの取り組みも、地域住民が主体となって地域をより良いものとするため、地域の文化を残し地域をつなげていくための活動であった。各地区の住民も地域のことを大事に思う活動がみられた。十三の里では弁当配達を通じて地域の人の状態を確認する福祉的なものであり、小野子人参クラブでは地域の伝統、特産品をつなげ地域の文化を受け継いでいく、広めていくそれぞれ地域を思っている活動であると感じた。地域を維持し、つなげていくためには行政だけの活動に頼るのではなく、地域住民が主体となった活動が重要で持続可能な地域を目指すために地域での輪は重要な要素であると感じた。

今後実践していきたいこととしては、今まで述べた地域住民主体の取りくみは、昔から自立して地域活動に取り組んでいる飯田だからこそのような問題解決に結びついたのであろうと考えたが、他の地域でこのような地域住民全員で問題意識を共有するためにはどのようにしてこのような輪を広げることができるかという疑問を持った。地域のことを住民が考える機会というものは他の都市などにいけば考える機会はほとんどないだろう。そこで自分が住んでいる町や通っている大学がある地域ではどのような活動が行われているのか、地域住民がどのように地域を見ているのか、どうすれば地域について考える機会を創出できるのだろうか、地域の特徴を生かしながらそういった課題を見つけ解決策を考えていきたいと考えた。持続可能な地域を目指すために地域での輪は重要な要素であると感じた。

(1) 勉学に関してのこと

初めに私が今回フィールドスタディを通して学んだことに関して述べる。初日は飯田市市長の佐藤健様の『飯田市（南信州）は『日本一住みたいまち』になる！』と題され基調講義を傾聴した。その中で、飯田市の地理的、あるいは文化的な魅力について知り、加えてリニア開通に向けた開発などの議論の必要がある問題について学んだ。二日目は最初にしゃくなげ会を訪問した。しゃくなげ会で学んだ内容は、飯田市の市民の自主性の高さがある。千代地区において保育園統合の懸念があった際、市民が自ら社会福祉法人のしゃくなげ会を立ち上げるに至った経緯などを理事長からお聞きし、飯田市の積極的な市民性を学んだ。その後の保育園への訪問では、自然教育などの説明により、飯田市の自然環境の良さを生かした自然教育に関して学ばせて頂いた。その後上久堅に移動して、食工房十三の里の取り組みを長沼様から、空き家対策に関する取り組みを地域おこし協力隊の地主様から学んだ。それぞれ一定の課題を抱えていることは理解し、質問を通してそれらに関して回答を得ることで理解を深め、地域に貢献する活動を広げていくことの難しさを再確認することが出来た。最後に私たちは小野子にんじんクラブの取り組みに関して長沼善明様から学習した。その中で実際に地域の特色を生かす難しさなどについて学んだ。フィールドワーク全体を通じた学びとしては、実際に記事やインターネット上の資料以上に、多くの人の意図が活動内容に影響を及ぼしており、実際のインタビュー等による調査が重要であるということである。

(2) それ以外のこと

私たちは2日目の後半から3日目にかけて合計8時間以上の間グループワークに取り組んだ。その中で学習したことについて述べる。私はグループワークの中で司会の役割を担当しており、今回は「地域社会をよりよくする地域経済のあり方」というテーマであった。初めに司会としてSWOT分析をはじめに行い、その後具体的な解決策に関して考察するという筋道を立て、議論を展開させた。その議論の中で出たよりよい地域社会や、地域経済に関してグループの中で明確に定義づけることによって解決策をより深くグループとして考察することが出来た。その後具体的に上久堅地区の活動事例などを例とした解決策を考察し、図字することで私たちの班の発表は2人の教授から良い評価を頂くことが出来た。

(3) それらを踏まえて

私はゼミの中で飯田市の飯田市立OIDE長姫高校で実施されている地域人教育が地域への愛着に良い影響をもたらす、地域の活性化にもつながるのではないかと趣旨の研究をグループで行っている。その中で今回のフィールドワークを通じて、実際の生の声をインタビューやアンケート等を通じて調査することの重要性を学ぶことが出来たため、9月に再度飯田市を訪問する際には、多様な視点から生の声を聴くことが出来るような調査を行いたいと考える。加えて今回のグループワークのようにSWOT分析などの分析方法を用いてより客観的な主観にとらわれない分析を心掛け、よりよい考察を導くためにグループで議論を深めたいと考える。そこからその他の分析方法に関して今後調査に活用するために理解を深め、適切な分析手法を選択し、地域人教育の強みや課題、今後の展望に関して研究を実践したいと考える。

(1) 勉学に関すること

事前学習から得られたこと

事前学習では、観光学部で学んできた持続可能性や資源についてのみでなく、地域経済の仕組みや地域内外の経済循環についても学ぶことができた。地域外から得た外貨を経済活動によって地域内で循環させていくことが重要であり、観光は外貨を稼ぐという点で地域に貢献出来るということを学んだ。ここで重要となるのは、観光客に全国チェーンのホテルや飲食店ではなく地元宿泊施設や飲食店で消費してもらうこと、食材などに関しても地元で使う食材は地元のものを使うことといった努力あってこそこの理想的な地域経済の形成につながるということである。

グループワークから得られたこと

私たちのグループでは、地域コミュニティと経済という視点から飯田について考えた。2日目の千代地区、上久堅地区への訪問や頂いた資料から若者の地域参加が課題の一つであると考えた。課題テーマである「地域社会をより良くする地域経済の在り方」について考える中で、「より良い地域社会」と「地域経済の在り方」より良い地域社会とは、こどもから若者、お年寄りまで幅広い年齢層がその地域に対する愛着を持ち、地域の維持または改善に向け行動することのできる社会であると考えた。そのような地域社会を作るために必要な地域経済の在り方とは、事前学習で示された基盤産業によって域外からの外貨を得、その外貨を非基盤産業によって地域内で循環させる仕組みができてきている状態であると考えた。この社会を築く上で、未来を担っていく若者が不足していると感じ、空き家事業などの協力の上で移住を促したり、ボランティアではなく安定した収入を得られる活動に変化したりすることが求められるという結論に達した。

全体を通して得られたこと

このフィールドスタディに参加したことで、地域の中での観光の位置づけと地域における経済的な視点を獲得することができた。現在までの学生生活において、ブランドや顧客満足といったマーケティング面、地域の自然や文化の保存と観光への取り込みといったことについて学び、その中では地域を観光地という視点で見てきた。しかし今回は事前学習や他大学の学生との交流の中で観光というものを中心にその他の事象を見るのではなく経済と地域、そしてその中で観光はどのように関わっていくのかという新たな視点から地域に臨むことができた。

(2) それ以外のこと

グループワークから得られたこと

私のグループは他グループに比べ少人数であったが、そのことにより、意見交換やそれぞれの果たすべき役割を見出し全うすることができたと認識している。プレゼンテーションで発表したことに留まらず、理想的な経済活動やそのために必要なこと、それぞれが学び経験してきた事例についても知識を共有し合えたことは非常に有意義であった。

発表の振り返り

2日目のグループごとの活動を意識し、学んだことと現地での活動を活かした発表を行うことができたが、具体的な提案まで落とし込むことができなかつた点が不足していた。具合的にどの

ような地元の資源を使うことによって地域経済を循環させるかということまで盛り込むことができればより良い発表となったと思う。

(3) (1) (2) の内容を踏まえ、今後どのようなことを実践していきたいか

このフィールドスタディでは、今ある課題の解決方法を考案するだけでなく、その解決方法の作用する範囲や地域内の循環の仕組みづくりといった現実的な実施についても考える必要性があることやその考え方を学んだ。現実的な実施まで想定する場合には観光はあくまで手段であり、その先に何があるのかという状態を目指すのかといったことを想定することが重要である。特に私が興味のある衰退した市場の復興などにおいては地域内循環や地域住民の協働などについて考えていく必要がある。このフィールドスタディを通してそのことを改めて自覚し、学んだことや考えたことを活かし、かつ地域に向き合い経済にも目を向けることを実践していきたい。

(1) 様々な学部の大学生と実際に飯田に住んでいる高校生のグループでSWOT分析を用いて、いろんな視点から問題点や課題、解決策を見出せる事ができた。大学生の専門分野から見る問題点や課題は私自身では思いつかない事があり参考になった。強み、弱み、機会、脅威の観点から考えを出す事で、その中で結びつきなどが出てきて、より細かな問題点を出す事ができた。飯田の産業の武器になる強み、強化すべき領域、経営を脅かす外部環境といった現状を明確な根拠とともに把握し、実現性の高い事業戦略やマーケティング計画の策定を考える事は高校の授業では取り組むことは難しいので、今回の活動で詳しく知る事ができた。事業の置かれている経営状況などで内部環境や外部環境の見直しを考える事ができた。SWOT分析で、事業の戦略方針が明確になり、考え方が分かりやすくなり、解決策を出す事ができ、既存事業の改善点や、新規事業の将来的なリスクも見つける事ができた。内部環境については事業の「ブランド力」「技術」「人材」「販売」「設備」などの現状を把握することで、事業の「強み」と「弱み」が明確になり、強みをより高めることで競合との差別化が可能になること、弱みをカバーすれば他社との競争力を高めることが可能だと分かった。内部環境と外部環境、機会と脅威などの両側面に目を向けることで、客観的に全体の状況を捉えて分析できる点が面白いと感じた。また、今回対象となった事業についてよく知らなかったが、各項目についての議論を進めることで、分析対象となった事業などへの理解が深まり、飯田の事業についての関心が高まった。

(2) 大学生の方々のコミュニケーション力が高く、とても優しく丁寧に接してくださったり、グループのメンバーが納得できる意見を出して流石だなと思った。グループ内の意見交換でも、自分の意見を優先して話さずに、他の人が出した意見を参考にしてより良い解決策を出していたりして、まとめ方が上手だなと思った。解決策を見つけ出す上で、疑問点を沢山出して様々な見方で考える事ができた。質問の時間も、相手の方にしっかり伝わるように説明をされていたり、プレゼンテーションでの話し方、言い回しも参考になることばかりだった。スライドも見やすく、しっかりと聞き手に伝わるようなまとめ方だった。分からない事や、疑問点があっても、大学の教授や、地域の人、説明をして頂いた方に積極的に聞きに行っている姿を見て私も聞けることがあったら聞こうという気持ちになった。

(3) なんとなくでSWOT分析をおこなっても、成果が得られず、議論がブレてしまうので、しっかり目的を明確にし、共有した上で分析や議論を行えるようにしたいと思う。分析対象は何か、どのような目標を掲げているのか、対象の顧客属性は何か、競合企業はどこか、など、前提の条件を整理して、メンバー間で共有する事が大切であり、認識が曖昧のままでは軸の定まらない分析になってしまうので、そこを注意して用いていきたい。プレゼンテーションを行うにあたって、話し方や目線をどこに向けるかなどが苦手だったが、今回の活動で沢山の刺激を貰った事でこれからのプレゼンテーションでうまく活用していけるようにしたいと思う。聞き手に明確に伝わるプレゼンテーションのスライドの作り方(写真やグラフ、配列など)まで考える事ができたので、これからの授業で参考にしたい。言葉の言い回しや、使い方などが綺麗でフィールドスタディが終わった後も凄かったと思うほどだったので、私も使えるようになりたいと感じた。進学先でも、他学部との連携があるので今回の経験をうまく吸収し、SWOT分析などを用いて戦略を練っていくことができたらと思う。

1.フィールドスタディではBグループに属し、主に木質パレットやメガソーラーいいだについて職員の方から概要を説明をしてもらい、班員と議論をしたうえで質問を考え職員の方に答えてもらい学びを深めた。さらに実際に見学に行き普段では見られない現場を見ることができ、貴重な体験であった。最終課題として班員でパワポを作った。特に木質パレットを扱う南信バイオマスとメガソーラーいいだについて発表した。木質パレットとは地産地消のエネルギーの一つで森林保全や資源活用政策の一環としてストーブ、ボイラーで利用されている。南信バイオマスは地域間伐材を原料とする木質ペレットの製造を主な事業としている。環境保全の他に流通の停滞を防ぐ目的もある。流通が停滞すると林産生産が停滞、就労人口の減少、林家の担い手不足、管理不足などの問題点があげられる。森林機能の低下を防ぐ努力をしている。しかし現状ではコロナ感染症拡大による温浴施設の廃業によるペレット需要の低下、新規設備導入の鈍化で厳しい現状だ。プレゼンに向けたパワポ作りの中で南信バイオマスのSWOT分析をした。私たちの班ではsに地産地消、wに付加価値の不足、oに原油価格の高騰による需要の増加、tに原油価格の下落による需要の減少、手入れされていない森林、コロナが挙げられた。メガソーラーについては「ゼロカーボンシティいいだ実現へ」というタイトルで飯田市ゼロカーボンシティ推進課の方に来ていただいた。まず飯田市の地域自治の特徴は二つある。一つ目は住民の自治活動が活発であり、行政もそれを支援していることだ。具体的には住民による自治活動が地域作りの原動力であるところ、旧村単位の20地区に自治振興センターを設置して、住民主体の自治活動を支援している。二つ目は公民館が「住民自治の学校」として重要な機能を果たしていることだ。地域問題をとらえた事業の企画実戦経験を積んだ住民の中から、自治活動組織の役職を担う地域リーダーが発掘育成されている。このように飯田市では当事者意識を持った政治がおこなわれている。飯田市は環境モデル都市に選ばれるほど飯田市の住民と掲げた目標には環境問題を意識したものがおおい。その中でもパワポを使った発表の中では特に再生可能エネルギーの導入による持続可能な町作りを取り上げた。飯田市が行っている再生可能エネルギーの代表であるメガソーラーいいだは発電所出力が1MWで想定年間発電量は100万kWhでこれは一般家庭300世帯分の年間使用電力に相当する。想定年間CO₂削減量は400tだ。これは飯田市と中部電力が協定締結したことによって実現した。飯田市が用地を用意、用地の使用を許可し、太陽エネルギー普及啓発施設の設置をし、中部電力が発電設備を全額負担で設置、発電所の管理、地元2地区に安定的に電力供給をした。メガソーラーいいだのSWOT分析では、sはCO₂削減、日照時間が長い、wは発電量が気候に左右される、市民の認知度の低さ、リスク分散不足、oは企業・団体の協力、環境モデル都市に選ばれたこと、SDGsムーブ、市民の理解、tでは協力企業のコストが大きい、災害時リスクが挙げられた。木材パレットとメガソーラーいいだについて地産地消が実現しているといえる。飯田市事業者の尽力によって市内での電力消費、収益の地域活動利用がかなっている。しかし、現状の問題点として自治振興センターやまち作り委員会を中心に町内会に対しての太陽光発電施設設置についてなどのアプローチ、理解の獲得はできているが、認知度はないことや同じように市内での電力供給等飯田市内の地産地消の制度は整えられており、基盤はできているが市民の理解度や認知度はない。解決策としてスーパーや駅前にポスターを設置、りんごんの活用による市民の認知度向上とセミナー、うごくる〜むなどによる市民の当事者意識の向上が提案できる。

2. 修学旅行ができなかった代であった分民泊の夜などは学生らしい楽しい夜が過ごせて充実していた半面、立命館や和歌山大学の学生にリードされる場面が多くあり、不甲斐なさも感じた。
3. 環境問題に関心を持つ素晴らしい機会になった。これからの時代はさらに議論されていく内容だと考えているため、学びを深めたいと感じた。

(1)フィールドスタディ事例調査での学びを通して

B環境と経済におけるフィールドスタディでは、地域資源を利用した、ゼロカーボンシティへのまちづくりの取り組みについて学んだ。まず、南信バイオマスの活動のひとつである地域間伐採を原料とする木質ペレットの製造については、SWOT分析より、強みでは地産地消、弱みからは付加価値の不足、機会からは原油価格の高騰による需要の増加、そして脅威からは原油価格の下落による需要の減少、コロナウイルスの影響を受ける事がそれぞれ挙げられた。次に、飯田市と中部電力との協定締結により運営されている、メガソーラーいいだでの事例調査のSWOT分析からは強みに日照時間が長いこと、CO2削減、弱みでは気候に発電量が左右されること、リスク分散の不足、機会では環境モデル都市に選ばれたこと、市民の理解、そして脅威には協力企業のコスト負担が大きい、災害時のリスクなどが挙げられた。これら2つの事例調査からの分析からは、飯田市事業者の尽力、市内での電力使用、得られる収益の地域活動への利用がサイクルとなり、運営が行われているのだと読み取り、地域での生産・消費の循環、つまり、飯田市での電力事業からは地産地消が行われていると考えられた。地産地消のメリットには輸入コストの削減やCO2排出量の抑制、また、災害時のリスク削減、そして自治力の向上などが挙げられる。しかし、現状での問題点も見つけることができる。それはまちづくり委員会や町内会などの活動を取り入れようとする方達に対して理解やアプローチは獲得出来ているが、いまいち活動についての内容や目的についての認知度があまり無いのではないかと考えられる。さらに、飯田市内での電力の地産地消の制度が整えられているのにも関わらず、飯田市民の理解度や認知度が低いことが課題であると言える。このような現状を踏まえて、市民の認知度の向上と当事者意識の向上がさらなる地産地消の定着を図る為に必要であるという事が考えられた。このように、フィールドスタディでの調査により、飯田市ならではの取り組みを知り、地域内で循環させる電力についての知識を得ることが出来た。

(2)実際に飯田市を訪れたことで気づけたこと

農家民泊での体験はとても貴重であった。私が訪れた民泊先のご夫婦はそれぞれに飯田が出身地ではなく、結婚や民泊の経営が要因で住まいを飯田に決めたとのことであった。しかし、民泊体験中にはご近所さんが訪ねてきたり、車で送迎の間にも車を停車させてまで何人もの知り合いに挨拶し、雑談したりと、飯田のまちが地元かと思わされるくらいであった。地方であっても、地元民からは移住者という形で見られ、なかなかなじむことは難しいのではないかと考えていたが、実際には、地元の方たちの受け入れによって飯田での生活を始めることができたのだと聞き、地方での地域コミュニティの在り方や重要さ、地域住民間の結束の強さを学ぶことが出来た。また、食卓での地産地消の多さ、栽培方法、郷土料理がそれに至った経緯を知り、都心での生活では体験できない経験となった。同様にして、飯田市の歴史散策、和菓子探訪からも実際に街を歩いたことで街づくりの在り方についての知識を深めることが出来た。

(3)この活動を通して

地域経済フィールドスタディでの3つの事例調査の報告会、また、飯田市長の話を通して、飯田市の発展していくためのまちづくりとして、リニア開通に向けた取り組み、環境文化都市へのエコ活動、伝統をつないでいくための努力、豊かな自然を守りつつ自然の新しい魅力発信のため

の活動、赤飯饅頭やきんつば、リンゴや焼き肉といった食と人との繋がりのための取り組みなど、飯田市であるから発信できる魅力について知ることが出来たので、この知識を用いて課題を発見するための力、その解決方法を見つけるための幅広い知識、そしてこの一連の考え方を他の地域にも当てはめたり、比較しながら世界全体を地域経済という視点から発展させることが出来るようになるために学習していきたい。

(1) 勉学に関すること

まず、事前学習として飯田市における太陽光発電のことなどを中心に環境問題について調べていたが、実際に現地へ行き話を聞くと再度改めて理解できたことや同じ内容でもより具体的に知ることなどができた。例えば、太陽光発電のことについて考えると事前学習では飯田市内における太陽光発電システムや事業は上手くいっていると分かったが、実際に現地へ行ってみてお話を聞くとその通りであった。しかし、その話の中でも住民の中での知名度は少ないことや、現地の学生に話を聞くことで若者にはあまり浸透していないことも知れた。

また、なぜ飯田市では太陽光発電事業が成功しているのかを知ることも目標として挑んだが、実際に話を聞くことでそこにも気づけたと思う。まず、土地や日照時間などの自然条件が太陽光発電にとっても適していることが挙げられる。2つ目には、地元企業や団体の協力の強さが挙げられる。メガソーラーいいだにおいて市と協力体制をとり発電設備設置費用を全額負担する中部電力や一般向けの電力買取制度を整えたおひさま進歩エネルギー株式会社などである。どちらも市と協力はしているもののそれぞれ大きな負担などがあるにもかかわらずこのような取り組みをしている。そして、最後には地域住民の理解や受け入れの体制に成功の要因はあると考えられる。話の中で認知度はまだ少ないといったことも聞かれたが、そうであってもこのように事業を展開できていることから考えるとこれは理解が大きいと考えられる。また、そのような理解を得るための市の活動も活発であり市全体として太陽光発電事業に対しての活力が見えた。

(2) それ以外のこと

まず、初対面の同年代の人々が8人集まり突然グループワークをしようと思ってもできることではないと思っていたが、実際集まり話を進めていくとそのような心配はなく思っていたよりもスムーズに話し合いが進んだと思う。これは、全員が飯田市における環境と経済について学習しようという一つの目標を持っていたからであると考えられる。また、それぞれが自分の考えを持ちそのうえで現地の人から話を聞いたのでのちのグループワークの活性化につながったと思う。このことから、現地調査などフィールドワークを行う上では事前学習などで自分の知識を蓄えておくことが重要であると考えられた。

(3) 今後実践していきたいこと

まず、どのようなフィールドワークであれ事前知識を確実に蓄えていこうと思った。直近では再度飯田市での現地調査があるためそこに向け今回のFSで得た知識を再度確認し整理しておこうと思う。そこで得た知識をもとに実際に現地へ行くことでより具体的にまたは異なったものを得られると思うし、より濃く残るものになると考えられる。しかし先入観として強く持ちすぎないようにすることも忘れず柔軟に捉えることも重要であると考えられる。

参加して得られたこと

(1)勉学に関すること

今までゼミの研究対象地区が飯田市ということもあり、飯田市についてある程度の基礎知識を持っていると自負していました。しかし飯田市では日照時間が長く太陽光の設置に恵まれた地域であること、他にも人口に占める高齢者の割合は全国的に見ても若者の割合が多いまちであることや、日本一焼き肉店が多い街、高野豆腐や水引、半生菓子有名な街であることなど地域の特性を知ることができました。またそれだけでなく、実際に飯田市長の方から飯田市が環境に特化し、環境モデル都市にまで選定されるようになった背景など歴史的観点から飯田市について知り、今後リニアが開通する飯田市において都市計画をどのように進めていく予定なのか飯田市の経済と環境どちらの発展も進めていくビジョンを知ることができ、インターネットでは知ることができない貴重な学びになりました。

またグループ別での学習では株式会社南信バイオマスの方からは、飯田市では林業が盛んな地域ではないということ事前学習で知っていたが、盛んにならない背景として人材不足やコロナウイルスなど様々な要因が積み重なり、現在では一つの会社が簡単に解決できる問題ではないということ、今ある林業の状況の中で株式会社南信バイオマスが目指す環境への取り組みについて知り、実際に木質ペレットを製造している現場にも視察したことでペレットについて目で見て学習することができました。

(2)それ以外のこと

1つ目は民泊先の方から伺ったお話です。飯田市についてお話を聞いた際に、その方は中国の方で移住当初は日本語があまり得意ではなくコミュニケーションをとるのが困難だったとおっしゃられていました。それでも町内会やスーパーであった飯田市民の方が距離を置くのではなく、積極的に輪に入れて一緒に会話をしようとしてくれていた優しい姿勢にすごく助けられ、その方自身も日本語をもっと話せるようになりたいと思わせてくれるようになったそうです。今の日本は地域の希薄化が進んでおり地域住民の方との交流を控える傾向にあり、地方でもよそ者との交流を避け仲間内だけで仲よくする傾向にあると感じています。しかし、その中でも飯田市民の方はどちらにも属さず、移住者の方にも積極的に購入し、地域全体の結束を深めていこうという住民の姿勢が伝わり私自身も胸が熱くなりました。

2つ目はグループワークでの経験です。今回は班のメンバーがほとんど初対面であったことから始めは議論が円滑には進みませんでした。お昼時間や移動時間でアイスブレイクをし、午後にグループワークを始める際には、積極的に議論を進めていくメンバー中心に煮詰まった話し合いを知ることができました。私は普段あまり自分の主張があってもその意見が間違っていないか不安になり考えすぎてしまい結果何も主張することができずにいることが多かったのですが、今回は誰かが意見を述べるとその意見を誰も否定することなく「それいいね」と受け入れてくれる環境であったため、私自身も思ったことを一人で考える前にチームで共有し、それに対しほかの班員も意見をつけ足してくれ議論を深めていくことができ、最後は自信をもって発表することができました。今回の経験から、いいチーム環境を形成するためには初めのアイスブレイクを使ってチーム内で信頼関係を気づくこと、また自分の頭で考えすぎることなくとりあえず投げかけてみることで、それが議論を円滑に進めるうえで大事な行為だということに気づきました。

(3)以上の内容を踏まえ、今後どのような事を実践していきたいか

今後は(1)で得られた知識を使った自分たちのゼミでの研究に生かしていきたいです。また(2)で得られたチームの環境づくりにおいて今後はゼミでの話し合いに限らず、インターンや就職試験でも大切な行為であるため適切な信頼関係を築くためアイスブレイクをうまくできるようにさらに心がけ、今まで苦手意識のあった話し合いでも自分の頭で考えすぎることなくとりあえず班員に投げかけてみることに、逆に班員が意見を述べたときには自分から否定をせず肯定的な発言ができるよう実践していきたいです。

テーマ：このフィールドスタディに参加して得られたこと

(1) 勉学に関すること

初日、基調講義では、飯田の現在の取り組みと経緯について、幅広い学びを得られました。飯田の立地や抱える課題、将来のビジョンやブランディングについて、事例として良い学びになりました。市長のキャラクターや熱意が印象的で、先進地域の首長のあり方について一考えを得られました。農家民泊先では、農家の暮らしについて解像度を高めることができました。特に私が泊まらせていただいた方々は、農泊に積極的に取り組んでいる、組合長の方のお宅で、様々なこととお話いただきました。受け入れる観光客のバラエティや客層、活動頻度や個人事業主としての収益、今に至るまでの苦悩や農業と農泊の両立など、幅広い学びを得ることができました。農泊のプロセスや農家暮らしの解像度を上げられました。

2日目、Bコースのフィールドワークでは、市長の話の延長で、現場レベルで行われていることをこの目で感じることができました。飯田の取り組みの中でも、村一帯を支えるために必要なソーラーパネルの量や、ストーブを作るために必要な機械や工場の規模などについて、現場で見ないとわからない部分を正確に理解することに繋がりました。

3日目4日目のグループワークと発表から、飯田という事例について学びを深めることができました。グループワークでは、多様なバックグラウンドを持つメンバー同士でアウトプットを完成させるための議論や過程が新鮮で、大きな学びとなりました。全体発表では、他の班の視察事例や発表方法、質問を考えたり答えたりすることで、自分の班以外の飯田の事例を深く理解できたうえ、議論の中で必要な事に関する学びを深められたと考えます。

(2) それ以外のこと

研修センターでの宿泊は、普段では無い経験で刺激的でした。出身やバックグラウンドが違いうえ、知り合いが数人しかいない状況の30人程度で大部屋に泊まり、2晩を共に過ごすという過程の中で、多くの学びがありました。皆大人として、入浴から就寝準備まで皆で協力し計画的に行い、素早く打ち解けあい、楽しみながらも翌日の勉学に備えるということが、社会人の建前に通ずるもののように感じました。また、むとすぷらざの役割や、飯田市の景観、ガイドツアーなど、飯田市の魅力的な土地・人・取り組みを感じられ、一地域としてのあり方についてとても魅力的な事例として、とても勉強になりました。

(3) (1)(2)の内容を踏まえ、今後どのようなことを実践していきたいか

今後は、飯田市の事例を参考にして、経済循環やゼロカーボンのエッセンスを取り入れた考え方をもち、仕事や研究に活かしていきたいと考えます。また、異世代他文化交流によるグループワークやむとすぷらざの取り組みを参考に、共創の重要性を理解し、現場への落とし込みについて挑戦できるように様々な手法を考えていきたいと考えます。

このフィールドワークを通じて、飯田の取り組みから観光以外の方法での市町村の町おこしの実態を学んだ。また、それらの環境づくりを通じて、観光客の増加やそれから先の交流人口増加につながると感じた。また、学輪の取り組みを通じて、飯田市への愛着がわき、自分自身が飯田市の関係人口になる過程を感じることができた。

(1) 勉学に関しては、私は観光学部で観光を学んでいて、今回のコースである環境と地域で聞いた話は直接的には観光には関係ないと感じた。しかし、環境を守ることが結果的に地域住民の住みやすさにつながっていくことになっていることを実感した。特に、ゼロカーボンについては防災からスタートした意識が、環境を守ることにつながっていると感じた。これは地域住民の住みよい環境を作る、行政が行うべき仕事だと思った。加えて、そのような取り組みを行うことによって環境に配慮した旅行を行う観光客に選ばれやすくなるのではないかとという点や、災害に巻き込まれた観光客にとっても安心することができる太陽光の設備であると思った。そういったことをアピールすることで観光地や名産品とは別の視点での観光客誘致につながるのではないかと考えた。また、バイオマスに関しては、和歌山県内でも取り組みの事例があり、身近な問題として考えることができた。バイオマスの体験をより観光にも活かすことができるのではないかと考えた。例えば木製チップのストーブ体験や客室などに設置してもらうことで、飯田でしか体験できない特別なものになり、これも観光から交流人口、交流人口から関係人口へとつながるのではないかと思った。環境と観光のつながりを学べたのはこのフィールドワークに参加して得られたことである。

(2) それ以外のことについて、特に私がこのフィールドワークで学んだことは、飯田市の学輪での取り組みが地域の交流人口に関わっていると感じたことだ。特に、実際に飯田に住む高校生と他府県から来た大学生が関わることで住んだことのない飯田という土地について、深く知ることができ、自分たちが交流人口、または関係人口の一つになったのを感じた。農家民泊でも、実際に飯田に住む家庭に入って、同じ体験をすることで、飯田市への愛着や思い出が生まれ、どういふ人が住んでいる町なのか具体的な想像がつきやすくなったと思う。自分自身がそのような過程を経験することで、大学での学びについて理解しやすくなったと感じる。また、観光以外の側面から行政の取り組みや地域企業の産業を学ぶことができ、様々な視点を得ることができたのも、学輪での学びだと思った。

(3) 今後、1と2のようなことを活かして、地域の関係人口を増加させる方法について、より調べたいと思った。今回のような体験が一般的な観光客にも可能な形にできないかより調べたいと思った。特に木質バイオマスについては、和歌山県の事例をより調べ、活かすことができるのではないかと思う。また、他の太陽光発電や環境に配慮したまちづくりについても、和歌山県で活用できないか学びたいと思った。加えて、観光において環境に配慮するという点は今後、価値が上がっていくものだと考える。なので、環境先進都市が実際に観光にどう影響するのか、海外の観光客や国内の観光客によって環境への意識がどう違うのかについても興味がある。また、飯田市や長野県という言葉が付いた特産品や旅行先には今後も行きたいと感じた。

私は今回初めて地域経済 FS に参加しました。私がこのフィールドスタディに参加して、得たことは自分の住んでいる地域、飯田の取り組みについて知れたことです。学校の授業で飯田市が環境モデル都市に選ばれたことは習っていて知っていたのですが、環境モデル都市になるための取り組みや今後の取り組み、課題などは習っていなかったもので、今回知れたので良かったなと思いました。

まず最初に「地域エネルギー・資源循環に向けた仕組みと木質ペレット」についてお話を聞きました。当時の長野県産材流通のそこの見えない需要の低下、林地内の切り捨て間伐も最大に、平成 16 年のに設立した地域間伐材を原料とする木質ペレットの製造を目的とした、森林整備資格をもった飯伊地区内の民間五社の組合の南信バイオマス協同組合はチップ需要の低迷もあり、チップ加工会社を中心にペレット製造に取り組むことになった。これからの未来、流通が停滞すると林業生産が停滞、就労人口の減少、林家の担い手不足、施業・管理不足などの課題があり、今後 15 年に起こる森林機能の低下を予想することは容易でした。しかしこの地域間伐材を活用して再生可能エネルギー発電の一つであるバイオマス発電の燃料としても使われている木質ペレットを製造することによって、地域エネルギーの資源循環を目標としています。

次に「2050 年ゼロカーボンシティいいだの実現へ」についてのお話を聞きました。ゼロカーボンシティとは、再生可能エネルギーによって稼働される都市であり、二酸化炭素排出量がなく、温室効果ガス排出において地球に害を及ぼすことはない都市のことです。飯田市では太陽光市民共同電事業として RPS 法施行により、電力会社が新エネルギーで生じる電力の買取を開始した。おひさま進歩エネルギー（株）は市民出資により、太陽光パネル設置の資金を調達し、自社の負担により太陽光パネルを設置する取り組みをはじめました。

今回初めて大学生と一緒に学習をしました。飯田市には大学がとて少なく大学生と交流する機会がなかったので、一緒に学習をされていてすごく新鮮でした。見学などが終わってみんなで報告会の準備をしているときも意見がたくさん飛び交っていてすごいと思いました。私は自分の意見をなかなか言葉にすることができなかったので、今後このような場があったら今回の大学生のように自分から積極的に意見を出したいと思いました。

報告会では違うグループの発表を聞いて、自分たちの学んできたこととは違う観点から地域と経済の関わりについて知ることができました。この地域経済 FS で学んだことは難しかったけれど、将来地元で働くときに役に立つと思ったし、この経験を活かして今後進学や就職したときに色んな人と共有をして、飯田の取り組みを広く知ってもらいたいと思いました。

このレポートでは長野県飯田市で行われた「地域経済」フィールドスタディについて書いていく。(1)では勉学に関すること、(2)では勉学以外のこと、(3)では(1)、(2)を踏まえ、どのようなことを実践していきたいかをまとめていく。

(1)勉学に関すること

勉学に関して特に興味を持ったことは、環境と地域について学んだ南信バイオマス協同組合の取り組みについてだ。木材ペレットをなぜ活用しようと思ったのか、どのように応用し活動しているのかを学ぶことができ、卒業論文の参考になった。日本の森林がどのような状況にあり、この状況が各地域にどのような影響を及ぼしているのかを周りの学生の方たちと考え、新鮮な意見を取り入れることが出来た。今回の学びで気づけたことは、ゼロカーボンやカーボンニュートラルを主とした再生可能エネルギーは地域の中で地産地消を行うことが、より良い地域をつくるために必要な道の一つであると考えられるようになったことだ。エネルギーを他の地域からではなく自地域にある、使われていない地域材でエネルギーを作り、地域で使うことが地域内での経済活動をよりよくできるのではないかと考える。ペレットについても興味深い話を聞くことが出来た。コロナや世界情勢の影響を大きく受け、安定的な需要が生まれにくいペレットが現在ではSDGsを重視している大企業が扱うエネルギーとして注目され始めている。おひさま発電所など地域住民の協力を得て活動している活動や、メガソーラーいいだのように過去の災害の経験を活かした取り組みなど興味がわいてくるような活動をされているので、より深く知りたいと考える。他の班の研究結果でもあったように、地域全体が協力し、一丸となって取り組むことの大切さを学ぶことができ、学ぶ場所が机の上だけではないということを再確認できた。実際に現場や経営、政治に関わっている方たちの言葉を聞くことは貴重な体験であると感じ、教育機関で学ぶことだけが正しいと決めつけるのではなく、社会の流れに柔軟に対応して働いている方々の教を学びに活かしていきたいと考える。

(2)勉学以外のこと

今回のフィールドスタディでは、民泊体験や合宿施設での2泊3日、飯田駅周辺の散策など普段の生活ではできない貴重な体験を得ることが出来た。民泊体験では、飯田市での農業について、飯田市の再生可能エネルギーへの取り組みについての意見、家族のこと、民泊のことなど様々なことを話していただいた。自身の実家とはまた違う故郷のような感覚を感じ、安心して生活することが出来た。民泊している地域のお盆の郷土料理や、育てている作物を御馳走していただき、飯田市をより身近に感じ、学びに集中することが出来た。合宿施設では他大学の方たちと交流を深め、現在でも連絡を取り合うほどの友人を作ることでもできた。他大学の方たちと交流することで、それぞれ違う地域の話に花を咲かせ、充実した騎亜館を過ごすことが出来た。駅周辺での散策では、飯田市の町は実際どのような経緯で形成されたのか、どのような出来事があったのかなどグループワークだけでは知ることが出来なかった史実などを学ぶことが出来た。これらの経験は今後の生活への大きな糧になると考える。今後の学校生活、社会生活に活かしていきたい。

(3) (1)、(2)の学習を踏まえ、どのようなことを実践するか

上記で書いたことを踏まえ、主に2つのことに取り組んでいきたいと考える。一点は、卒業論文につながる学習をすることが出来たので、今回の事例やシステムを他の地域にどのように活かし、どのような問題点があるのか等を自身の中でまとめ、今回の学習をアウトプットすることに

取り組んでいきたいと考える。もう一点は、自分が住んでいる地域に今回の学びを活用していくことである。私の実家がある地域には森林問題や災害問題など飯田市と類似した点が多くみられる。経済規模や人口は異なるが、地域に適した政策を考え、持続可能な地域の再現を行いたい所存である。

(1) 勉学に関すること

このフィールドスタディでは飯田という具体的な事例から、持続可能な地域の在り方について考え、探求することが出来た。実際に地域の暮らしや歴史を学ぶことで、どのように地域と経済が関係し、発展してきたのかを知ることができた。そして、それをもとに「地域を持続可能なものにしていくための在り方」を、飯田市を事例に考える経験をした。

Bグループは「環境と経済」というテーマのもと、飯田市において環境に配慮した取り組みや環境を守る取り組みをビジネスとして行っている企業について学んだ。そこでは、飯田という地域の特性を生かした経済の在り方があった。他の地域やビジネスモデルを真似するだけでなく、地域の課題や文化、歴史を上手く取り入れながら飯田の経済をつくっていた。それが、結果的に持続可能な経済や地域を作る要素のひとつともなっているのではないかと考える。また、企業だけではなく、地域の人や行政といった様々な役割を持つ人が共に協力することで、環境と地域と経済の3つの軸を欠けることなく、地域経済を継続していくことが可能であると考えた。

グループ活動においては、地元の高校生と他大学の人と協力しながら、課題に取り組むことができた。企業の講義や現地での学びをもとに、どのように課題を解決していくかを、分析ツールなどを用いて論理的に説明出来た。論理的に説明することと、実際に課題の解決方法を自分たちで考えて提案することの難しさを痛感した。大学の講義では客観的に問題点を学び、考えることはあったが、そこで学びを終わらせていた。今回理論を実際に活用する経験をして、どのようにしたら学んだ知識を実践まで応用できるようになるまでが、学びであると思った。

(2) それ以外のこと

民泊という体験をすることで、普段は関わりがない地域の暮らしを体験することができ、自分の中の視野が広がった。旅行などでは経験することがあまりない地域の暮らしを体験することで、地元の方々の暮らしを少しではあるが想像することができ、そこで感じたことを課題の発見や解決にもつなげることができた。ほかの他大学の学生とも生活を一緒にすることで、情報を交換したり、新しい考え方を得たり、することができた。短い時間ではあっても、生活を共にすることで、互いの環境や価値観の小さな変化に気づき、それが自分自身や地域の特徴にもなっているのだと発見を得ることが出来た。

このフィールドスタディで飯田という地域に対して、愛着の様な特別な気持ちを抱くことができた。それは、今回地域の人の視点に立ち、生活を体験したからであると思う。旅行での観光客という立場とは違った経験をしたことで、飯田での暮らしがより身近で現実的に感じる事ができた。これは、地域の関わり方の形として良い経験であり、私の関心でもある「地域とのつながりかた」との深く関係してくると考える。ふるさとでも住んでいる地域でもないが、自分の中において特別な地域との関わり方をする「第二のふるさと」という存在。このフィールドスタディでは、そのきっかけを作る体験が出来たと思う。この貴重な経験を今後の研究にもいかしていきたい。

(3) (1)(2)の内容を踏まえ、今後どのようなことを実践していきたいか

この飯田でのフィールドスタディに得たことや学んだことを今後の自分自身の学習・研究に役立てていきたい。飯田という地域について学習し、課題解決の方法を考えるという過程は他の地

域にも応用することで、研究をより多角的な視点で進めることが出来ると考える。また、飯田という地域の物差しを他の地域と比べることで、より研究を濃いものにしていきたい。

(1) 地域経済フィールドスタディにおいて、環境と経済コースでは市民出資による新電力会社、間伐材を利用したペレット製造等の再生可能エネルギー活用を対象として、飯田市ゼロカーボンシティ推進課の方と株式会社南信バイオマスの方にお話を聞く機会をいただいた。

株式会社南信バイオマスは、林業関係である民間5社によって廃材の再利用や地域木材を生かした地産地消のエネルギー利用、二酸化炭素の排出削減を目的として、間伐材を原料とする木質ペレット、住環境資材としての提供・普及に取り組む。長野県産財流通において、底が見えない需要の低下と林地内の切り捨て間伐も最大となり、株式会社南信バイオマスでは、チップ需要の低迷もあり、チップ加工会社を中心としてペレット構造に取り組むこととなったのである。流通の停滞によって林業生産が停滞、就労人口の減少、林家の担い手不足、始業・管理不足となり、今後15年における森林機能の低下が容易に予想することができたのである。ペレット事業の運営状況としては、平成17年1月から生産が開始されたが、売れない、作れない、ペレットボイラーが普及しない状況で地域の保育園等に支えられていた。平成19年には、国の会計検査院から厳しくも公正な改善計画策定命令を受けた。しかし、原価価格の高騰、高まりを契機にバイオマスボイラーの設置が増加することとなった。森林サイクルを作り、国内森林の保全につなげて、商いをして生活をしていく必要があるのではないかと。現状としては、株式会社南信バイオマスのエネルギーではコロナ感染症拡大による温浴施設の廃業でペレット需要の低下・新規施設導入の鈍化が挙げられる。一方、国内ではウクライナ危機・円安によって買い負けており、計画中のバイオマス発電所が事業断念し始めており、発電コストが軒並み上昇していた。バイオマス発電は今後、コスト増で赤字を発生させながら発電することは考えにくく、未利用材をかき集めるか、輸入材に代わる一般材が入手できなければ大型バイオマス発電所は止まる。大型バイオマス発電所が止まれば、国産材間伐材等も行き先を失う。地域電力・地域電源として小型で多数か所に設置、太陽光（間欠性）を補う形でのベースロード電源、FITに頼らない自立発電所、バイオマス灰の利用を地域で完結するという農業との連携等の条件を満たしてオフグリッドを目指していく必要があるのではないだろうか。

(2) 一日目には農家で民泊を経験した。初対面の学生と普段関わる機会のないような農家の方のもとで生活するということはとても貴重な経験となったと考える。農家の方とお話をする中で、自然豊かな街で生活することの楽しさや価値観、若者に期待すること等多くのことを語ってくださり、これからの残りの学生生活や社会人になっていくうえで様々な人と関わり、多くの視点から物事を考えることができる大人になる必要があるのではないかと感じた。普段、生活する中で近隣の人との関わりとしてマンション内ですれ違う人とあいさつをすることくらいしか思いつかないが、民泊で農家の方との生活では地域間の深い交流を感じられる話を多く伺った。住んでいる地域の違いでこんなにも差があることだと実感した。

(3) 今回の地域フィールドスタディでは、地域の環境を活かして次世代に引き継いでいくことができる循環型社会の構築を行っていく必要があると考えた。地域の人々が環境の問題を知り、学び、実践していくべきであるのではないだろうか。そうした中で飯田市の取り組む「うごくくる」といった活動は市民を巻き込み行動する機会となると考える。私たちのような若者が活動に参加するだけではなく、率先して普及していくことで多くの人々が地域に参加するまちづくりが行われ、地域から活性化していくことに繋がるのではないだろうか。まずは身近なことに問題意識を持ち、様々な視点から物事を考えていきたい。

(1) 私はこのフィールドスタディで、環境と経済をテーマに再生可能エネルギーである木質バイオマスと太陽光に焦点を当てて学んだ。飯田市は森林資源が豊富にあることや日照時間が長いことなどから、木質バイオマスエネルギーや太陽光などの再生可能エネルギーを、地域資源を有効活用した地産地消型で利用できる地域である。持続性のある地域を形成するためには、人口減少社会の到来や、生産年齢人口減少下の高失業率社会の到来、社会的セーフティ・ネットの脆弱化などの地域社会が抱える課題を解決することは勿論だが、地域の特性を生かした産業を確立させ、域外マネーを獲得し、地域内で循環させることが重要である。現代の日本は大量生産・大量消費・大量破棄の経済構造であり、この経済構造は社会的な問題にもなっており、地域内にある資源を有効活用する地産地消型の地域経済が確立されることでこれらの問題を軽減することができると言える。つまり、地産地消で循環する飯田市の地域経済のあり方は日本の地域をより良くする成功例だと考えられる。こうした地域経済の形成は日本の経済にも大きな影響を与えるだろう。

地域内産業で得た外貨を地域内循環させることで地域経済が潤うことから、持続可能な地域内経済循環の構築が地域社会をより良くするためには必要である。地域資源を最大限に活用する取り組みを行い、外部への発信力を向上させることや、住民の理解を十分に得ることが、円滑な地域経済循環を確立させるために求められると言える。行政や企業、住民など地域に関わる全ての人が連携し、地域課題の解決に取り組む必要があることが分かった。

(2) 日頃のゼミでもグループで研究を行っているため、グループワーク自体は慣れていたが、他大学と交流することで緊張感を持って取り組むことができた。同じメンバーで行うグループワークではどうしても緩くなってしまうことがあるが、限られた時間の中で全員が積極的に取り組んだこともあり、異なる視点からの意見が多く出るなど、様々な角度から物事を捉えることができた。また、全員に平等に与えられた制限時間の中で学んだことを分析、考察し発表資料を作成することの難しさを痛感した。分析に用いた SWOT 分析はグループワークをする上で有効な方法だと思った。様々な視点から物事を捉える人がいるため、グループワークではその分多くの意見が出て、深く話し合いを行うことができる。それを効率よく分析することができ、より明確な解決策を導くことが可能であった。グループワークでは発言を恐れることなく、全員が参加し多くの意見を出し合うことで様々な視点から分析することが可能となるため、意見を出しやすい環境や、メンバーの意見を尊重する姿勢が非常に重要だと改めて学ぶことができた。

(3) 持続性のある地域を形成するために必要なことを今後のゼミ活動を通してさらに考えていきたいと思う。現代の日本は地域経済循環が十分に確立されていないことなどから、地域の特性を生かした産業とそれらが地域にもたらす利益に焦点を当てて考えていきたい。また、グループワークでは緊張感を持って常に良い解決策を導き出ることができるように、多くの意見を出し合っていきたいと考えている。

本レポートでは私がフィールドスタディを通して感じ取ったこと、得たものをいくつか挙げ、最後にそれらを踏まえて私がこれからの人生の中でどのように活かしていきたいかについて述べていく。

まずは2つの視点から感じ取ったもの、得たものについて述べる。

①勉学に関すること

今回のフィールドスタディで私の班には計5つの高校・大学の学生がおり、もちろんほとんどがお互いに初対面であった。顔も名前も分からず話したこともないメンバーたちと作業をしていくにあたって当時一番の問題だと感じていたことが、どのようにして会話を弾ませ、グループ内で少しでも多く意見や考えを引き出すかであった。はじめましてだったこともあり、アイスブレイクを行ったものの少々遠慮がちな雰囲気が残っていて発言数も多くはなかったため、自分たちのテーマに関してもあまり深掘りができていないのではないかと感じていた。そこでメンバーの1人が、7人班を3・4で分けて調査を進めていたところを3・2・2に分けた。私は3・4のときには程よい量の問いを投げかけては会話の中で様々な考えをみんなに膨らませようとしていた。しかしさらに少人数で進めることになってからは、嫌でも会話や作業は続けたいといけませんが、その分他者との思考や意見の統一が容易になり、スムーズに調査が進んだ感覚があった。そこで私は、皆で意見を出し合うことも大切ではあるが、少人数でさらに集中して物事にとりかかることでも良い結果を生み出すことに繋がるのではないかとグループワークの中で1つの手法を学ぶこととなった。これは私の中ではかなり大きな発見だった。

②それ以外のこと

ここではグループワークとは別に、市長さんや市の方のお話を聞いて感じたことを述べていく。それは住民の市に対する考えがいかに重要であるかということだ。2つ例を挙げると、1つは佐藤市長のお話であったりんご並木だ。この政策は当時の中学生が考案したものであるが、他の住民からすれば少々無謀な取り組みに聞こえなくもない。正直私も始め聞いたときには難しいのではと思った。仮に理性100%の人間しかいなければ問題ないだろうが難しい。ここでは住民と市が互いに信頼する必要がある。もう1つはゼロカーボンシティの分野でおっしゃっていたことで、この取り組みに関する市民の理解度、認知度がとても低かった点だ。どれだけ効率的で自然や生活にも配慮した政策が事業者や行政によってなされようとしていても、住民の理想と異なっていたり周知されないまま意識が足りなかったりすれば良い地域経済活動も創れない。このことから私は、行政や事業者の政策に「取り組む側」はしっかり住民の理想となるまちに近づけてあげるべきだし、住民はそれらに意見を主張していくことが必要だと学んだ。

③今後どのようなことを実践していきたいか

以上のことを踏まえて最後に私が今回フィールドスタディに参加したことで得たものを将来どのようなことに活かしていきたいかを整理する。ここでは主に大学を卒業して就職してからのことについて述べていく。私は将来の夢は中学生のころから地方公務員になりたいと考えており、今でも公務員試験勉強に励んでいる。具体的にどこで働くかは明確に決まっていないが、今回初めて訪れた飯田市で3~4日ではあったが飯田の良さやこれからの展望・課題点など、様々なことを学べた。都会でも田舎でも良い点・課題点は存在する。そのためいつか私の就職先となる自

治体でも、今回のように市の取り組みや市民の意見をしっかり分析し、市民・行政・事業者の総意が合致する地域の財を存分に活用できるような取り組みを実施し、みんなが少しでも暮らしやすいまちを創りたい。これは今回新たに自分の中で生まれた目標でもあるし、達成するまでに必要なノウハウをここで学べたからこそ掲げられるものである。

3日間の飯田でのフィールドスタディに参加して得られた学びとは、同じ地域に住む人々でもその立場や世代、人によって地域に対するビジョンが違うことに自身が飯田市に住んでいる人々の意見を聞いて気づかされた。まず一日目のグリーティングにて意外だと感じたことが一つあった、飯田市は近い将来リニアが通る駅の一つとなるが、私はリニアの開通に対して飯田市は前向きなのだろうと推察していたが、市長は盲信的にリニアに対する期待を抱いておらず、デメリットを踏まえたうえであまり前向きではないと話していた。市長の話の中で出てきた地元の木材を利用したアーチなど市長は地元の強みを活かし、尚且つ地元の経済も回る取り組みは過度な発展を抑えつつ魅力を高める方法として非常に画期的だと感じた。一日目の夜、民泊でお世話になったおばちゃんとの会話を通じて、人との繋がりや次世代への愛がこの地域の強みだと教わった。具体的には地域唯一の保育園が閉園してしまい、このままでは子供たちが離れてしまうと地元の人たちで手を取り合い新しい保育園を立てることで子供たちを維持した。飯田市は良い街だから次世代にまで繋げなければいけないと話していた。リニアの話題を出したところ発展した地域はどうしても地域との繋がりが薄れてしまう傾向があるからこの地域の繋がりを絶やしてはいけないと答えてくれた。一方で二日目以降、同グループの地元飯田女子高校の秦さんやその友達について飯田市の話を知ると、スタバやお洒落なカフェが欲しい。田舎だから娯楽が少ない。早く都会で働きたい。と話してくれた。また、リニアの話を知ると、都会へ行くのが便利になってうれしいと答えてくれた。どれほど娯楽が少ないのか最終日のフィールドスタディにて町中を散策しながら確認したが、飯田駅の周辺に対しての私の感想としてはりんご並木との復興の歴史も面白くまた和菓子屋が好きなので非常に好印象であったが確かに10代、20代の年齢の多感な時期の人からすると惹かれるような強みは確かに少ないように感じた。10代、20代は働き出す年齢であり、その年代の人を惹きつける強みがなければ働きに出るときに地元を離れて行ってしまわないだろうか。発展と擦り合わせをどう行うか、地域の繋がりを保ちながら若者が離れない町をどう作るかが課題であると感じた。だからこそ今一度地域の全ての世代の人たちが話し合う機会を増やすことが極めて重要なのではないだろうか。

勉強ではない点で学んだことは、自らの持つリーダーシップである。Bの二班のリーダー決めは全員平等にじゃんけんによって決められた。それで選ばれたのが私であった。3日間を通してリーダーとして努力はしたのだが、空回りしたことが多かったと感じた。今までの学生生活や部活動で補佐的な立ち位置がほぼ全てであったため、4年生にて初めてリーダーとしての責務を学んだ。自身の得意分野が長時間かけてじっくり体系的に考察することであり、瞬間瞬間での出てきた意見を纏めることが反対に不得意であることを実感した。自分の非力さに悔しい思いをしたが、不得意なことに気づくことができ良い経験となった。リーダーシップに必要なことは落ち着きと傾聴力、また意見の明確さであることを学んだ。

今回のフィールドスタディでの得た学び、視座を活かして、地域再生に繋がる活動にリーダーとして携わり、地域に携わる様々な背景を持った人々を集めて話し合いの場を設け課題を発見していきたい。

私は、フィールドスタディに参加して学んだことが特に四つある。

一つ目は、SWOT分析を用いて調査内容の整理をしたことである。SWOT分析は、強み・弱み・機会・脅威という四つの観点で自社製品やサービスを考査する方法である。同じグループの大学生の方に、SWOT分析を普段の授業で使うか尋ねると、時々使うとおっしゃっていた。大学ではSWOT分析をして四つの項目に分類することで、深く細かく現状把握をしていると知った。

二つ目は、効率よく話し合いを進めることだ。私は、グループワークの際に選択コースのテーマについての知識が足りず、飯田市の政策の仕組みなどに疑問を感じ、大学生に質問しようと思ってもなかなか踏み切れなかったり、意見をあまり出すことができなかった。なぜなら、大学生の皆さんがすでに分かっていることを質問することが情けなく感じたからである。しかしこれは間違っていて、疑問を感じているためにグループワークに役立つことができなかつたのであり、疑問を解消することにより大学生と同等に話し合いができたのではないかと考えた。質問した人、質問された人双方の考えが整理され、情報共有が図りやすくなるため、今後は頭の中で考えていることを言葉にしたい。三つ目は、人前に立つ力を身につけることである。最終日のグループ別報告会では自分たちのグループの発表をするだけでなく、他のグループの大学生が普段授業で行っているプレゼンを見ることができた。私は、高校の英語の授業の一環で英語でプレゼンをしたことがあるくらいで、プレゼンの経験は全くと言っていいほど無かった。さらに私は人前で話すことが苦手で、この日も話す部分は三十秒ほどしか無かったが、フィールドスタディの一日目からとても不安で緊張していた。

実際、私は何十人もいる大学生を前にして、前を見ず原稿だけを見て発表してしまった。他のグループの発表を見ると、緊張する素振りも無くアドリブで原稿無しで話す大学生や、聞く人のことを見て惹きつけるような話し方をする大学生がたくさんいて、とても驚かされた。また、前を見て堂々と話している方の話に興味を引かれた。そのため、私も人前で何かを話す際は、堂々として聞き手の興味を引くような話し方をしたい。四つ目は、周りを見ることの大切さだ。私と同じコースの高校生は三人いて、一人の子は知り合いだったが、もう一人の子は初対面の子だった。大人しそうな子だったが、これから一緒に行動していく子だから仲良くなろうと思い話しかけたら、たくさん話してくれる子で話しかけて良かったと思った。

とはいえ私は、高校生ではなく年上の大学生には自分から話しかけることには自信がなく、気が引けてしまっていた。しかし、同じグループの大学生の方が「お疲れ様」と声をかけてくださったり、私が一人にいる時に積極的に話しかけてくださったりして優しく接して下さったおかげで少しずつ話せるようになった。私が逆の立場だったら初対面の高校生に話しかけるのは勇気があるが、大学生の方々はとてもフレンドリーに接して下さってとても尊敬している。

このことから、今後は歳が離れている人でも積極的に話しかけ、大学生の方のように周りを見て行動し、相手のことを考えたコミュニケーションをしたい。

(1) 勉学に関すること

環境モデル都市である飯田市は地域らしさを出すために「地域内経済循環」を大切にしている。

まず、南信バイオマスとは森林整備資格を持つ伊那地区の 5 社の集まりで、間伐材を原料とする木質ペレットの製造を行う会社です。南信バイオマスの取り組みを swot 分析した。南信バイオマスの強みは 5 社が連携していることで、市内で伐採から製造販売まで行えることだ。弱みは販売先が少ないことだ。南信バイオマスが木質ペレットを製造しても消費できない現状があるため、市民によるストーブやボイラー等の設備導入や利用促進が必要だ。そのためには、設置に対する援助や認知促進のための活動が必要である。

これらが達成されることで飯田市内の木質ペレットに関連した経済が循環する。森林の運営も健全なサイクルで行えるようになり、資源循環型経済システムを作ることができる。

次に、メガソーラーいいだとは、民間企業の中部電力が日々メンテナンスをはじめ、草取りといった環境整備も行っている。行政側は用地提供を中部電力に行った。発電された電力は地域マイクログリッドの電力供給に用いられる。この事業は「行政×企業×住民」のバランスがとれているのではないかと。市内のソーラーパネル工場での生産による地産地消で地域内の経済が回ることがあげられる。また、メガソーラーは中部電力にとって、企業の社会的責任を果たす良い事業内容である。公民館で街づくりに関する学習を行うなどして住民の理解を得ることで、街に環境理解のベースが作られている。このことが事業促進につながっている。このことから、「行政×企業×住民」のバランスが取れていると考えられる。

おわりに、地域社会をよりよくする地域経済のためには持続可能な地域内経済循環の構築が必要だ。この構築を作るためには、「行政×企業×住民」の連携が大切である。それぞれ地域内の役割があるが、主役である「住民」の主体性や理解が特に重要である。地域内経済循環を行うことにより地域らしさも生まれる。

(2) それ以外のこと

フィールドワークを通して、たくさんの意見を習得することができた。実際に足を運び、市の方や企業さんから話を聞くことで資料からは読み取れないところまで学ぶことができた。Swot 分析をする際にも、人それぞれ感じ方やとらえ方が違いまとめるのが大変であった。この分析のおかげでこの事業らを客観視することができた。3 人を中心に意見が交わされており、理解するので精一杯だった。しかし、空き時間や移動時間にコミュニケーションをとり班全体で楽しく活動ができた。たくさんの人といつもと違う環境で学習するのは緊張しましたが、得るものが多かった。

(3) 今後の展望

今後は持続可能な政策について考えていきたい。環境保護と経済成長の両方をかなえる政策について考えていきたい。swot 分析を活用し、客観的にとらえ根本の課題は何なのか考えていきたい。将来、市の職員を考えているので、住民が主体的に参加するためには何をすべきなのか、企業と協力し柔軟に対応していくためには何が必要かについて考えたい。今後、人口減少が予測

されるため効率の良い政策は何か考えていきたい。そして、たくさんの人が住み続けられる街を作りたい。持続可能な地域について考えるいい機会であった。

1. 勉学に関すること

私は今回のフィールドスタディに参加して、勉学に関する面で二つのことを得られた。

一つ目は、知識が少ない問題に対して得ることができる資料を最大限活かして解決する力である。私の所属していた B 班は、メガソーラーと木質ペレットに関する内容だ。問題定義されている内容の規模は大きく、複数の企業が関係している事柄が多かった。また、私は該当の分野に関する知識が少なく、基礎的なことから知識を習得する必要があったため、効率的な問題解決の遂行が求められた。よって、限られた時間における知識習得から問題解決する力がついた。

二つ目は、飯田市の現状についてである。飯田市は交通アクセスの観点から、私の生活圏では訪問が容易ではない地域である。リニア中央新幹線の開業予定による地域活性への期待があるのではないかと考える。地域の名産の観点では、「りんご」、「焼肉」など知名度の高いものがある。特に「りんご」の知名度は高く、実際に街を訪問した際に、住民が一体となったまちづくりを行っていると感じた。よって、飯田市のまちづくりと今後の目指す方向性をしつこくできた。

2. 勉学以外に関すること

私は、首都圏で生活をしており、関西圏の人と日常生活で関わる機会が少ない。今回のフィールドワークでは、立命館大学と和歌山大学の学生と、農家民泊やグループワークで関わる機会が多かった。方言や日常接する文化が異なり、私が持たない価値観を共有することができた。飯田市の特徴だけでなく、各参加大学の学生の地元の文化にも触れることができた。

3. 今後の実践

今回の飯田フィールドワークでは、問題解決能力と飯田市の知識を身につけることができたと思う。1 で述べたが、限られた情報と時間で問題解決をすることは今後の学修の過程で生かせる経験となった。また、初対面のメンバーと課題遂行をすることで、コミュニケーション力の向上に繋がった。今後のゼミの活動や卒論執筆の際に、成熟した議論をするために活かしていきたいと考えている。

飯田市の知識では、「シールド」、「焼肉」、「和菓子」など食の分野をはじめ、環境問題の面においても先進的に取り組んでいることを学べた。木質ペレットの工場見学や「メガソーラーいいだ」の概要説明では、飯田市のみならず多様な企業や地方自治体が関係していることを知った。この経験から、事象をよりマクロな視点で分析する必要があることを習得した。ある社会事象を見たときにより俯瞰的に事象を捉えて、マクロな分析をしていきたいと考えている。

1.

まず、飯田市の林業現有状況によると、長野県の森林蓄積量は全国4位、一億三千万 m^3 である。民有林の人工林率は約5割である。人工林の七割が間伐期を迎えてきた。このまま進むと、飯田市が多くの巨木に囲まれてしまう。その状況と共に、林業労働力が極めて欠如している。日本全国も、都市化と労働力不足の問題で、林業への労働力が欠落している。生産林面積を減らすべく節に、林業作業員数は足りない現状になっている。

今回の実習で取り組まれた南信バイオマスは現地の間伐材を原料とする木質ペレットの製造及び熱機器の普及に力を入れている企業で、原油価格、人件費、人手不足などさまざまな影響により経営が窮境に落ち込んでいる。こんな現状に直面した私達のグループは、地域社会をよりよくする地域経済のあり方とそのためになんか所に注意すべきかを考えて発表した。SWOT分析を用いて客観的に南信バイオマスに大きく左右している要素を並べ出し、効果的な対策案を求めている。

外部環境のプラス要因としては、森林機能を維持するために間伐などの森の整備が必要とされている点や、主要な燃料である石油価格が高騰している点があり、マイナス要因としては、安価な海外産木質ペレットの存在や市内に木質ペレットを使用できる施設が少ない点、市による木質ペレットの利用促進が十分にされていない点がある。

内部のプラス要因として、緑に囲まれた飯田市では、工場や市内と木の距離が近い。そして、工場は一人で回せて、木質ペレットも保管しやすく、冬になると木質ペレットは利用できる気候である。

逆に弱みとして、発電施設がなく、メンテナンスが大変で林道が整備されていないなどの経営に妨げる不利条件がある。

SWOT分析から、木質ペレットを通じた地域内経済循環において、市民と行政の力が足りていないという結論がでて、南信バイオマスが木質ペレットを製造しても消費できない現状があるため市民によるストーブやボイラー等の設備導入や、市内産ペレットの利用促進が必要であり、それらを達成するためには市の設備設置に対する更なる援助や木質ペレットの認知促進のための活動を行う必要があると考えている。

飯田市内で木質ペレットに関連した経済が循環し、それに合わせて森林の運営も健全なサイクルで行えるようになるため、資源循環型経済システムを作ることができると考えられている。

次に、それと対照になるゼロカーボンシティ事例を各方面で分析し、成功できる原因と参考になる取り組みをまとめると考える。

飯田市では環境都市モデルとして、地域住民に対する還元がある環境事業を行っているメガソーラー飯田について、民間企業の中部電力が日々のメンテナンスをはじめ、草取りといった環境整備も担当している。行政側は用地提供を中部電力に行った。発電された電力は飯田市の川路地区における地域マイクログリッドの電力供給に用いられる。パネルの製造は設置当時存在していた、飯田市内にある三菱電機の中津川工場で行われ、地産地消型の取り組みである。この地域マイクログリッドは停電に強く、避難施設への電力供給で災害時の安心安全を確保している。電気だけでなく日常生活における安心を届けている。

これらを踏まえ行政、企業、住民のバランスが取れていると考えた。

具体的にはメガソーラー飯田は、市が目指す「ゼロカーボンシティ飯田」の活躍のカギであることや、市内のソーラーパネル工場での生産による地産地消で地域内の経済が回ることが挙げられる。また、メガソーラーは中部電力にとって、企業の社会的責任を果たす良い事業内容であり、事業による住民への直接的な効果が期待できる。そして、川路地区では、公民館で街づくりに関する学習を行うなどして住民の理解を得ることで、町に環境理解のベースが作られている。このことが事業の促進に繋がっている。これらのことから、行政、企業、住民という三者のバランスがしっかり取れていると考えられる。

最後に、より良い地域社会とは、住民所得が向上すること、住民が地域に対して誇りを持つことだと考えた。そのための手段として、「持続可能な地域内経済循環」の構築が必要である。この循環を回すためには、「行政」「企業」「住民」の連携が欠かせない。どこか一つが欠けても循環が止まってしまう。ただし、市長さんが言ったように、市民としてのみんなは実家の飯田といえば「何もない町」より、飯田市民の一員としての当事者意識がとても大切な力になると思っている。

2.

勉強以外では、グループメンバーと数日一緒に過ごした時間で大切な学習精神と仲間との付き合い、役割分担など集団に融合しないと身につかない勉強ができた。

3.

無論勉強はとても大事だが、毎日学校に通っていても、沢山試験受け満点取れても、今回みたいな講座で現状を把握できたらすぐ現地に行って色々話聞いたり見たりしないと現実離れした環境での勉強は、あくまでも自分の能力にならないかもしれない。なので自分にとって、今回の実践練習は非常に珍しい貴重な体験である。飯田市で学べた地域振興に関する知識でも、知り合った仲間たちも、日本の文化との交流でも、とても貴重な人生勉強の一部になっている。自分自身と自分の故郷に役立てる大切な授業だった。

1.地域内経済循環と環境

今回のフィールドスタディでの学習において最も大切であったことは、地域内経済循環である。これは地域の持続的な発展を考える上で必要なものであり、本フィールドスタディでの活動は全て、地域内経済循環を念頭に行った。私は環境系のグループに所属していたため主にメガソーラー飯田と木質ペレットについて視察し、特に木質ペレットに関しては地域内経済循環に基づいて学ぶことができた。ここでは木質ペレットを例に、地域内経済循環を整理する。

地域内経済循環とは、地域外への付加価値流出を防ぎ、極力地域内にとどめ、地域内で再投資していく循環システムであり、地域内調達率の向上などが課題とされている。飯田市の木質ペレットは、その原料となる木材の生産と調達を飯田市内で行っており、その加工及び販売も市内で完結している。これによって、木質ペレットに関連した経済が市内で循環し、地域の成長につながっている。

また、木質ペレットは地域の経済的な成長のみならず、環境の保全にも役立っている。本来森林は計画的に人の手を加え、伐採と植林によって健全な姿を保つことができる。しかし、国内産木材の需要が低下している現代においては、健全な管理がされずに荒れた森林になってしまう場合が見られる。木質ペレットという形で木材を利用することで、森林の健全な運営の一助になると分かった。

2.実際にフィールドに行くこと

今回の研修では、実際にフィールドに出向いて人と触れ合う大切さを学んだ。事前学習などによって既に理解していると思っていたことについても、現地の方と話をする中でさらに理解が深まると感じたためである。

3.今後実践したいこと

今後は実際にフィールドに出向きたいと考えている。私はもともと、森林のマネジメントや野生動物の管理について興味があり、森林の保全などについての知識はあったが、実際に田舎に行って人の話を聞いたことはなかった。今回の研修中に、少しではあったがそれらに関して現地の話を聞くことができ大変有意義であったと感じたため、今後も現場の人間と交流を持ちたいと感じた。

また、野生動物の管理に関しても地域内での循環を意識したこと、例えば捕獲した動物の地域内での販売促進などについても考えたいと思った。

四日間のフィールドスタディを通じ、得られたことはたくさんあります。

まず、勉学について。私は、大学のゼミで太陽光施設の設置に関する研究を行っており、その調査の一環として今回のフィールドスタディに参加しました。当日の講義では、私のしている研究にも大いに関係のある「ゼロカーボンシティいいだ」についてや、初めてその存在を知ることとなった木質ペレットについて学びました。SWOT分析をするのも今回が初めてで、試行錯誤を繰り返し、時には他大学の教員の力も借りながら最後には自分たちの納得のいくものを作り上げられたのではないかと思います。

分析の結果、木質ペレットの製造を行う南進バイオマスの事例では、市民と行政の力が足りていないのではないかと考察しました。二者の協力によって、飯田市内で木質ペレットを通じた経済・森林の循環が生まれるのだという結論を導き出したのです。対して、メガソーラーいいだや地域マイクログリッドの事例では、行政・企業・住民のバランスがとれており、三者が各々の役割をよく務められているのではないかと考察しました。これらの分析を踏まえ、地域社会をよりよくする地域経済の在り方として、行政・企業・住民の連携の必要性や住民所得の向上や誇りの獲得による持続可能な地域内経済循環の構築が重要であると考えました。また、主役である住民の主体性と理解が特に重要であり、それぞれの立場で「まちづくり」を行う意識を持つことが持続可能な経済活動の創生に必要であるという結論に至りました。このように具体的な事例の弱みと強みを分析し評価することで、与えられた課題をクリアするには何が必要かを導き出すという方法を学びました。

そして、勉学以外で学んだことといえばやはり、グループで活動するにあたっての振舞いです。年齢の違う見ず知らずの仲間たちと議論をするのは、人見知りの私にとってはとても難しいものでした。しかし、私のチームの仲間たちはみな主体性があり、反対意見を恐れず発言をしたり、自らすすんでリーダーになったりしていたので、私もそれに感化され自分の考えを自由に伝えることができました。他のチームの話の話を聞いていると、二人のメンバーだけが議論をして他は皆フリーライダーだったり、議論自体なかなか前に進まなかったりと、かなり苦勞をしていたようでした。このことから、グループワークではメンバーそれぞれの主体性がグループの軸を作り、またグループ全体の空気がメンバー一人ひとりの士気を高めるものなのだと感じました。今回の経験から、グループで協力して行動する際は、常に自分はどうすべきかを考え行動に移し、積極的に意見をしたり、わからないことがあっても投げ出すのではなく疑問を消化することで議論の役に立つように心がけたりすることが重要であると学びました。

このフィールドワークで学んだことは、これから始まる就職活動に活かせると考えています。自分の弱みと強みを分析し、何を伸ばせば有利になるか、自分の良さを伝えられるかを考え、それをもとにして面接やグループワークをこなそうと思っています。実際に、先日参加したインターンではグループワークがあり、今回の経験を活かして参加の意欲を十分に見せることができました。就職活動だけでなく、他者と関わる機会があれば積極的に実践していきたいです。

(1) 持続可能な地域を構築するためにはどうするべきかという議題は観光学部の授業でも取り上げられ、様々な情報をインプットし考えてきました。今回は、それにプラスして経済的な指標や数値、考え方を学べたこと、実際の現場で活動されている行政・民間の方のお話をお聞きできたことが大きな学びだと考えます。

佐藤市長のお話から、飯田市がどのようなまちを目指しているのかそのためにどんな政策が行われているのか知ることができました。特に、飯田は長野県で唯一リニアが通る飯田市はそのことをどのように捉えているのか気になっていた。リニアを気に発達したまちにという考えではなく、リニアに対してまだ強みなのか脅威なのか分からないが、都会のコピーではなく「らしさ」と利便性に焦点を当てたまちづくりを行うという考えでした。人口を増やすために大企業を誘致することなどがよく方法として取られ批判されてきていますが、市がこの方針をもって住民に伝えていくことは住民の意識改革にもつながり、飯田の良さを生かしたまちづくりができると考えました。物質的な豊かさに目が行きがちだが、それ以上の価値や誇りを作り上げていくことが「日本一住みたいまち」に繋がると感じました。

今回は環境チームということで、主にエネルギーという観点から地域の経済について考えることができました。初めて知った木質ペレットや地域マイクログリッド、電力の域産域消という仕組みは今後持続可能な地域、その中での経済循環を生み出していくためのベースになると感じました。人間の生活とは切っても切り離せないエネルギー問題をどう捉え、地域として取り組んでいくかが今後の地域づくりの鍵だと学びました。

(2) 他大学の方とこのような形でグループワークなどを行うのは初めての経験だったので多くの学びがありました。普段は観光学部の学生と議論していると学んでいる内容も近いので、思考や知識量もある程度似ていると感じますが、今回はバックグラウンドや専攻がバラバラなので意見を共感してもらうことや深く議論していくことはこんなにも難しいことだと感じました。しかし、自分には無い視点や考えを知ることができとても参考になり多角化した議論ができてよかったと思います。

実際に民泊で飯田の方と交流しお話をお聞きでき、今まで学んできた飯田が農家民泊の先進地域ということを経験でき良かったです。都会ではできない貴重な体験や温かい人とのつながりは今後も魅力となり続けていくと感じました。

(3) 今回実際の市で今行われている様々な取り組みを学び、持続可能な地域内経済循環とはどのようなものか改めて考えるきっかけになりました。今後はさらに大学での学びを深め、地域振興について観光はどのようにあるべきなのか経済側面からエネルギーはどのような存在であるべきかなどについて考えていきたいです。

私が今回、この活動に参加した理由は、大学生と実際に一緒に学習することを通して、グループワークの取り組み方を学んだり、自分に足りないものを見つけたりしたいと考えたからだ。私は、環境と経済についてのテーマで三日間学習した。一つ目の課題は南信バイオマスについての学習だ。ペレットストーブに使われる木質ペレットの話聞いた。ペレットがストーブだけでなく、温泉にも使われていることを知った。私自身小学校では使っていたものの、中学校からは一切使うこともなく、耳にも入ることがなかった。私のような飯田市の学生たちは、木質ペレットがあることも、地元で作られていることも知らない人がほとんどなのが飯田市の課題だと感じた。二つ目の課題はメガソーラーいいだ、地域マイクログリッドについての学習だ。飯田市では環境都市モデルとして地域住民に対する還元がある環境事業を行っていることを聞いた。行政、企業、住民の三者のバランスがとれたうえで行っていることを知った。二つの活動の話聞き、飯田市と経済の関係について知ることができた。

(1) 今回初めて大学生と一緒に勉強して、グループワークの取り組みを間近で経験して、自分の意見を積極的に言うことがより良い発表にするために大切だと学んだ。私自身、今回の活動を通して自分の考えをほとんど言えなかったことが心残り後悔している。言おうと思っても相応しいのかわからなくて不安になって言えなかったことが多かったからこそ、自分の考えに自信を持って言うこと、そして簡単なことでいいから自分の意見を持つことが必要だとわかった。

また、大学生一人ひとりの事柄に対する質問の質が高いことに気づいた。大学に進学してから、幾度となく同じような経験をしてきて身につけていると思うが、深く掘り下げて質問している場面を多く目にした。質問の内容によって、理解度に大きな差が出るのでより理解するためには、質問の質を上げて細かいところまで聞く必要があるとわかった。そして、新聞を読むことが必要だという事にも気づいた。最近起こっていることの知識がなかったので、環境と経済の関係性を結びつけて考えることができなかった。一つの事柄が経済とどのように結びついているのか、何がどんなことに影響しているのか気づくためにも、現在の状況を知っていることが大事だとわかった。

(2) 大学生の理解力、想像力、語彙力が凄く、その力を身につけるために、読書が大切だと気づいた。内容的に難しい課題だったので、配られた紙を読んだり、話を聞いたりしただけで全てを理解することは出来なかった。大学生とのグループワークの時間に話しているのを側で聞いて、やっと理解することができた。完璧ではなくても、ある程度内容を理解し、言葉で発せられるようになるためにも、本を読む回数を増やすべきだとわかった。

(3) 私は今回の活動で自分に足りないものがたくさんあることに気づくことができた。今後、新聞や本を読んで現在の社会について知識を増やしたり、理解力、語彙力を養ったりしていきたい。小学生の頃は毎週図書館に行って本を借りていたぐらい本を読むことが好きだったが、最近、漫画を読んでばかりいるので、小説をたくさん読んでいきたい。様々な場面においても、人前で話すことが苦手な緊張してしまい、自分に自信がなくて意見や考えを言えないことが多いので、自信を持って考えを言えるように、人前に入る経験をたくさん積んで慣れていきたい。最初の方はうまくいかないし、反省ばかりですぐにはできるようにはならないからこそ、時間がかかってでもいいから沢山経験して少しずつ成長していきたい。そして、グループワークで自分の意見をたくさん出してより良い発表にするための力になれるような人になりたい。

そして、質問力を上げるために身近な些細なことにも疑問を持って生活していきたい。質問を出すことは難しく、大変だから、身近なことから疑問を増やして、力をつけていきたい。

(1) 勉学に関すること

多様な産業・主体の連携と経済をテーマのもといなだに竹 Links や NESUC-IIDA、南信州・飯田産業センターの活動について学んだ。それぞれの活動を簡単にまとめ、そこから得られたことをまとめていく。

いなだに竹 Links は放置竹林の伐採、維持管理作業、周辺の清掃等の景観保全に努めながら、環境教育・産業の一環として、竹チップを使ったボイラーシステムの活用や竹を使ったいかだ作り、国産メンマ「いなちく」の製造・販売などを行っている。これらの取り組みの多くは地域住民や SNS などの告知を受け参加した地域外の人々と行われており、これらの活動を通して地域や産業に興味関心を持つ人が増えることや、環境教育の実施による子供たちの地域学習の推進、さらに都市部の学生・若者との関係人口の創出や移住定住の推進などが期待されている。これらの取り組みを行う NPO 法人いなだに竹 Links の代表である曾根原宗夫さんは、「徹底的に楽しむ」ということを大切にしている。これらのことから、様々な世代の人々を巻き込むことの出来る楽しさを重視した産業が地域活性化に非常に有効であることが分かった。

南信州・飯田産業センターと NESUC-IIDA は、新産業の創出や人材育成、技術はあるが営業力が不足しているといった中小企業のために企業間の連携のアシスタントを行っている。これらは、企業間や住民を巻き込んだ連携が取られており、産業を守ろうとしている。これらのことから、集積の経済を生み出すことにより中小企業の持つ知識や技術の共有、さらに企業の誘致を行うことでより地域の経済性の強化や産業を守ることができると分かった。

(2) それ以外のこと

今回のフィールドスタディで訪れたことで飯田市の魅力を知れた。飯田市のシンボルでもあるりんご並木を見たり、自然を体感し山梨と似た部分を感じつつ、飯田も素晴らしいところであると体感した。また、他の地域のシンボルを知ったことで、自分の住んでいる市のシンボルであったりその市のことをもっと知りたいなと感じた。

(3) 今後について

今回のフィールドスタディで地域住民との共同や地域内ないしは地域外の人々を巻き込んで産業を行うことの意味や大切さを学ぶことができた。これは、私が研究をしているスポーツツーリズムやスポーツによる地域活性化にも活かせると考えている。地域の住民が気軽に参加することができ、楽しむことの出来るスポーツイベントの企画や SNS などのインターネットを通じて地域外の人々へのアピールなどができると考えた。これらを踏まえ、より良い卒業論文を書きたい。また、今回得られたことや経験をこれから始まっていく編入試験や、編入後の学校で活かしていきたいと考える。

今回のフィールドスタディを通して、得られたことがいくつかある。まず、他大学との交流を通じて、異なる学問領域や専門知識に触れる機会が得られてよかった。これにより、学際的な視点を養い、新たな知識を獲得することができた。グループワークをする際に、他大学との協力により、各学生の研究内容の質と多様性から意見が活発に出てスムーズな話し合いになったことはもちろん、新たな知識を得ることもできた。また、異なる視点からのアドバイスを受けることで新しいアイデアも浮かんだ。地元の高校生も交えた学生交流プログラムを通じて、学生（自分）自身が成長し、異なる文化に適応するスキルを身に着ける機会にもなった。フィールドスタディと聞いたときイメージが湧かなかつたが調べてみると実地調査や現地調査とも呼ばれ、実際の現場や環境でデータ収集や研究を行う方法現実的な観察ということが分かり、実際に今回のフィールドスタディでも企業の現場観察を通して課題の現状を直視できた。フィールドスタディは、実際の場所や環境で行われるため、リアルタイムでの観察が可能であり、これにより、事象や現象をその場で詳細に観察し、記録することが利点だと感じた。現地のデータ収集として、フィールドスタディでは、現地でデータを収集でき、これには測定、観測、アンケート調査、インタビュー、サンプリングなどが含まれ、リアルな情報を収集するのに役立つことも知った。今回のフィールドスタディではインタビューの機会はなかったが、実際に地元住民にインタビューする機会が設けられれば、コミュニティのニーズや希望を把握し、それに基づいた方針やプログラムを学生ならではの視点で開発し、地域振興にもつながるのではないかと考えた。環境要因の理解として、特定の地理的な場所や環境でのフィールドスタディは、その地域の自然環境や地形、気象条件などを理解するのに役立ち、これは生態学的研究や地理学的調査に特に重要だと思った。例えば、地形の視点から捉えるとグループ調査で話を聞いた「竹 Links」の竹林の見学が当てはまる。そして、現地の文化や社会をフィールドスタディで特に和菓子屋さんの地域散策を通じて、特定の地域やコミュニティの文化、社会構造、価値観を理解できた。文化や社会学の研究に貢献するのではないかと考えた。これにより、科学的な研究や問題解決に向けた洞察を得ることができる。現地参加者との連携では、現地の人々と連携し、彼らの経験や知識を共有する機会があり、地域の声を取り入れることが重要だと話を聞いて感じた。現地課題への対応として、フィールドスタディを通じて、現地の課題や問題に対する解決策を見つけることができます。これは社会的な改善や開発プロジェクトに関連し、社会人になってからも生かせる力だ。複数視点の獲得も可能だろう。異なる場所やコミュニティでのフィールドスタディは、異なる視点と文脈を提供し、比較研究に利用できる。総括すると、フィールドスタディは現実の状況を探求し、学術研究や社会的なプロジェクトに不可欠な情報を提供する強力なツールだと思う。リアルな環境での観察とデータ収集により、問題解決や洞察の獲得に繋がる貴重な経験になった。

1. 学輪 IIDA、C グループ概要

今回参加させていただいた学輪 IIDA 地域経済フィールドスタディにて、私は多様な産業・主体の連携と経済というテーマの下、共通の課題認識と地域連携、中小企業連携を基盤とした最先端産業について学んだ。フィールドワークとして天竜川鷺流峡復活プロジェクトとして活動をしている「NPO 法人いなだに竹 Links」の代表理事である曾根原様、「NESUC-IIDA」「南信州・飯田産業センター」から話を伺う機会があり、それぞれから話を伺ったのちグループワークを経て理想の地域経済の在り方について発表を行った。

2. 「NPO 法人いなだに竹 Links」「NESUC-IIDA」「南信州・飯田産業センター」について
初めにお話を伺った天竜川鷺流峡復活プロジェクトとして活動をしている「NPO 法人いなだに竹 Links」の代表理事である曾根原様のお話では曾根原様がこのような活動を行った経緯、また NPO 法人の在り方についてお話を伺った。曾根原様が「NPO 法人いなだに竹 Links」として竹を活かした産業や事業を行いながら竹害予防を行う活動を始めた背景として、曾根原様は元々、鷺流峡の川下りの船頭をされていたという。その際、川を下る船上からの景色が非常に汚いことが気になったという。川沿いが汚い理由として竹によって見通しが悪く、ごみを捨てられてしまうという問題が発生。その問題を解決するためにボランティアとして川沿いの竹林整備を始めた。そして、更なる活動拡大に向け補助金等により金を生み出すために NPO 法人としての活動を始めたという。次にソーシャルビジネスと一般ビジネスの違いについて話を伺った。その違いとはソーシャルビジネスは一般ビジネスと違い利益を求めないというものであった。しかし、ソーシャルビジネスだからと言って稼いではいけないというわけではないということ学んだ。ソーシャルビジネスを盾に補助金のみでの運用ではただの地域のお荷物に近い状況になるという話があった。

竹 Links の事業はキーワードとして「皆で楽しくお金を生む」というものがある。楽しいからこそ持続し、楽しいからこそ多世代、他地域に広がりを見せるのではないか。しかし、竹林整備には未だマンパワー不足という課題を抱える。これは多世代に広がりを見せているにも関わらず課題として残っている。

次に S-BIRD にてお話を伺った「NESUC-IIDA」「南信州・飯田産業センター」についてであるが、「南信州・飯田産業センター」の話によって飯田の産業の仕組みと S-BIRD の施設としての役割について理解を深めることができた。最新の施設やサテライトキャンパスを付設することにより、より強力な人材育成の場として重宝されている。「NESUC-IIDA」については、ソフトウェア・ハードウェア・システム開発にわたり部品から完成品まで幅広く対応する約 130 社からなる「企業グループ」である。知能、技術、市場などの経営資源の連携により、NESUC-IIDA では小規模企業の課題である営業力不足と利益率が低い下請け体質を改善すべくスマイルカーブの引き上げを目指している。目標達成のために小規模会社同士の共同受注や大手企業との連携、新産業の開拓などを担う。

3. 発表について

私たちのグループでは話を伺った 3 者の話を基に SWOT 分析を基に結論として、現時点での継続があるが、持続可能性が見えないことを問題提起としてあげた。その原因の考察として人的

資源の枯渇を挙げた。その対策として関係人口移住などの定住人口増加に繋げる取り組みの必要性を説いた。

4. 学習以外の面について

今回のフィールドスタディを通して学習以外の面において感じたこととして、大学3年次における交友関係の停滞状態を脱する機会になったと感じている。多くの地域から集まった大学生の共同生活による交友関係の広がりや想定以上の物であった。3年生となった現在、大学内での新たな出会いが少なくなった中で環境を変えた中での学びは公私の両面で非常に強い刺激を受けた。

5. 最後に

フィールドスタディやグループワーク、発表という学習面と共同生活の面で非常に強い刺激を受けた。また、学習面においては発展していく産業の現状や、ソーシャルビジネスを展開している方の生の声を聴くことができ、これまでにない経験を積むことができた。他大学の学生との協働はそれぞれの価値観の違いなど難しい面もあったが、最終的には完成形に持ち込めたことは私にとって大きな成功体験であると思う。今後は今回のフィールドスタディの経験を活かすことができる場面が多くあるであろう。今回の経験を活かし、これから更なるステップアップをすることができるよう努力していきたい。

私は、今回参加したフィールドスタディの中で、大きく二つの得られるものがあった。一つ目は、分析の方法である。そして、二つ目は、都会とは違う暮らしについて学ぶことがあった。

一つ目の分析の方法に関して、私は今回初めてSWOT分析という方法を用いて、飯田市における多様産業・主体の連携と経済について分析を行った。事業の状況等を、強み（Strengths）、弱み（Weaknesses）、機会（Opportunities）、脅威（Threats）の4つの項目で整理して、分析する方法である。この方法を、用いることで飯田市の多様産業・主体の連携と経済をこと細かく分析することが可能となり、今後の課題や社会情勢とのつながり、ここにしかない強みを具体的に可視化することができた。私は、具体的に分析方法を用いて分析することが初の試みだったため、このような分析方法を用いて分析を行うことが非常に新鮮であった。中でも、今までよりも多くの観点から事象を分析し、意見を出すことができ自分自身の学びにもなったと考える。また、分析方法を用いるメリットに関して身をもって体感することができたため今後も多用していきたいと体感した。

二つ目の、都会とは違う暮らしという部分に関しては、今回農家民泊を行ったことで農家での実際の暮らしを肌で体感し普段自分が暮らしている都会との生活を比較することができた。私が体感したことは、人間関係における人々の距離感の違いが大きく異なるのではないかということである。飯田では、他の家族や農家との距離感が近く、積極的にコミュニケーションをとっており良好な人間関係が構築されていることが見て取ることができた。私の普段暮らしている場所ではあまり、見慣れない光景であったためこのような生活もあるのかと新たな発見につながった。また、自分で育てた作物を収穫して食卓に並べるというライフスタイルも初体験であった。自分で育てたものは、自分なりの工夫であったり愛着がわいていたりするという話も聞くことができ今までにないような価値観を体感することができ、自分自身の農家に対する作っただけだと思っていたイメージが大きく変化した。

このようなことを学び私は今後SWOT分析を就職活動で役立てていきたいとかがえている。SWOT分析は自己分析や企業研究、業界研究など多くの分野において活用ができるのではないかと考えられる。特に企業研究に関しては、企業の強みや弱みを徹底的に分析し今後の課題、展望を提案することが可能になり就職活動の面接において差別化を図ることができ有利に進めることができると考えられる。また、入社後も企業研究で行った分析結果をもとに企業が現在置かれている立場、経営状況を理解意志、様々な提案を行うことができ企業に貢献できることも考えられる。都会とは違う暮らしについて学んで部分に関しては、ライフプランの設計に役立てることができると思う。実際の体験を行ったことで田舎での生活というオプションを追加できるようになった。そのため人生の選択肢が増え新たな価値観を身に着けることができ選択するうえでの抵抗が小さくなっていった。

私は、飯田でのフィールドスタディで新たな価値観や学びを得ることができた。実際に体験をすることで既存の考え方のギャップを感じることができフィールドスタディの意義を再確認する場となった。このような機会があれば積極的に参加を行い自分自身の新たな成長の場を増やしていきたい。

このフィールドスタディに参加して得られた物は非常に多く、以下に勉学に関して得た物、それ以外を踏まえ、今後にどのような事を実践していきたいかを述べる。

まず初めに、勉学に関して得た物として、1 番初めにお話を伺ったいなだに竹 Links の曾根原さんに関して述べていく。

曾根原さんの職業は、元は船頭をしている方で、川下り中に見える竹林のゴミや鬱蒼と生い茂る竹林が邪魔で景色があまり良くないという理由から、竹林の伐採行ったとの事。そこで曾根原さんは楽しむ事を筆頭に、課題解決を図るといった事が重要だと仰っていた。確かに、楽しみながら出来れば作業は自然に円滑に進み、ボランティアとして成り立つ。曾根原さんの職業であった船頭での強みを活かした場面であるなど感じた。また、楽しむ事を重点的にすれば、自然と人は集まっていき、地域内での人と人の繋がりがより強化され、地域内連携の強化地元の小学生達の教育にも繋がり、人手不足も補えるとの事も仰っており、楽しむことは非常に利益が多くあるなど感じた。また、曾根原さんに法人化に至るまでに苦戦した事や今ある課題について質問した所、「正直ないです」と答えて頂き、とても驚いたのを今でも覚えている。曾根原曰く、目の前の解決したい課題に楽しく取り組んでいたら NPO 法人化に至ったそうだ。目的に向かって取り組むのではなく、目の前の解決したい課題に対して順に取り組むことが重要なのだと理解した。その後にお話を伺った NESUC IIDA（飯田ビジネスネットワーク支援センター）さんについて述べると、飯田市の産業の特徴として、小規模製造業、小規模多品種産業、基盤産業としての製造業が主だと仰っていた。また、飯田市の産業はこの NESUC IIDA によって知能、技術、市場などの経営資源の連携をおこなっており、南信州・飯田産業センターは新産業の創出や人材育成、産業の高度化、ブランド化の支援を行っており、地域内での連携が上手く取れている印象であった。この NESUC IIDA と南信州飯田産業センターによる地域内連携は今後の人口減少に直面する日本の地域全体に流用できる手法だと思った。

次に、勉学以外に関して得た物について述べていく。

まず、初対面の人たちといきなりグループを組んで作業をするわけだが、私は初対面の人たちと話すのは得意な方で、リーダーの和歌山大学の T さんを筆頭に、うまくグループの雰囲気作りに貢献できたと感じた。また、班員の人たち以外にも、バス移動や昼食どきを狙って、積極的にアイスブレイクをできたと自負している。グループワーク時にはリーダーと僕と同じ大学の M 君を筆頭に、作業分けや意見の出し合い、班員の意見のまとめ役を積極的に取り組むことができた。発表時には、私は普段から人前での発表が苦手で、今回の大人数に加え、役員の方たちが見守る中、前に出て発表したことは、大きな経験値になったと私は考える。また、私たちの班だけ結論を先に提示し、その後でどのような過程でそのような結論に至ったのかを記す方式でパワーポイントを作ったところ、総括のコメントの方で取り上げて頂き、創意工夫が実ったと感じることができた。今回のフィールドワークの交流を踏まえて、フィールドワーク後に、僕のおかげでグループワークが円滑に行えたと言ってくれた他大学の方たちが数人いて、今回のフィールドワークを通してコミュニケーション能力、人前での発言力、リーダーシップ能力が非常に向上できたのではないかと考える。

以上の内容を踏まえ、今後私は人と話す能力をもっと身につけたいと思ったのと同時に、やはり私は人と話すことが好きなのだとは再確認できた。具体的に実践していきたいのは就職面では営

業のスキルを身につけたい、同じ志を持った人たちと対話を通じて課題に向き合っていきたいと考えるきっかけになったと感じた。

得られた学び

今回のフィールドスタディーで現地の人々のお話を実際に聞いていく中で、自分が事前に学習してきた内容と合致する点や異なる点を洗い出すことができた。

中でも SWOT 分析で取り上げた NPO 法人いなだに竹 LINKs の取り組みはとても印象的だった。竹 LINKs では、竹害に対処すると同時に、竹を利用した竹チップボイラー、竹炭肥料、純国産メンマの製造のように、地域の特産品や観光資源（飯にしかない魅力）を活用し地域ブランドを構築していく取り組みを行っている。また、地域内の連携や協力を強化し、共同プロジェクトや共同購買などの活動を通じて地域全体の経済活動を活性化を目指していて、理想的なソーシャルビジネスであると言える。地域の資源を生かすことができる産業が必要であるという考えを持っていただちにとってはとても興味深い事業内容であった。

次に、今後のリニア開通に絡んだ事業の展開に関してもとても興味深い内容が多かった。今後リニア開通によって首都圏から飯田市内が通勤圏内になるということは非常に大きい効果が見込まれる。それによる関係人口の増加は労働者不足の解決策の 1 つとなりうると言える。さらに専門的な技術を持つ優秀な人材を呼び込むこともでき、彼らに飯田市の魅力を感じさせ、移住に繋げていく取り組みも可能になるかもしれない。また、観光業にとっても交通網の発展は大きいと言える。観光客も今後南信州地域へのアクセスがしやすくなるため、さらなる観光客の呼び込み政策は必須になってくる。「飯田でしか出来ない体験」を提供することで、より多くの観光客を呼び込んでいきたい。

最後に地域内連携に関する学びについて触れていきたい。

南信州飯田産業センターは地域内の教育や技術の向上を支援し、新たなビジネスチャンスを生み出す環境を整えることに注力しており、南信州の地域活性化において大きな役割を担っているということが分かった。また、飯田地域に中小企業が非常に多い。中小企業や NPO 団体では、稼ぐと言う部分で強みを持つ企業が少なく、地域貢献を重要視している団体が多い。その活動によって何になるのかと言うところを考えると、地域産業の役割として地域経済全体で稼ぐ仕組みを強化すると言うことが非常に重要な役割なのではないだろうか。上記に記述した竹 Links を例に、地域ぐるみで伐採、メンマ作り等の交流を通して、大人から子供まで参加して頂き、組織連携や次世代への継承、マンパワーを得る機会を設けることも重要であると考えます。中小企業が多い飯田市では、地域内外に潜在するニーズを明らかにし、販路を開拓する取り組みが必須になってくる。・地域住民や地域企業との対話を通じて、具体的なニーズや課題を理解し、適切な支援策を提供していくことが重要である。

学び以外で得られたこと

他大学の生徒と一緒に学習をしていく中で、自分には無い視点や考え方に触れることができたことがとてもよかったと感じている。また、数日間の短い間ではあるものの、同じ宿舎に泊まり、寝食をともにできたことはとても深い思い出になった。このような機会は、普段の大学生活では経験することはないので、これからの大学生のためにもこの飯田フィールドスタディーは継続して開催され続けてほしいと感じた。また、初めて会った人たちと短い期間で一つの課題を研究し、深い話し合いができた時間はとても有意義であったと思う。

(1) 勉学に関すること

この南信州飯田フィールドスタディでは、総じて、普段の大学の講義で学んでいる地域活性化について実例を知ることによって学びを深めることができたと感じている。実例を知っていると、理論を学んだ時にそれが理解の枠組みとなるので、今後の学ぶことへの理解度も上がるのではないかと考える。事前学習を通じて、地域内経済循環拡大のアプローチやソーシャルキャピタルに基づく共通価値の創造などの、地域活性化に関する基本的な考え方をおおまかにご説明いただいたので、その後のフィールドスタディの内容を整理する共通の枠組みをメンバー全体で共有でき、理解がしやすかったしグループワークも進めやすかった。私はCグループに所属していたので、NPO法人いなだに竹 Links さん、(公財)南信州・飯田産業センターさん、NESCU-IIDA さんのお三方に取り組みされている地域活性化を目指した取り組みについてお話を伺った。竹 Links さんの取り組みは、竹林整備を通じた天竜川周辺の景観美化から始まり、活動の軸が竹林の管理、活用へと発展していったと伺っている。地域の厄介者である放置竹林を整備し、その竹を資源として活用することによって、いかだづくりやメンマ販売を通じた小学生の学びの場の提供、竹ボイラーによる地域資源の活用及び地域経済の循環、メンマの製造販売を通じた地域のPRなど、地域により効果をもたらしている。こうしてコミュニティビジネスとして地域課題解決と地域活性化を結びつけ、かつ事業として成り立っているところが竹 Links さんの特に素晴らしい点だと感じている。南信州・飯田産業センターさんは飯田下伊那における産業の発展及び地域経済の活性化を目指す公益財団法人で、個々の地域企業に対して技術面や人材面、さらに経営面での支援を行っている。NESCU-IIDA さんは南信州地域の工業系企業など126社が加盟する共同受注グループで、3人のオーガナイザーの下、各企業が有する知能、技術、市場などの経営資源の連携を図り、新製品開発や地域内産業連関の創出に貢献している。この2つの組織は直接的にビジネスを行っているわけではないが、各企業の活動範囲内では立場の問題や直接的な利益増加につながらないという理由から実現が難しい、研究開発機能の拡充や経営資源の連携といった中間支援機能を担っており、地域活性化に貢献している。お二方のお話から、地域企業が有する資源や可能性を最大限活用する仕組みと組織の必要性と重要性を学んだ。

(2) それ以外のこと

初対面の学生同士で協力して1つの成果物を作り上げるという経験は、私にとって非常に有意義なものであった。グループワークの中では、話し合いの段階や進捗を踏まえてファシリテーションを行ったり、グループ内の状況を把握してゴールに向かってワークを進められるように配慮したりと、グループワークを円滑に進めるためのサポートができたと思う。逆に、グループ内で分担した作業を自分1人で進めるのは時間がかかってしまったという反省点もある。今回はグループワークにおいて自分が何を得意とするのか、苦手とするのか改めて認識する機会になった。全体としてのワークの進め方についても反省すべきところがいくつかあった。具体的には、十分に作業時間が与えられているからとワークの段階ごとにかかる時間の管理を怠り、最終的には時間ギリギリになって慌ててしまったことや、スライドをパートごとに分担して作り、それを組み合わせるために自分以外の担当箇所については理解の度合いが相対的に浅くなってしまったことなどが挙げられる。それぞれ改善策として、ワーク開始時点で時間の配分を決めておいてその時

間内に完成させること、スライドを分担して作成した後は全員で全体を通して内容を確認する時間を設けるといった対処が必要であったと考える。

(3)(1)(2)の内容を踏まえ、今後どのようなことを実践していきたいか

他の地域の地域づくりの事例を学んだ際には飯田と比較することで、それぞれの地域づくりの取り組みの特徴をより明確に認識できるよう意識していきたい。また、グループワークに取り組む際には、時間管理と全体の進捗管理を徹底したいと思う。

私は経営学について興味があったので、根本である経済を身近である飯田を舞台に学べる機会があることを知って参加をした。

事前学習会では、地域経済振興の考え方について基本的なことを学んだ。地域経済が元気になるためには、まず働き手が増えること、そしてお金が地域内で回ること、更には地域内での交流が増えることだと学んだが、その中でどうしたら地域に人を呼び込みお金を落としてもらうのか、そのための地域ブランディングをどうしていくのかという二点にとっても興味を持った。また、飯田の盛んな産業を継承・発展させていくことが大事だと分かった。

2日目から始まったグループに分かれてのディスカッションでは、各企業の取り組みや地域貢献について現地で学んだ。その際に、自分がいかに飯田の産業について知らないかを痛感させられた。特にいなだに竹 Links の活動は、地元付近だったが全く知らなかったのもとてもいい機会になった。

いなだに竹 Links では、竹を厄介者として扱うのではなく、竹林整備をしてそれを資源・肥料・エネルギー・食品として活用している。この活動は環境保全活動・地域ブランディングへつながり、循環型社会を形成していく上でとても必要なことであると感じた。また循環型社会を形成していくことは、地域経済の発展につながることであり、さらに飯田の経済を活発にしていく上で重要だと考えた。

南信州・飯田産業センター、NESUC IIDA では、それぞれ現在の飯田の各種産業構造や役割と機能、産業復興・人材育成の拠点としての活動についてお話を聞いた。リニア時代を見据えて、新産業創出や地域産業高度化・地域ブランド化を目指して支援を行っていることで、現在の飯田産業を地元だけではなく県外などでも活躍していく為に必要な活動だと思った。また、人材育成は人手不足や若手不足である飯田にとって真っ先に行うべき一番重要な活動なのではないかと考える。

これらについてフィールドスタディを行ったことで、現在の飯田の経済の現状を通じて今後の地域経済の在り方について深く考えるきっかけを得られた。また、大学生と自分の考え方の違いに気が付いた。特に企業の方の話聞いた時に、自分が疑問に思った内容は割と表面的なことが多かったが、大学生は視点が異なり基本的なことや根本ではなく、聞いた内容からさらに発展した内容を疑問に思って積極的に質問をしていた。

また、大学生は必ず自分の考えや意見を持っていて、グループワークの際には積極的に発表したり自分の考えに基づいて意思表示や質問をしていたりして、考え方やグループワークの進め方など参考になることばかりだった。

今回の経験を生かして、地域経済について疑問に思ったことや知識をさらに深く研究していきたい、よりよい地域経済の形とは何なのか自分なりの考えを持てるようにしていきたい。また、グループワークでの自分の立ち回り方を参考にして、今後は今よりもさらに質の高いグループワークにできるようにしていきたい。各グループの発表では、簡潔かつ分かりやすいSWOT分析やPowerPointを作成し、それを淡々と読み上げるのではなく自分の言葉で説明をしたり、アドリブで伝えたり、臨機応変に伝える内容を変更させていて、その姿にとっても感銘を受けた。今まで自分はPowerPointをそのまま読み上げていて、伝えるという姿勢に欠けていたと感じたので、これからは自分で考えてその場で言葉を紡げるように、自分の言葉で伝えられるようにしていきたい。この機会に得られた学びや刺激を、今後の自分の成長に繋がられるようにしたい。

1. 勉学に関すること

今回私が長野県飯田市で行われたフィールドスタディを通し勉学で得られたものをいくつかあげます。まず自分の中で1便印象に残っているのは「天竜川鷺流峡復興プロジェクト」という地域内の共通の課題解決のために、事業者と地域が連携し協働で取り組んだというものです。主な取組としてNPO法人いなだに竹 Links というものを設立し、放置されている竹林の伐採、整備をし地すべり、不法投棄などといった「竹害」を減らすと同時に豊かな環境を作るという活動をしています。その中で出た廃材などを竹チップボイラーというものに変え足湯などを作り地域に貢献する活動も同時に行っています。また、近隣の小学校へ竹を提供し、その学校のイベントに使用して貰うなど「徹底的に楽しむ」という考えを大切にしています。そして、日本のメンマは基本海外からの輸入品がほとんどであるため、曾根原さんは国産品メンマ「いなちく」の製造、販売を行っています。この取り組みはSNSなどを活用し地域外の人々で行われています、この活動のメリットとして、地域や産業に興味を持つ人が増えること、環境教育の実施による地域の子供との関わりや地域学習の促進などがあげられます。

また NESUC-IIDA、南信州、飯田産業センター技術力はあるが営業力の不足が見られる中小企業などに企業間のアシスタントを行っています。この活動の結果、地域の産業の保護、経済性の向上などに繋がるということも学ぶことが出来ました。

2. それ以外のこと

いなだに竹 Links の話になるのですが、やはり地域の弱点を克服し逆に強みにする。有り余るから無くすのではなく、上手く工夫することで地域のひとつの特徴にする。という考えが大切であるということを学びました。今私が暮らしている大月市も同じように現在空き家などという問題を抱えてきます。この時に空き家を無くすのではなく逆に活用し大月市の強みにするという考えを持つことが必要だと考えました。

3. 今後について

今回のフィールドスタディを通じて産業は地域内と地域外の結びつきを大切する事が大事であると学びました。また、今私は研究テーマとして1次産業の担い手の減少を取り扱っています。そこで今回実際に現地へ訪れそして学んだことは私が研究を進める上でとても重要な経験になると考えています。今回学んだ知識、経験をこれからの編入学、そしてその後の学校生活での学びで活かして行けたらと考えています。

今回の地域経済フィールドスタディでは、多様な産業の連携と資源の活用による地域経済の活性化をテーマに、NPO 法人いなだに竹 Links、南信州飯田産業センター、NESUC-IIDA の3つの事例から、その地域における設立の背景や事業内容などのお話を伺った。

NPO 法人いなだに竹 Links は、荒廃した放置竹林による竹害問題を解決し、地域に還元するために国産メンマの生産販売や竹チップボイラーの利用で発熱させるなど様々な取り組みを行っていた。これらの事業を NPO 法人いなだに竹 Links が地域・企業・行政を繋ぎ、連携して行うことによって、厄介者とされていた竹が地域資源へと変換し、共通の地域課題を地域ブランドとして創り上げていた。

南信州飯田産業センターは、地域内産業の発展のため中小企業を支えるコーディネーター的役割を担い、活動支援事業、管理運営事業、技術者育成に力を入れていた。地域経済社会の形成と基盤強化、さらに地域住民の生活向上に貢献していた。

NESUC-IIDA は、様々な技術を持った中小企業からなる共同受注ブランドとして、地域産業の集積化ネットワークを進め、地域産業の振興を図るために設立された。地域の中小企業が保有する知識や技術などの経営資源を実用的に連携させ、部品加工から完成品まで幅広く対応する企業グループとして飯田の産業振興に取り組んでいた。

これらの事例から私は、地域貢献への思いから生まれる地域内外の連携についての学びを得た。どの事例も、自分たちの利益だけを追求するのではなく、その地域に根差し、地域が抱える課題を自ら解決することを目的に活動を進めていた。その結果、地域社会をより良くするために必要である地域住民のニーズをくみ取ることができていた。そのうえ、住民・企業・行政が課題を共通認識することができ、互いに連携した取り組みを行うことが可能になっていることが分かった。また南信州・飯田地域では、地域内連携から生まれた技術や独自製品を地域外にも拡大させ、地域外との連携も強化していた。このことから、地域に貢献したい思いから繋がった地域内外の連携により、地域内で資源や経済を循環させることで地域経済の活性化の促進を図ることができることが明らかになった。

また、このフィールドスタディでは学びだけではなく、様々な人との出会いも得ることができた。飯田市役所の方々、飯田市の案内や事例のお話をしてくださったの方々、農家民泊を受け入れてくださった方々は、地域のことを熱く語ってくださったり、温かく歓迎してくださったり、この地域のことを愛して誇りを持って活動している姿が印象的だった。さらに、出身や専攻が違う他大学の学生とグループワークを行ったことで、普段とは違った角度から考えることができ、新たな視点を見つける機会となった。

飯田市でのフィールドスタディは、日常の大学生活では学ぶことができない知識を身につけることができた。この貴重な経験を活かし、今後も学び続け、地域に貢献できる人材となれるよう努力していきたい。

(1) 勉強に関すること

私は、2つの事業団体について深い理解を得ることができた。

まず、NPO 法人いなだに竹 links という拡大する放置竹林に向けた課題解決に向け、企業・地域・行政が連携する市民団体の元を訪れ、竹害について学んだ。私が住んでいる街には竹林はなく、初めて触れる災害問題であった。詳しい災害内容は、荒廃した放置竹林が地滑りを引き起こしたり、雪が降った際に竹によって道路が塞がれたり、侵入竹の拡大、漂着物と化す枯れ竹、不法投棄されたりなど様々な竹害が引き起こされている。災害は、人間に直接的に害を与えるものだけのことだと思っていたが、この竹害問題では多様で豊かな環境が失われるといった景観破壊も該当する。この問題を解決するために、いなだに竹 links は様々なことに取り組んでいることが分かった。

竹は非常に硬く、土の中で成長して伸びたあと上に伸びる。それを繰り返して家の中に侵入してしまう。それを防ぐために麓から竹を切る。しかし、この作業には多くの人が必要なため、地元の小学生に授業として手伝ってもらっている。そうすることで、若い時から竹害問題について考えることができると学んだ。伐採された竹は、様々な形で地域に還元されていることが分かった。竹チップポイラーという機械を利用して灯油の代替として湯を沸かしたり、国産メンマの販売をしたり、小学生とのいかだ作りなどを行っている。これらは、地域住民の竹害問題についての意識が高まるということを学んだ。

これらの事業の後継者は、地主との話し合いで決める。それは、今ある古い竹を切り、若い竹を切らないようにするため、ビジョンを明確にして共有できる人を見つけ出すことが目的だということ学んだ。

竹 links はこれらの取り組みを行うことで、地域・企業・行政を結ぶ役割を担っているということが示された。このように、竹を伐採し地域に還元することで、自然にも優しく、竹について興味を持ってもらう貴重な機会に繋がることを学んだ。また、他県の人々にも知ってもらう工夫がなされていることも読み取ることができた。

次に、NESUC-IIDA の取り組みについて学んだ。NESUC-IIDA は、様々な技術を持った中小企業からなる「共同受注ブランド」として活動をしている。販路拡大や大手企業との連携など支援を主とした取り組みや、設計や加工などのシステム開発まで取り組んでいる。成功事例として、飛沫感染防止用のアクリルボードを日本で最初に開発し、また、iPhone の背面素材も生産しており、全国的に拡大していることが示された。これらは、六次産業であると考え、六次産業がどのようなものなのか深く理解できた。

(2) それ以外のこと

竹 links や NESUC-IIDA は、多くの機関や人が関わっており、一つでも欠けると機能しないということ学んだ。さらに、これらの取り組みを行ったきっかけは、全て街をより良くしたいという思いから始まっていることだと読み取れた。また、普段のメンバーではなく違う環境で生活する人と一緒に学ぶことで、様々な考え方ができた。他県の大学生から学ぶことが多く、非常に濃い研修であった。

(3) 今後どのようなことを実践していきたいか

私は、飯田市の人々の街をより良くしたいという思いから、有言実行する姿が非常に素敵だなと感じた。私は途中で諦めてしまうことが多いため、自分で決めた目的は最後まで行動することを実践していきたい。また、他の大学生の柔軟な考え方に刺激され、私もなおいっそう視野を広げていきたいと考える。

本レポートでは8月20日から23日の4日間、飯田市での活動を通して学んだことをまとめる。

まず鷺流峡復活プロジェクトの取り組みとしていなだに竹 Links の曾根原さんの講義を受けた。いなだに竹 Links は、拡大する放置竹林に向けた課題解決に向け、企業・地域・行政が連携する市民団体を設立後、法人化された。荒廃した放置竹林がさまざまな竹害を引き起こすことが課題であり、竹チップボイラー、国産メンマ、ポーラス竹炭、いかだなどに活用して厄介者（放置竹林）をお宝（資源として有効活用）にする取り組みを行っている。竹 Links ではいかだ作りや料理教室、小学生によるメンマ販売などの取り組みで地域と連携し、企業とはメンマの製造販売の委託などで連携を取っている。また、行政とは竹林の地主への許可取りや広報活動を通して連携を深めているが、曾根原さんは「地域」「企業」「行政」と三者がそれぞれ独立した団体として連携するのではなく、分け隔てなくそれぞれが同じ立場から一丸となって取り組んでいく必要があるのではないかと提言していた。

続いて南信州・飯田産業センターと NESUC-IIDA の取り組みについての講義を受けた。産業センターは技術開発によって中小企業の発展を支えるコーディネーター的役割をもっており、また人材育成も行っている。NESUC-IIDA は様々な技術を持った中小企業からなる「共同受注ブランド」で部品から完成品まで幅広く対応しており、その例として挙げられたセイコーアドバンスの亚克力板は日本で最初に開発されたそうだ。他にも iPhone の背面素材の製造を行っている事例がある。これらの取り組みから、地域内連携を促進し、地域内での教育を行い技術の向上を支援することで新たなビジネスを生み出す環境を整えることも可能になる。また、農業などでデジタル技術を活用し、より効率的な農業経営ができるような取り組みも行っている。

以上の講義から、地域社会をよりよくする地域経済のあり方について、地域内の共通の課題に向けて住民・企業・行政が同じ立場に立って協働し、連携を深めていく必要があると考える。年齢を問わず交流し、組織内の連携や次世代の担い手の確保が重要となる。次に、地域内経済循環の活性化を促進することも必要である。国産メンマは地域内で製造販売を行い地産地消しているが、新たに地域外からの資金を獲得し地域内に循環させることでより良い地域内経済循環の仕組みが構築され、経済活動の活性化に繋がると考える。産業センターの講義でも住民や企業との対話で具体的な課題を洗い出し支援策を提供、そして地域内に加えて地域外での需要をもとに販路の拡大に向けた取り組みを行うことが必須であることが分かった。地域内の経済循環を活性化させるためには地域内だけに目を向けるだけでは十分でないことが分かったので、今後は今回のフィールドワークで学んだことを活かし、地域の内側と外側の関わりに注目して研究を進めていきたいと考える。

8月20日から23日までの3日間の短期的なフィールドスタディであったが、かなり有意義な時間を過ごせたと感じた。主に、この3日間では他大学同士で編成されたグループで活動することになった。まずは、「竹リンクス」や「飯田産業センター」の取り組みについて教えていただいた。

「竹リンクス」では、鷲流峡復活プロジェクトに取り組んでいるとお聞きした。

川から見る山々は、多様性に欠け、竹に侵食され、景観の乱れから、不法投棄が増えるといった悪循環が引き起こされているとお聞きし、その問題解決のために、竹を刈るといった取り組みを団体から、法人化までさせていた。

竹リンクスでは、行政と市民をも巻き込んだ地域連携を形成していた。このような地域連携は、地域の維持や発展に大いに貢献していると感じた。また、地元の人々が積極的に参加・興味を示すなどすることにより、問題への認知度・注目度が上がると考える。

御二方のお話をお聞きし、そこで得た知識などをグループ内で共有し、パワポ作成に移った。私の班は、女性5名と男性2名であり、なかなか意見が出ず、話が停滞することがよくあった。ある程度時間が経ち、なんとか進めることができ、完成度の高いものができるかと考えているが、差別化を図ることができず、似通ったものが完成してしまったのが、課題だと感じた。また、今回の班では、慣れないリーダーを担っていた。リーダーの役割として、グループ内の意見をまとめたり、振って引き出したりとするイメージであった。しかし、アイデアを出す役割を担ったり意見に賛同したりといった、さまざまな立ち位置に回ってしまい安定感が無かったと感じ、これらの課題が私たちの班の話が停滞する要因になったのではないかと考えている。

産業センターと nesuc-iida では、飯田下伊那における地域内産業の健全な発展を図るため、企業の自立的で創造的な活動を支援する事業などを行うと共に、施設の管理運営に関する事業を行い、活力ある地域経済社会の形成と基盤強化に貢献し、地域住民の生活向上と福祉の増進に寄与することを目的としてはじめた。この産業センターは、技術開発によって、中小企業の発展を支えるコーディネーター的役割を果たしている。また技術系社会人のレベル向上や技能者の養成といった人材育成にも力を入れている。また、nesuc-iida は様々な技術を持った中小企業からなる「共同受注ブランド」として活動をしている。

発表や発表への質問をする際にも、アドリブで話すのが得意な人や、落ち着いて話せる肝の据わった人、噛み砕いて話すことが得意な人、質問の着眼点が鋭い人など、さまざまな人がおり、私もこのような人になれるように成長しなくてはいけないと思う報告会となった。

さまざまな大学の人たちと、同じ宿に泊まったり、銭湯に入ったりなど、楽しい体験ができたと感じる。

順調に感じた竹リンクスにも課題があると感じた。このように、一見成功してそうな事例の中にも、持続性に欠けたり、地域社会をよりよくするためには地域住民のニーズをくみ取ることと地域ブランディングの創出が必要であり、それには地域内連携の強化と地域内経済循環、また地域外連携の強化の3つの要素が挙げられると考えた。時間の少ない中だったので、時間配分に気を付ければ、さらにいい提案ができたのではないかと考える。

今回学んだことや感じたことは、就職活動に役立つと感じた。グループディスカッションでは、時間配分や司会、アイデアマンなどで行っていることと同じだと感じた。今回の課題や培った力で、乗り越えたいと感じる。

(1) 勉学

市長さんのお話や、フィールドワークを通して本当に様々な面から学びがありました。まず、市長さんのお話では、「なんにもないと市民が考えている」というお話がすごく心に残るものになりました。市民は、なんにもないとすぐ自分の街を否定するという点は、多くの地方で起こっていると感じています。実際、先週参加した他の集中講義内でも、岐阜県出身の方が、自分の街にはなんにもないと発言していて、市民の肯定感、愛着度を上げていくことが地域活性化において1番大切なのではないかと考えるようになりました。また、フィールドワーク、グループワークでは、りんごを使った特産品をはじめとした長野県飯田市という地域ならではの、策を考えることが出来ました。グループワークは特にすごく苦戦して、パソコンを持っていなく、編集ができない方が居たり、協力的でない方が居たりして、なかなか進まなかった点もありますが、話し合いを繰り返し、時間内に発表できるまで完成させることが出来て良かったです。他大学の方と実際に会って、グループワークに取り組む機会は貴重であり、良い経験となりました。

(2) 学習以外

今回、初めて農家民泊を体験しました。数時間前に出会った他大学の学生と民泊するということで、事前は緊張していましたが、4人ともそれぞれ大学が違うということで、自己紹介から始まり、すぐに仲良くなることが出来ました。民泊中は、大学生で、今何をすべきか、手伝えることは何かあるのかを考え、積極的に行動することが出来たと感じています。また、民泊メンバーの中で、1番年上だったこともあり、意識的に率先することが出来ました。夕飯に、BBQの準備をして下さっていたのですが、お米から野菜まですべて民泊先の方が作ったもので、感動するほど美味しかったことが思い出です。

(3) これから

今回のフィールドワークを通して、地域を活性化していくために大切な知識や心得を学びました。大学の講義では、いかに地域資源をうまく活用していくかに注目して考えていくことが多いですが、住民や企業の人意識から変えていくことの重要性を感じました。また、フィールドワークが終わってから約1か月が経ちますが、ずっと連絡を取るような友人もできました。私は、コロナ渦で入学し、入学式も行事もすべて無く、キャンパスにも通えない大学生活だったため、実際に現地で学ぶことの楽しさを感じました。飯田市で学んだことを大切にして、観光学部生として、勉学に励んでいきたいと思えます。

私はフィールドスタディで多様な産業・主体の連携と経済（共通の課題認識から生まれた地域連携、中小企業連携を基盤とした最先端産業（航空宇宙産業））について学んだ。

1、天竜川鷲流峡復活プロジェクト

共通課題解決のために、事業者と地域が連携し協働で取り組んだ事例。

2、NESUC-IIDA

地域の企業が保有する知能、技術、市場などの経営資産を実質的に連携させ、受注確保や地域産業の集積化・ネットワーク化を進め、地域産業の振興を図る。

3、南信州・飯田産業センター（工業技術センター・飯田 EMC センター）

地場産品の情報発信・展示・販売を目的に設立された。

上記のことを学んで私が一番興味深く感じたのは天竜川鷲流峡復活プロジェクトの放置竹林についてである。現在、飯田市ではさまざまな竹害が起き、問題になっていることは、竹林の土壌は非常に水分が多く根がネット状に浅く張っているため雨による土砂崩れに弱く地滑りを起こす危険性のあること、放置することにより繁殖力が非常に強い竹は広葉樹林などをだんだんに浸食し侵入竹の拡大を起こしていること、荒れた竹林が不法投棄をしやすい場所となっていること、枯れた竹が川に流れ漂着物と化してしまうこと、降雪時には雪が積もった竹が道路を塞ぎ通行を妨げることなどがある。

現在飯田市では「NPO 法人いなだに竹 Links」が放置竹林の対策や問題解決に取り組んでいる。代表理事である曾根原さんはもともと天竜峡の舟下りをしていたが、舟下りのメインコースである小渋水系県立公園『鷲流峡』で問題視されていたゴミの不法投棄対策に向き合う中で放置竹林という課題を解決すべく 2015 年に市民団体『天竜川鷲流峡復活プロジェクト』を立ち上げた。様々な活動をしていく中で他の地域でもこの活動が必要であると確信し 2021 年 10 月に『NPO 法人いなだに竹 Links』を設立した。

NPO 法人いなだに竹 Links は竹害への対策として、まず竹林整備を始め切った竹を活用することにより放置竹林の減少を目指した。活用方法はいくつかあり、竹を使ったいかだ下りや、竹灯籠看板の製作販売、地元小学生と共に「純国産メンマプロジェクト」のメンマ作り・販売、竹チップにして燃料や肥料にするなどの活用方法を見つけた。現在、豊丘村にある道の駅「南信州とよおかマルシェ」の足湯のボイラーの燃料として竹チップが使われている。竹チップの材料となる竹は一般の家庭からも収集されていて一般の家庭からの搬入には軽トラック一台につき 5,000 円で買取りをしている。また、ボイラーで使用した後の竹は竹炭にして肥料にしている。竹林をただ伐採するだけでなく活用し、買取りをすることにより、自然とまわりの人も竹林整備を一緒にできる仕組みを作り出している。NPO 法人いなだに竹 Links は竹林にも地域にも光が差し込み多様で豊かな環境づくりを目指して活動していることを知った。地域の産業やそれを支える人や取り組みについて知ることができたことが良かった。

また、学習班の活動では、メンバーは県外の大学生の中に地元の高校生は私一人で心細く始まる前は不安だったが、活動が始まると意見を聞いてくれ、分からないことは優しく教えてくれるなど親切にしてもらい、3日間楽しく活動することが出来た。グループの雰囲気良く、意見が出しやすい環境で活動出来て良かった。最後のまとめの発表でプレゼンの一部を担当することになり、まとめに苦労し発表はとても緊張したが良い思い出になった。

高校生の私にとっての世間は学校の中と家と中学校の友人の間くらいで、地域の発展のための問題・課題やそれについて活動している人のことを特別考えたこともなかったが、今回、フィールドスタディに参加したことで地域社会について自治体と企業や自治会等の人の力を合わせて地域のために考え行動していくことの大切さを学ぶことができた。

知ったことを活かし、自分が大人になって社会に出る時には何かの形で地域のことに参加できるようにになりたいと思う。

1. 勤勉で学んだこと

私は、このフィールドスタディーを通して、地域活性化のプロセスを学ぶことが出来た。

NPO 法人いなだに竹 Links と南信州・飯田産業センター、NESUC-IIDA は、地域の特徴を活かす活動を通して、地域活性化を行っていた。NPO 法人いなだに竹 Links では、拡大する放置竹林が様々な竹害を引き起こすという課題から、その竹を利用して竹チップボイラーや国産メンマを作ることで課題解決をし、課題を地域ブランドの創出として活用していた。南信州・飯田産業センター、NESUC-IIDA では、中小企業が技術を持っていたとしても営業不足によりその技術をうまく活用できないという課題から、企業間の連携のアシスタントを行い、「共同受注ブランド」を作ることで課題解決をし、地域外への発信源として活用していた。

このフィールドワークを通して、地域を活性化するための活動からではなく、地域の特徴を活かす活動が地域活性化に繋がることで、その地域に合った形で活性化をすることが出来、地域をより良くすることが出来ることを理解した。

2. それ以外のこと

私は、フィールドスタディーの活動を通して、人との繋がり大切さと、コミュニケーションの重要性を改めて学ぶことが出来た。

民泊では、実際に飯田市に住んでいる人と関わることで、飯田市の良いところを住民目線で知ることが出来、行政と住民の中のずれを感じた。ずれの例としては、住民は、飯田市は良い温泉が多くあることに重きを置いて紹介していたが、行政は、飯田市の温泉についてあまり紹介してはいなかったという点だ。そのようなずれを解消するために、行政とのコミュニケーションを取るための場が設置されていて、活用されていた。フィールドスタディーの中で他の大学の人と関わることで、様々な意見が生まれ、より良い発表へと繋げていくことが出来た。

コミュニケーションを取ることで、情報共有が出来、人と繋がりも生まれ、一人で考えるよりもよりよいものが作れるということを改めて理解した。

3. まとめ

私は、このフィールドスタディーで、勤勉では、地域活性化のプロセスを学ぶことが出来、それ以外では、人との繋がりを学ぶことが出来た。飯田市のことをフィールドスタディーで学んで行くなかで、今後フィールドワークをする際には、事前学習をもっとすべきだと思った。

(1)勉学に関すること

フィールドスタディ初日では、飯田市長に飯田市の特徴やリニアモーターカーに関することについてお話を頂きました。そこで、私が得られたこと、関心を得たこととして、リニアモーターカー開業に伴って、飯田市に必ずしもメリットだけがあるわけではなく懸念点もあり、飯田市のあるべき姿形はどのようなものであるのか、についてです。リニアモーターカーが開業することで都市部へのアクセスが簡単になり、都市部で地方住民が支出することで観光産業が盛り上がり、それによって都市部の経済成長や公共設備の充実が期待できると考えられます。しかし、地方に住む若者が都市部へ出ていくことによる過疎化が進む恐れがあり、更に都会と地方の格差が激しくなる可能性があるため、いざ考えてみると、そもそも飯田市にとってリニアモーターカーの開業が良いものとなるのか難しい事業であると思いました。

私が選択した、CコースのNPO法人いなだに竹 Links の講義を聞いて、竹の特徴上、地滑りを引き起こす可能性があることとされ、竹害が深刻な状況となっていることが分かりました。その弱み、課題をNPO法人いなだに竹 Links はメンマの販売へと強みしており、ただ、私は講義中にメンマはラーメンの時に一緒に食べる以外のイメージが無く、メンマに需要があるのか疑問に思いました。しかし、販売されているメンマのほとんどが中国産であり、国産メンマの販売割合が少ないこと、そしてSDG'S すぎる竹に今後も向き合っていくために、地域と連携し、子供達もその活動に参加することにより、付加価値が生まれていると考えられ、NPO法人いなだに竹 Links によるメンマの販売はニーズに答えていることが分かりました。どのような弱みや課題であっても、工夫次第であることを改めて感じました。

(2)それ以外のこと

飯田市の特徴として焼肉屋の数が日本一であることについて、私はそれが魅力であると感じました。私自身の心理学的な話になりますが、スーパーや観光先で買い物する際に、限定品や〇〇NO.1の商品を購入する機会が多く、私以外にも多いと思われます。飯田市が焼肉屋の数が日本一であることを飯田市民だけでなく全国的に情報発信を行い、私自身の考えとしては、飯田市の魅力であるものを〇〇NO.1として沢山生み出していくことが飯田市を訪れるきっかけになるのではないのかなと思いました。

私は普段、他大学の学生と関わる機会がないため、別地域の特徴や情報を得る機会が全く無い状況です。今回のフィールドスタディをきっかけとして、知ることが出来たことや体験出来たことがあるので、このような活動に取り組むことの必要性や意義を感じました。知る機会が無ければ行動を起こすきっかけにも繋がらないので、引き続き活動を行っていくことと、一人一人の学生が積極的に取り組むことが必要であると思いました。

(3)今後、実践していきたいこと

今後、研究を行う上で、今回のフィールドスタディの内容で言うと、swotのs(強み)に着目して、地域を盛り上げる策を立てることも重要ですが、人口の首都圏一極集中と少子高齢化による地域人口減少の激化により厳しい状況に立たされている地域のt(脅威)もバランスよく考えることが必要であると分かりました。弱みを強みに、そしてまた弱みがあればそれを強みに変えてい

くことを可能にしていくことが重要であると思いました。swotの4つの要素に注目して、今後の研究に活かしていきます。

1.まず勉学に関する事だが、いなだに竹 Links、飯田産業センターについての講義を聞いた上でSWOT分析表を作り内部環境、外部環境のプラス要因とマイナス要因をグループワークでまとめる事によりそれぞれの持つその企業に対する解釈や理解を講義を聞いたうえで意見として持っているものを共有する事でより深い理解に繋げることが出来たと感じる。2つの企業のSWOT表をまとめた結果だが、いなだに竹 Linksに関しては、内部環境の強みとしてアフターユースが多い、ワークショップの開催による理解推進、学校との連携、持続可能な観光の推進が意見として上がりまとめる事が出来た。反対に弱みとして、土砂崩れなどの自然災害やゴミ問題、景観悪化による観光客の満足度の低下、害獣の巣窟になるという弱みが出た。次に外部環境の機会として、観光客を集客できる。地域の国産品をアピール出来る。サステナブルツーリズム・再利用による地域内経済循環となり、驚異としては、景観悪化→観光客減少・リピーターの獲得が出来ない。補助金不足による竹林産業の停滞という問題点を見出し表にまとめた。次に飯田産業センターについてだが、内部環境の強みとして、精密さ、技術、環境試験ができる。地域のニーズを把握出来る。大企業の信頼(雇用)磐石なサポート体験・技術の共有体制がある。反対に弱みとして、人材不足、下請体質、営業力不足があげられる。次に外部環境の機会として、中京圏に近い(流通)・リニア・中小企業が多い(外部委託)・産業の空洞化(海外)・第三次産業の主流化が挙げられた。また驚異としては、人材不足・高価格高品質への抵抗感(景気悪化)リニアによる人口流出が挙げられた。SWOT分析表にまとめる事により分かりやすく利点と欠点を理解出来る事が出来た。また、企業のマイナス要因を考える事によってそれに対する対策などを考えるきっかけにもなりとても有意義な学習が出来たと感じた。

2.今回のフィールドスタディを通して自分はグループワークが苦手だと感じた。自分の意見を分かりやすく伝える事やコミュニケーション能力が低い事が痛感できる機会になったと感じた。勉学的には反省点が多いが、その他の宿泊施設での体験や民泊での体験はとても楽しく中々経験することの出来ない体験だったのでとても有意義だと思った。その場限りではあるけど他大学の人達との交流は楽しかったし、貴重な経験であったと感じる。

3.今回のフィールドスタディを通して、これからのグループワークに対して積極的に取り組む姿勢が大切だということを学んだし、実行していこうと思う。グループワークだけでなくとも将来的には職場でコミュニケーションが必要になったりとコミュニケーション能力は必要最低限つけていかなければならないと痛感したので次にこういう機会があれば積極的に取り組みたいと思う。また、意見が出なかったという反省が自分の中であるのでそこも改善しようと思う。まず話をただ聞くだけでなく、メモしたり頭の中でまとめて少しでも理解しようとする姿勢が大切だと感じたので少しでも改善されるよう努力していこうと感じた。また、グループワーク中に自分の意見が出なかったとしてもやれる事は有るので自分の役割を他の人から言われるまで待つのでは無く、自発的に行動し、実行することが大切だと思った。次に勉学以外の話になるが、大学生という学生生活最後の同次年代の人達が一度に集約するような機会はこの先無いと思う。就職したら後輩先輩と年齢も立場も違う人達が多くなり交友関係を作るのも難しいと思っている。なので残り少くはあるがこういう機会を通してもといる友達との関係を深めたり、新しい人との関わりを増やして繋がりを持ったりすることがとても重要だと思った。もちろん勉学にも重点を置いて努力しなければいけないが、大人になり後悔しないように一つ一つの学生生活でのイベントを大切に、楽しむ事も大切な事だと今回の学習を通して感じた。もう卒業する先輩からの話を聞く

上で学生生活がどんなに重要で儂いものだとすることを改めて実感したのでこれからも楽しむ事は忘れずに生活していこうと思う。

1、はじめに

私は学融 IIDA 地域経済フィールドワークスタディで「飯田市の多様な産業・主体の連携経済」というテーマの下、「NPO 法人いなだに竹 Links」代表理事の曾根原宗夫さんと「南信州・飯田産業センターNESUC-IIDA」の方々にお話を伺いして、概要について述べてから他大学の学生と共に地域経済をより良くするの地域経済の在り方について結論を出した。そこで議論した各内容について述べていく。

2、NPO 法人いなだに竹 Links

はじめに NPO 法人いなだに竹 Links の概要について。代表の曾根原さんが長野県飯田市で天竜川の船頭をとして 23 年間勤務し、舟下りのメインコースである小渋水系県立公園の鷲流峡にてゴミの不法投棄に気付き、竹林が人目につかぬよう遮断している問題に向き合う中で放置竹林という課題に直面する。企業、行政、地域が連携する市民団体「天流川鷲流峡復活プロジェクト」を設立運営してこの活動を他地域に広めるべく、いなだに竹 Links を設立に至った。放置竹林が起こす問題として竹林の重さで斜面が滑り落ち、地滑りや土砂崩れを引き起こしたり、野生鳥獣の住処になり、畑や農作物に甚大な被害を及ぼしたり、ゴミの不法投棄による景観悪化に繋がり、観光客が減少などがある。この放置竹林を伐採し、手入れを行うとだけでなく、竹を小学校の水泳の授業でイカダとして寄付したり、灯油の代わりに竹チップボイラーとして灯油の代わりとなる燃料にしたり、メンマに加工して食品販売するなど地域ブランドの強化に繋がったりと、サステナブルツーリズムを行う。また現在竹林整備は 60 代以降の高齢者が多く、今後担い手不足になる課題もある。しかし、ワークショップ開催や学校との連携による竹林問題の理解促進を広めたり、国際ボランティア学生協会と連携して学生誘致を行い竹林伐採の協力に携わり、新たにマンパワーを生み出し将来的な育成を進めている。

3、「NESUC-IIDA」「南信州・飯田産業センター」

「NESUC-IIDA」「南信州・飯田産業センター」の概要について。NESUC-IIDA については、南信州地域の工業系企業など 126 社が加盟する共同受注グループであり、南信州・飯田産業センターが事務局を務めている。主な事業は 共同受発注事業、企業連携製品開発事業、地域内産業連携事業、情報収集提供事業などである。南信州・飯田産業センターは地域の特色を活かした産業づくり、地域産業の高度化、ブランド化に向けた支援などを行う。また産業支援育成の拠点であるエスバードでは高度な人材育成支援を担ったり、高度で精密さを兼ね備えた技術環境試験ができる施設を持ち、企業支援の基盤強化を図っている。また将来的に飯田市にリニア駅開通予定で、中京圏に近い立地の良さを活かし多くの企業誘致狙っている。

4、地域の課題

NESUC-IIDA、南信州・飯田産業センター、いなだに竹 Link の方々からお聞きした話を SWOT 分析を基にまとめると、飯田市がもつ地域課題として人材不足、産業の空洞化、認知度の低さが挙げられる。人材に不足は、技術を持つ若者が県外に流出してしまう、高齢化による担い手不足、非正規雇用の待遇の低さ、IT 人材の不足、第三次産業への流出。産業の空洞化では、中小企業は製造業に特化している側面が強く、安価な海外の製造業がライバル企業となる。

安価な海外製品の台頭によって国内製品の売り上げ低迷。認知度の低さは地域コミュニティの連携不足。住民の地域への関心の低さ、企業・地域・行政の三者間の情報、技術の共有不足が挙げられた。また地域社会をよりよくする地域経済の在り方について。私たちのグループでは住民が地域に誇りを持てるような社会を目指すために地域内循環経済を促し、地域活性化に繋げるべきだと結論づけた。このような経済活動を創り出していくために注意すべき点として、住民の理解の強化や外部への発信力向上、地域資源を最大限活用する取り組みを行うことが必要だ。また行政やNPO法人、企業だけでなく、個人としても一丸となって地域課題の解決に取り組む必要がある。

5、さいごに

今回の学融 IIDA 地域経済フィールドワークスタディでは他大学の学生と共に、飯田市産業についての学び行い、産業の在り方についての発表まで行った。協働作業をする上で、コミュニケーションの取り方の強化になったと私自身この実習で得られた大きな経験だと考える。また数日間滞在する事での産業や文化の魅力を学び、飯田市に愛着を持つことができた。外部に地域の魅力を知ってもらうには観光で一日だけ訪れるより、数日以上滞在する事で地域をより深く知れて好きになると感じた。民泊も凄くいい経験になったので、今後色々な地域に滞在して、その地域の特色を肌で感じていきたい。

1.はじめに

私は学輪 IIDA のフィールドスタディに参加したことで自身の研究テーマにつながる学びを得ることができた。また、自身の将来につながる学びも得ることができた。このレポートでは勉学面で得られた学びと自身の将来について得られた学びを挙げ、今後の活動について考えていく。

2.勉学面で得られた学び

まず、勉学面で得られた学びについて挙げていく。自身の研究テーマは地域の文化をより良く伝えるためにはどうすれば良いのかというものであり、経済的な発展による地域の活性化よりもよりも人と人とのつながりの力で地域を良くしていくといったことを主軸としている。そのため、フィールドスタディで得られた学びは少ないものの、テーマにつながる学びとして、人が興味を惹かれる物事は文化になる可能性があるということを学びとして得ることができた。これは NPO 法人いなだに竹 Links でのお話にあった、船頭仲間切った竹をいかだにして遊んでいたところ、地域の人々の目に付き、現在では小学校で竹をいかだにする行事があるほどになったという事例から学んだものである。この事例は、仲間内で行っていたことが人々の興味を惹き、それが地域の文化になっているというものであり、私の考える人と人とのつながりの力で地域を良くしていくということに近いものであった。

そのため、人が興味を惹かれる物事は文化になる可能性があるということをテーマにつながる学びとして得ることができた。

3.自身の将来について得られた学び

次に、自身の将来について得られた学びについて挙げていく。挙げられる学びとして、NPO 法人に対するイメージの変化がある。これはいなだに竹 Links が NPO 法人であることから学んだものである。このフィールドスタディに参加するまで私は NPO 法人に対するイメージとして、地域や人のことを第一に考え行動する組織であるというものを抱いていた。しかし、いなだに竹 Links はそのイメージとは異なっており、楽しんで活動を行い、その先に地域の活性化を見据えているというものだったため、衝撃を受けた。この経験から NPO 法人に対するイメージが変化し、結果として人のためになることにつながる活動を行う組織も NPO 法人であると考えようになった。このことから、自身の将来像に対する考えにも変化が生じ、自身への精神的負担を危惧して NPO 法人には参加しないと考えていたものが、自身が楽しむことができる NPO 法人なら参加できるのではないかと考えることができるようになった。これは自身の将来に対する前向きな変化であり、フィールドスタディに参加したことで得ることができた物事の中で最も重要なものであると考えている。また、いなだに竹 Links が楽しんで活動を行っている点も将来につながる学びとなった。今まで私は楽しむことを仕事にすることは不可能に近いと考えていたが、いなだに竹 Links の活動を学んだことによって、困難ではあるかもしれないものの、楽しむことは仕事にすることができるようになることができた。この学びから、将来について難しく考える必要はなく、楽しむことが重要だという考えを得ることができた。

4.今後の活動について

最後に今後の活動について、勉学面と自身の将来についての面の二つの面から考えていく。

まず、勉学面についてである。文化面についての研究であるため、基本的には文化的な活動をしている人や組織に対する調査が主となるものの、いなだに竹 Links のように活動によって文化を生み出している組織があることを学んだため、調査の範囲を限定しないことを重視して研究を行っていこうと考える。

次に、自分の将来についての面である。このフィールドスタディに参加したことで NPO 法人に対するイメージが変化し、前向きに将来を捉えることができるようになったため、今後は将来を考える際に NPO 法人への参加についても考えていこうと考える。

5.さいごに

このフィールドスタディに参加したことで得た学びは多く、自身の研究テーマや将来に対する考えを深めることができた。また、今後の活動について考えたことは様々な物事に応用していくことができると考えられるため、フィールドスタディでの学びを重視して今後の生活を送っていこうと考える。

(1) 勉学に関すること

私は、NPO 法人いなだに竹 Links、曾根原さんのお話から循環型社会のあり方を考えさせられました。大学3年生となり、就活に力を入れ始めたこの夏に、地域のため、社会のために動いている人や企業がいるということを知ることが出来たことで、視野が広がり、よい機会だったと感じています。

私の地域活性化のイメージは、地域の特産物を取り上げアピールしている印象がありました。具体的には、ふるさと納税などが挙げられます。しかしながら、NPO 法人いなだに竹 Links さんのように、地域の厄介者である「竹」を有効活用して、地域の利益に結びつけていることに驚かされました。竹チップボイラーや国産メンマ、竹いかだなどアイデアは多岐にわたっていました。

また、地域の問題や社会全体の問題は一部の大人、政治家のみが解決に向けて力を入れており、そこに住んでいる当の本人、住民の方々は無関心というイメージがありました。また、その無関心である住民の1人に自分が該当しているとも感じていました。これは日本の若者の政治の無関心さ、選挙投票率の悪さとも関係しているように感じています。

そんな中、「竹林整備」を地元住民の方や観光客などの地域外の方と行う機会を設けて、多くの人を巻き込み、地域の問題を解決に導いている曾根原さんの活動は、持続可能な社会を目指していくために見本にすべきだと感じました。

(2) それ以外のこと

他大学の方とグループを組み、一つの問いの答えを導く。初対面の方とコミュニケーションをとり、自分の意見を述べることは難しかったです。しかし、皆、様々な学部に所属しており、特化して学んでいることも違うため、自分とは異なる意見や違う角度からの意見を聞くことができ、面白かったです。短い期間で、仲を深めることができ、嬉しかったです。

(3) (1)(2)を踏まえ、今後どのようなことを実践していきたいか

飯田市は日本の中でも地域経済の活性化が進んでいる地域といわれています。

NPO 法人いなだに竹 Links さんは、地域問題を解決する工程をサステイナブル・ツーリズムとして価値を付与していました。地域だけでなく、観光客にも、相互にメリットを生み出す。このように、持続可能な社会を目指し、活動している方々の存在を多くの人に知ってほしいと感じました。なぜなら、知ること、若者の意識改革に繋がると考えられるからです。私自身、政治に興味がなく、選挙権を放棄していました。しかし、今回のフィールドワークを通して、地域のため、社会のために動いている人々の存在を知り、私も社会の役に立ちたいと感じました。まず、自分にできることとして、「選挙に行く」ことを通して、自分も社会の一員であるという自覚をつけていきたいと感じました。

まず勉強に関することで学んだこととしてあげられるところが二点ある。一点目は、飯田市は地域と行政と企業が連携して地域の課題を解決しようとしているという点、そして市の再開発において市の良さを生かし、独自に開発していく路線を目指している点である。まず一点目において印象に残ったのは飯田産業センターの取り組みである。飯田産業センターは地域にある中小企業がもつ技術力の集約を行っており、中小企業が陥りがちな営業力不足によって技術を生かしきれないという状態を打破しようとしていた。こうした中小企業を束ね、生かしていく取り組みは地域の総合的な産業力を上げたり、大企業の下請け工場に頼った地域産業づくりからの脱却が望めたりとメリットが大きいと考える。また、雇用においても、例えば飯田市であればリアモーターカーの駅ができることは人の流出入が激しくなり、観光客が来るという良い側面と地域の人が大都市に出ていきやすくなるという危うい側面も持っているが、地域の産業力が増すと都市に出なくても働き口があるという状態になり、昼間人口が夜間人口と差がなく、また人口の増加も見込めるのではないかと考える。二点目が勉強に関する以外で市長の話に合ったりリアの駅ができることによる再開発において住民の方と話し合いながら社会実験を行い駅前に歩行者天国を作ったり林業が盛んであることを生かし木造の建築物を作りながら林業に携わる人たちに継続的に仕事があるようにするなど、一辺倒な同じ会社が作る商業施設を作ることを再開発ととらえるのではなく、住民のニーズに応えたり地域がもともと持っている良さを生かして一回作るだけでは終わらない地域の先を見据えているのだなと思った。

私自身が都市の郊外に住んでいて都市圏に一時間でいける距離に住んでいることから都会は都会、田舎は田舎と枠にはめ、それぞれのステレオタイプで田舎だから人が少ないんだなどと考えていたが、こうして自分が住んでいる地域以外の地域に住んでその地域を想って働いている人の取り組みや話を聞いて、それぞれの地域が持つバックグラウンドや今後の展望などを想像し、尊重していくことがこれからいろいろな地域に赴いたりいろいろな地域出身の人と出会ったりしていく中で必要な事であると感じた。

私が勉学に関することで学んだことは主に三つある。一つは放置竹林についてである。私が住んでいる近くでもよく見かけることがあった、放置竹林が深刻な問題となっていることをはじめて知った。気づかないうちに放置竹林の範囲が広がり私たちの生活に影響を及ぼしている。例えば、有害動物の住みかとなり野生動物の住みかと私たちの住む地域や町との距離が近くなっていること。放置竹林の入り組んでしまった場所にごみの不法投棄が多発していること。飯田市の場合、傾斜での放置竹林が多いことから放置竹林の土砂崩れが多発していること。道路に放置竹林の一部がかぶさっており、冬に雪が積もっても溶けにくいということ。雪を溶かすための塩化カルシウムを道路に撒いても日が当たらず塩化カルシウムが川などに流れ悪影響を及ぼすこと。以上のようなことが現在、主に問題となっている。そして放置竹林という一つの問題が環境破壊、生態系などの様々な問題に繋がっており、それらが複雑に絡み合っていることを学んだ。そのため飯田市では複数人の人が一丸となって共同しあっていることがある。例えば、竜丘の小学校の六年生が竹林伐採、メンマのパッケージづくりから販売までを自分たちで行うということ。これは子供たちが自分たちで切った竹で作った筏でのリレーを目的としてはいるが、放置竹林という地域課題を知るところから体験し考え、行動するという一連の流れがある。この一連の知る、考える、行動するが子供達には地域課題について、デザイン学の勉強にもなり、地域の人への広報活動にもつながってくる。また、放置竹林のために活動している方々にとっては、子供たちからの新たな視点で気づくことがあるかもしれない。様々な人との関わり合い、繋がりがあることによって、放置竹林に関して、または新たな問題や課題が出たときに協力し合い課題解決に取り組んでいくことができる。二つ目にNESUC-IIDAについてである。近年はコロナ化の収束が見えてきており、市場では営業活動の再開・展示会等のイベントごとにも増えてきた。そんな中業界によっては仕事の減少や新産業に期待が高まっており、新たな技術・市場の開拓が必要となってきた。また中小企業というのはただ生産性や技術がいいだけではよくない。企業、技術、生産、販売保守サービス、付加価値が必要となってくる。それらの連携をさせ、支援センターとして受注確保や地域産業のネットワーク化を進め、地域産業の復興を図っている。この活動でも、農業、食品産業、医療機器、製造装置等の開発・製造・設計、様々なことが関わってきている。現在では、人手不足や原料の原価高騰によって苦しい中、その中でしかできないことを行っている。NESUC-IIDAは地域の企業の支えとなっている。

三つ目に飯田市という地域についてである。飯田の業ではヤクルトや信州みそなどを開発した人がいる。飯田市では日本一焼き肉店が多く、出前焼き肉も有名である。その他には、水や食品、お菓子、伝統芸能・民俗芸能の宝庫ともなっている地域である。約10年後はリニアも通り、止まるため、多くの方が訪問されることを想定することも大切である。しかし、それだけでなく、上質なローカルを目指し、偏った考え方だけでなく様々な視点から見ていくことが大切である。そのためには、様々な人との関わり合いを増やし循環型社会を目指すことがたいせつである。それ以外で学んだことは、自分が住んでいる地域、生まれた場所についてよく知らない若者が多いということである。実際、私自身もこの飯田市についてあまりよく知らないことが多くあった。そんな若者を減らしていくにあたって、地域の魅力について知り、「まだこの地域に残ってほしい」と感じる若者が増やしていけるのではないかと考えている。そこで私は、この学輪IIDAを通して自分がもっと飯田のことについて知った上で、若者だけでなく様々な方に今の飯田市の魅力を知ってもらえるような活動をしていきたいと考えている。

